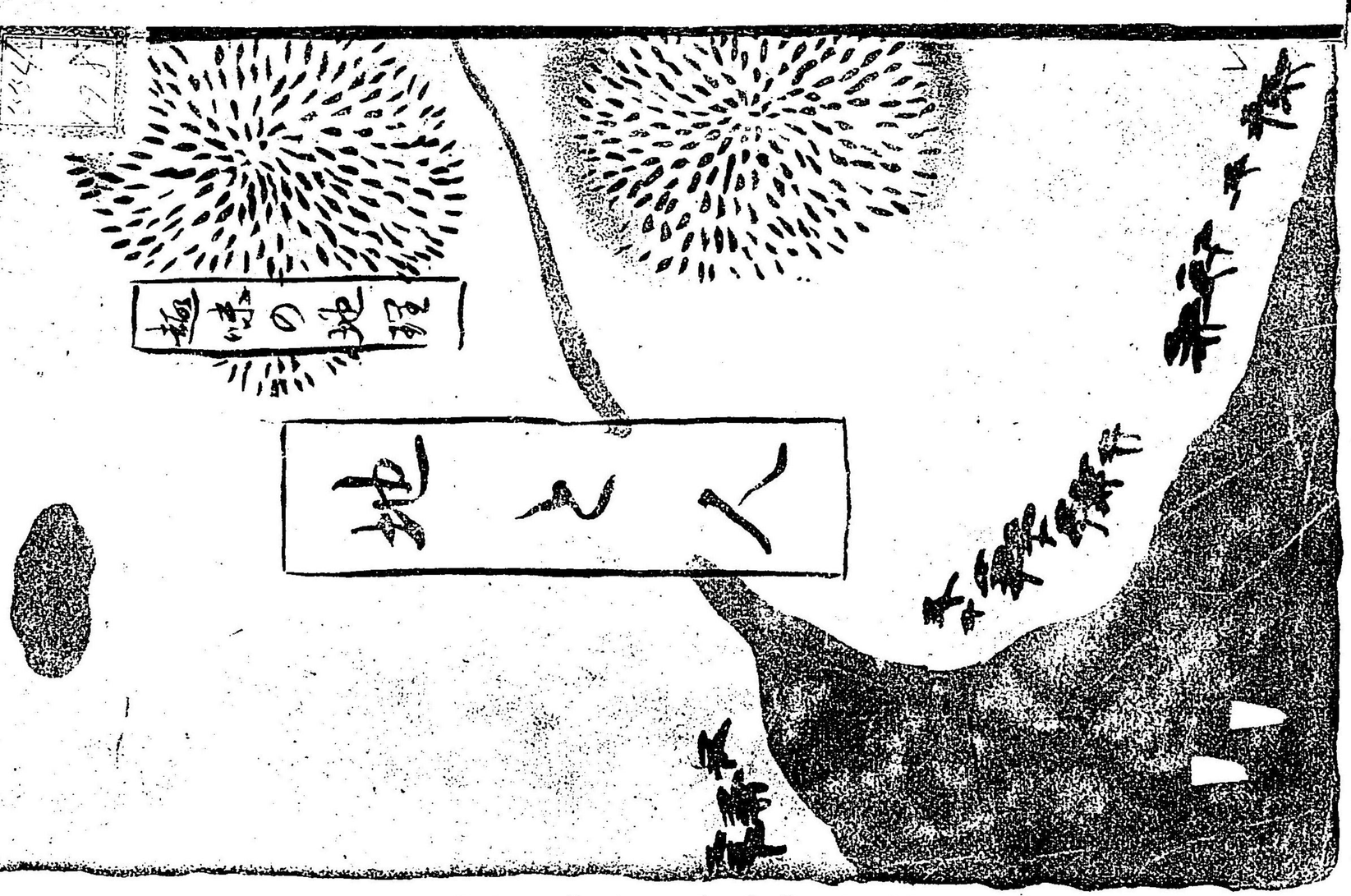

ふゝ
見返しの絵

人間と地

理地の味趣

文學博士 吉田東伍 閲
五味金平 著

182

東京
弘學館發行

趣味の地理　地と人　目次

第壹編　總說……一

第貳編　山と人……一五

一、古人と人……二、甲、山國人と性行……乙、山の美と文學……

三、山の利用厚生……甲、鑛山……乙、林產……丙、鑛泉石材……

丁、水力電氣……戊、高山植物と高山氣象……甲、山と籠城的

位置……乙、山は埋骨の地

第參編　河と人……五七

一、古人と河……二、河と人生……

三、河の美觀河と文學……四、河の利用厚生……二
五、河の堆積作用
第四編　海と人……一一三
一、古人の海觀……二、海と人生……
三、海と文學……四、海と利用厚生……甲、海の交通……乙、海水の洗滌作用……丙、氣候の調和……丁、海洋と產業
五、軍事上より見たる海洋
第五編　湖と人……一五三
一、古人の湖觀……二、湖沼と文學……
三、湖沼と利用厚生……四、湖沼生成の原因
第六編　島と人……一八二
一、古人の島觀……二、島と文學……
三、島と人性……四、島の利用厚生……
五、島は退隱の地……六、島の成生
第七編　雪と人……二二一
一、古人と雪……二、雪と文學
第八編　雨と人(霧霞)……二三四
一、古人と雨……二、雨と文學……
三、霧……四、霞……

五、露

第九編　四季と人……二四二

四季……四季と文學……夏……秋……冬

第拾編　空と人……二五三

一、月と文學……二、星と文學

目次終

趣味の地理

地と人

文學博士　吉田東伍校閲

五味金平著

第一編　總說

仰ぎてかの蒼空を見よ、御空の星の如何に多かるを、吾に翼して虚空はるかに天翔り見よ、かの大空のいかに遠かるかを、宏大なる宇宙は、際涯容易に測知しがたき所、茫〻漠〻いかに遼遠なる、此の宇宙の大は、科學の漸進によりて、次第に開明しつゝあれども、有史以來の六千歳史も、宇宙の全研究の上には、辛じて想像の稍確實なるものを附せるに過ぎず、空中飛行の事稍巧妙の域に達せりと稱せらるゝも、大地をはなるゝ僅に數哩、之を以て空行く雲と徂徠を共にせ

人類智識圏の擴張

りと思はんは愚なり、宇宙研究の事今尙斯の如くなりとせば、吾人の智識圏は未だ大なりと稱しがたきなり。

宇宙の大は容易に窺知しがたきも、吾等を載せたる渾圓球に至りては、今日既に大に明なるものあり、先賢既に言をなして云ふ、地を離れて人なく、人を離れて事なしと、遂に人類は畢世の智力を傾けて、地の研究に着手せり、之を一身の上より見んか、母體を以て宇宙とせる乳兒は、夙くも一家を以て之に代へ、又更に進んで一鄕一町に及び、遂に進んで一郡より一府縣一國に及び、稍長ずるの日朧げながらも世界の大を想像し、日月星辰に疑雲を生ずるに至れり、全人類が進歩はかくの速なる發達なかりしも、社會をなすこと確實ならざりし野蠻の民の、如何に宇宙の小なるべき、舟なく車なく、天然の勢力に壓服妨害せられ、禽獸虫魚の襲來に備へがたかりし民が、交を四隣に求め、器具の整頓に心を盡し、社會の團結次第に堅固に、國家の組織また次第に健全なるに至りて、人類の智識圏は著しく擴張せられたり、かくて一部落の一員たるものが、進んで大なる社會の一員となり、又國民となり、吾と社會國家との密接なる關係を生ずるに至れり。

多幸なる吾國民

見よや空翔りする鳥類を、飢ゑて食ひ、疲れて休息し、また何等團隊の壓迫なく、如何に心の安かるべき、南洋野蠻の島人が、交を他に求むるの要なく、食を自然に求め、野に實る菓物により、水に住む魚介と、野原を走る禽獸とを、天與の食として、食飽くるの日、心靜かに惰眠を貪る時、如何に苦辛なき生命なるべき、されども吾等はかの鳥獸にもわらず、さりとて野蠻の民の群にも投じがたく、如何にしてか、かの蠻人の苦辛なき列に加はり得べき、又如何にして虫魚と其安眠を同うすべき、之等は智あり才ある吾人文明民の考慮すべき所にあらずして、吾等の焦心考慮すべき所は、正に此等の上に超越せざるべからず。

食前方丈の美奠なきを以て憂とするを休めよ、衣に錦繡なきを以て患となすを休めよ、天災地異續出するも、常に吾等が生命の安かるは抑も何によりて然るか、凶惡あり不良あれども、夷狄戎蠻の襲來にも、敵國來襲にも、吾等は常に安

泰なりしは、果して誰人の恩惠によるか、図藏あれども吾は飢うるなかりき、年寒にして吾等は凍死を免れ得たり、

照り曇り熱き寒きも時として
民に心のやすむまもなし　御製
高殿に上りて見れば煙立つ
民のかまどは賑ひにけり

古も今もかはらぬ大君の、いともかたき御惠を受くる吾等は多幸なる民なり、元の大軍海を掩ふて來れる日も、露の艨艟舳艫相銜んで東航するの日も、吾等が安らかに業をなすを得たるもの、皆之れ大君の恩惠なるべく、吾等は多幸なる御代に生れたりと云ふべく、また多幸なる國家社會に生れたりと云ふべし、いでや、此多幸なる吾等の周圍を探究し、一は如何に多幸なるかを知ると共にまた以て報恩の一端ともなすべけれ。

有史すでに六千歳と云ふも、邦家の消長常ならねば、建國二千五百七十二年なる。吾日本ばかり綿々たる長生命を保ちしものはあらじ、嘗に二千五百餘年のみかは、更に今後天壤と無窮なりと云へば、世界幾十の邦家中、最多幸なるものと云ふべく、長年月を閲して國力の次第に隆盛なる所以は、もと國民性行の此が因をなすものありしならむも、日本帝國の地利は、遂に日本をして今日あらしめたる大原因なり、かの國民性と雖、長日月間常に四周よりの刺激を受けて、遂にかくの如き國民となりたるを思へば、無上の敬意を是等地利に拂はざるべからず、今吾等が力をこゝに致して、地利の研究に從事すること、また之が一なればなり。

國民性と地利

島國の利害

吾帝國は、西英國と共に島國なること、よく今日の天惠多き所なれども、更に飜つて國史を繙き來れば、島上に根據を有したるがために、よく自國の危急を救ひ得たること、幸福の一なり、元寇にも露侵にも遂に妨げられずよく今日に至れり、外患あるの日、舉國一致の動作をなすを得たるも、また其一なり、時に鎖國の命あるも、常に多少は海洋に注意を拂ひ、またよく海港を通じて、海外諸國よ

り新文明を吸收し、かの鎖國の日にありても、長崎の一港より洋漢の事情を知るを得たるも之なり、國内の交通不便なるに似たるも、之を大陸諸國の峻嶽高嶺の妨害をなせるものと比すれば、國内の交通は敏活なるなり、從て日本は外國文明を吸收せるの日、全國忽響應して、文明の新空氣に浴せんことを苦心せり、又一方には島國なれども、常に進取の氣象ある國民なれば、之の性行と共に寧ろ急進の弊あるまでも、新文明を吸收したり、佛教來り儒教來り泰西文明來るの日、皆かくの如くなりしなり。

四面環海の島國は、海外いづれの邦家よりも物心兩界の輸入を容易ならしめ、一の文明入るの日、また他の文明の輸入を妨ぐるなければ、海外文明の吸收吾國ばかり速なるはなかりしなり、大化改新大寶令時代の支那文明に於ける、明治の泰西文明に於ける皆之なり、採長補短の事は島國の特權なるの觀あり、支那の西より、英佛獨墨西葡の南より、米國の東より、各特長ある文明を輸入せり、されども一面大に意を強うすべきものあり、世人動もすれば、此急進主義を見

て、直に舊物破壞なりとし、其革命的行爲を非難するものあれども、吾國史を繙き、吾等の祖先がなし來れる徑路を見ば、疑團忽霧散するに至らん、大化大寶の事、誰人か急進といはざる、而も大化の事ありてより、以來五百年にして、鎌倉時代は到來せり、幾多の文物はこゝに一大變革を見るに至れり、即ち奈良朝の日本固有の文明と、平安の海外摸倣文明とは、奈良にも京都にもあらざりし、關東を中心として、折衷の大業を成就せり、一面より觀察せんか、莊儼の態なく、華麗の色なく、何等特長なき文明なるに似たるも、之れ島國人の常になす所にして一面は急進的輸入を奬勵しつゝも、他面には舊物保存の保守傾向あり、兩者は時〻衝突せる後に於て、快く調和をなし、鎌倉の實質ある文明をなしたるなり、明治の五十年は海外文明の吸收時代にして、此以前には德川氏の日本固有の文明あり、今は新舊の文明衝突しつゝも、次第に調和せんとする時なり、かくて近く巧に調和せられたる時代は來るべきなり。

また島國は、事あるの日、海上に雄飛せざるべからず、茲に於てかかの進取主義

は海外に發展せんとするの傾向あり、神功皇后に成効せる、征韓の事も、幾多消長の後、遂に日韓は合併せられたり、名の如何形式の如何は、又問ふ所にあらざりしなり、たゞ二千年の古より、吾國民の進取的精神の存在せしことを證せる征韓役なりとせば、神功皇后の後人材なかりしも、秀吉の大業の成就せざりしも、南洲先生の志を遂げざりしも、皆咎むるの要なきなり、たゞ此心ありて、二千餘歳史は遂に活躍せるなり、人は小なりと言ば云へ、先づ大八洲平定の後、蝦夷を我有となし、琉球臺灣樺太千島より、遂に半島の全部に及び、河を渡り南滿に發展せるを思はゞ、何ぞ無用の歎をなすの要あらん、吾國は急激の領土擴張なかりしも、孜々として怠らざりしなり、若々として、寸尺を進めたるなり、今後の日本もかくの如くならざるべからざるなり、

日本が島國なりしと共に、日本は山嶽多き國なり、火山多き國なり、地震の國なり、かくて之等自然は、また幾多の恩惠を與へたり、未だ此一事のみを以て、學界の誇となしがたきも、大森今村諸教授によりて研究せられし地震學が、世界に

日本山川の影響と日本人

於ける如何なる位置を有するかを思へば、快哉の念なき能はず、日本に山多きは交通の不便なることあれども、此崇高の山嶽が、吾等の心神を動かし、偉大なる影響を及ぼせるは、かの山の如く純潔なる國民性にても知るべきなり、山多き所河また多く、清流常に流れてやまず、我國民の清廉なるも、潔癖あるも皆之なり、吾國の山河は秀麗なり、此秀麗の氣は常に國民の心情を支配せるなり、千古不易なる芙蓉峯は、世人の仰いで尊敬に吝ならざる所、此心を以て、萬世一系の天皇を仰ぎ千古渝らざるなり、新高山あり、高距富士を凌ぐものあれども、遂に國民の尊敬は芙蓉峯を去らざるなり、されば たとへ時の天皇より賢なるものありとするも、國民は源流遠くして其流清き皇室を棄てざるなり、まして世〻の天皇の允文允武恩惠大海の如く、聖賢峻嶺の上にあるものに於てをや、また國民は山河の明媚を愛し、こゝに俳味ある高雅の心情を生み出せり、大厦高樓の壯大なるよりも、寧方丈の茶室を愛するなり、こゝに自ら文學なる、日本の俳句は實に之なり、雄大ならずと批評するものもあらん、されども雄大は十

日本人の美術心

七字句にも充分言ひあらはされたるにはあらずや、日本美術之に生る、小なりとて笑ふをやめよ、之れ日本の特長なり、かの日本畫を見ん人の茫たり漠たる墨繪が、寫眞的密畫に及ばずとなすものは、日本美術否美術の全部を解せざる人なるべし、かの刀劍を見よ、小なれども其精神をこめたる鍛冶が技工は、遂に外人の摸しがたき所ならずや、日本の天然が日本國民に及ぼせる影響は決して之のみにあらざるも、今は項を改めて、地勢が海外人を動かせる狀を見んとす。

ロシア人と地勢の影響

日露戰役はロシアの敗北に歸せしも、吾人は之を以て、ロシアが總ての方面に於ける劣敗と目しがたし、又吾等自ら期して、決して今後と雖ロシアの下に落ちずとなすも、ロシアと雖常に日本に敗るゝものと云ひがたし、凡そ過去の實際に徵するに、武力の點に於ては、却て文化の劣れる國にして、戰爭に勝利を得るもの多し、文化の進歩はやがて文弱を伴へるに對して、未開の國が常に武强を保てるものなり、鎌倉時代に於ける東國武士の如き、又ロシアの如き、或は元の如き皆之なり、日本が近來著しき文化をなせる時にあたりて、ロシアは依然未開の狀態にあるもの多し、之れ却てロシアの恐るべき所にして、一方にはスラヴ民族の特性が、吾人の注意を惹くべき者あり、其數に於て日本に二倍せんとする人口と、其地勢を見るに、北方歐洲の大平原を有し、領土と共に山川原野の配置皆大ならざるはなく、此の大地勢の上に育生せられたる人民が、一面は精緻ならざるとの缺點あるも、其胸度は大なり、其計畫する所も大なり、其周圍と云ひ其心神體軀と云ひ、皆かく雄大にして、而も上には常に偉大なる皇帝と宰相とあり、吾が日本民族の憂とすべきは實に之にあり、今や日露の國交日に親密を加ふるに至れるも、飜て思へば、胸中、大に安んぜざる者あり、彼の大軍が其長大の身軀を擁して、偉大なる將帥に引率せられ偉大なる帝王の御志をつぎ、大舉一事に力を用ふるの日、其軍費や多大なるべく、其他交通系や大迅速なるべく、其大なる戰鬪力を以て來れるの日、吾等は世界の平和をいかに唱道せんとするも、また如何とも施すなきなり、ましてかの多數民人中には、常に偉大

恐るべきロシア人

なる人材生るゝありて、國交の上に於ける樽俎折衝の如きも、極めて巧妙にして新進の日本が之と雌雄を決するの日、充分の決心なかるべからず、日露の平和ポーツマスに結ばれんとするの日、吾人は小村ウイッテ二大臣の並利せる寫眞を見たる時、地圖上に於て日本が試みたるが如く、大よく小を壓するものあるを信じ得ざりき、更に之を文學の上より見んか、明治の今日ロシア人にして日本文學を飜譯すること日本のトルストイツルゲネーフに對するが如きものありや、吾は戰勝國なりとの考も、是に至りていたく減退せるの感あり。

フランス人

普佛戰爭に敗北して以來、佛國遂にドイツの敵たりがたしとは一般に唱へられし所なるも、今や佛國は大に覺醒せる所あるに似たり、もと之れ西歐の雄たるもの、今後の活動は大に留意すべきものならん、さはれナポレオンを生みたるものは、南方の一小島コルシカなるも、ナポレオンをしてよく彼の人物を大成せしめたるは佛國なり、其政治は今日共和政治と言はるゝも、其中央集權の確實なること、他共和國と同じからざるなり、かの清朗なるフランスの空氣と、かのセーヌロアール以下の河流が極めて美しきとは、其國民性を相助長して、遂に美術工藝の國を作り上げたり、世界流行の中心たること、他の强國が如何に苦心するも及ばざる所にして、潔癖なる國民はルイ十四世を生み、ヴェルサイユの宮殿を營み、巴里の市街を建造し、加之、使用せらるゝフランス語は、語調高雅にして、一種の世界語として、各國上流社會の流行語たること、又研究すべき價値あるものにして、一方には佛國人が輕躁なりとの非難あるも、佛人がよく日本人と類似する點あり、其美を愛し高雅を喜ぶの結果は、幾多の弊害を伴ふものあれども、輕快にして凝滯せず、物にあたり事に處し、また交際場裏に於て花々しき振舞をなせるが如きは、皆佛人の長所にして、他外國人の及ばざる所なり。

伊太利人

伊太利の佛人に類する性行あること、また稍フランスに似たる地勢の存するによりてなり、溫和なる氣候、美しき山河と海洋は、伊太利人の藝術を高雅ならしめたるも、古ローマの盛觀なく、ラテン語ローマ法は世界の重要視せらるゝ

オランダ人

那、人、獨

西班人

も、伊太利が殖民人として海外に嫌はるゝは、果して何に因するものなりや、温和なる氣候と、美しき邦土とが、却て伊國に災をなせるものにはあらざるか。和蘭人が水と戰ひ、水を服したるの後、遂に進んで海上に其勢力を振ひ、東洋の領土の如きは、却て其支配に困せるの感あるも、近世に於けるオランダ人の活動は、實に殖民史上に注意すべきものにして、天與の利よりも、地より受けし苦き教訓が、遂にオランダ人をかく動かせるものにして、北歐に於ける那諾人の活動もドイッ人の活動も、多くは地より受けし苦しき訓戒と、天より享けし少き恩惠に反抗して起れるによれるものなり。

尙更に吾人の大に注意すべきものあり、西班牙人之なり、中世に於ける西班牙の勢力を見るに、西北米大陸にも又南米にも各地に殖民地を有して、國力恐るべきものありしも、海外發展の急激なるために、殖民の海外に赴くもの極めて多く、中堅たる國民の數の減少すると共に、國內には幾多の弊風續出し來りて、民人耕作に努めず、寄腴ならざる土地は、次第に荒れんとするにあたり、水源の涵養を怠りたる結果、山林は伐採せられてまた補ふものなく、洪水多く田畑荒廢に歸し、益國力の減退すると共に、本國の勢力消長と著しき關係ある殖民地も、又次第に衰頽して、母子共に瀕死の狀に陷るに至れり、茲に於てか、吾人は海外殖民も奬勵すべく、之と共に國內の產業も奬勵せざるべからざるに想到せん、瑞西の今日あるも英國の益隆盛なるも、後章更に述ぶる所あるべし、かくも、世界各國の狀態を檢し去りたる後、既に研究し得たる自國の狀態と比較したらんには、少からざる利益を國運發展の上に見るを得む。

以下編を改めて、地勢の一部と人類との關係を明かにする所あるべし。

古人の山觀

第二編　山と人

一、古人の山觀　史有て以來幾千歲、東西文化の程度各異なりと雖、人文發達の跡明に、蒙を啓き、味を解き、研究探査なきはなく、之を神仙に歸して恐懼し、造化の大力に擬して疑はず、靈あり、妙あり、不可解不可思議山積せる古代文明は、今

や次第に文明の曙光に均霑して、怪もなく疑もなく明皎たり、意義明白條理井然として、人智の及ぶ所、一片の疑雲をも認めざるに似たり、まして日進の文化、如何程迄進歩すべきかは豫想しがたき所なれども、今靜に、今日文明に到達せる徑路を探り來らんか、一朝一夕にして、急激の進歩發達を來せるものにあらず、漸を逐ひ汲〻倦まず孜〻として他かず、父子相傳へて研究努力せるもの、正に今日の文明にあらずや。

されば古史幾千歳の古にかへり、古人の思想如何を考ふるは、正に今日を以て古を推し、更に今日を以て未來百千年を測らむとするもの、こゝに古人が山嶽丘陵を如何に解釋したるかを見るに、文明進まず開化未だ初期にあるや、交通の途開けず、人類の數多からず、從て人〻は、未だ人の和を以て地の利に勝つを得ず、人〻地利の最たる水邊または平坦なる地を求めて、之によりて生活の途を講じたること明に、かの樹木森たる丘陵や、彼等に何等の利益を與ふることなく、まれに彼の平坦の地が、水澤沮洳たるの時、山麓に路を求めて往來し、後

世學者が大和(山跡)の語原を此に歸せんとするに至れるものにして、湖沼の畔大河のほとり、今日美田好畑の存在せるあたりは、古人の遺跡を見がたく、却て今日往來するものなき丘陵の上に、古人の遺物を遺せるものは、古人往來の證なるべく、また時に武藏吉見村百穴地方に見るが如き、古人生活の遺跡を見ることあるも、蓋之れ少數にして、地理平坦膏沃なれば、必ず平地以外に出でんことを企圖せず、獵狩の勇群をなして跋渉を企つるものあるも、多くは山麓を主としたり、赴々たる武夫の赴く所、既に多くは平地附近の一少部に限られたる時に、婦女子年弱の輩は勿論、平地以外に歩を出さんとせざるべし、かくて人々は相援けて、山丘を恐怖し、之を奇怪視し、また神靈視して近づかんとせず、まして峻嶺遠く連るものを見ては、其の窮る所の何所なるを知らず、嵯峨の山を見て巍峩の嶺を望み、高距千萬丈なるを知らざるや、彼の白哲人が、マルテルフォルンの峰を指しては、神聖なる靈峰は天に冲し、昇天の唯一階段となし、生きてまた此の峰に攀んことを企圖するものなし、御山と云ひ、靈山と云ひ、神山と云ふも

高天原
アララット

の、皆之れ神聖視せられたるものなり。

更に各國開闢史を見るも、一方常に天國高天原の存在すると共に、他方には山嶽を以て高天原に最も近きものとして、開闢史に關係深きものあり、西洋にアララット山ありて、ノアの洪水と伴ひて聖山の名を得、天下悉く水に溺れて生者なく、唯一對夫妻アララット山上に水を避けて、子孫之より繁孳すとなし、支那に大洪水ありて、またアララットの傳說に似たり、之を吾が開闢史に見んか、吾人の祖先が尊敬措かざる高天原は、吾人天孫民族の故地なりとの傳說あり、後人高天原の所在を究めんとして、苦心の結果、之を海の外に求めんとするものは、日本民族の發祥地を韓國となし、支那大陸となし、又更に中央アシアとし南洋とし、或は印度とせんとするもの、牽强附會の說を出すに至れり、又高天原を國內としては、伊勢大和日向常陸の如き、尊嚴なる神社あるの地方を指して高天原となし、之に天の浮橋を架し、又吾が神代史に見る所の地名を引きて、之に附會し、後人をして迷多からしむるものあるも、もと之れ等の事情は、東西其の揆を

山神
道場
山門

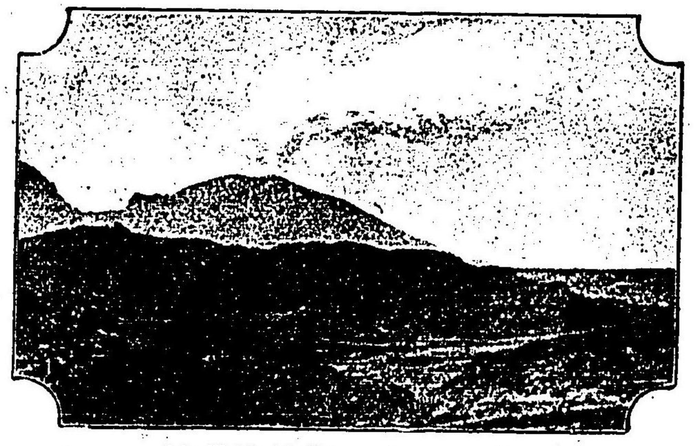
一にするものにして、高天原所在如何、天國實在の有無の如きは、また閑人の研究に委して、吾人はたゞ古人がかゝる神聖の地をも山岳に求めんとするの理由を究むるを以て限りとせむ、之れ即ち山岳が神聖なる靈場と思はれ、神秘不可測の境と目せられ、進んで之が探險研究に從事せんことなどは、夢想だも及ばざる所なり、白雪皚々たる銀鑿の天に冲し四季を閱して改めざる時、山靈之に籠るとなすもの、泰山悠々として雲表に聳ゆる時、大風あるも强雨あるも、毅然として動せざる時、禪定の感なき能はず、かの峻峯を指して、かの峯海となるも、起誓決して渝るまじと誓へるものの之なり、支那五山の中、泰山之が首班となりて、大山の名を横にするも之なり、山の靈たることかくの如く、茲に神佛寓す、山神あり、山王權現あり、天狗あり、大山祇を祀り、大巳貴を祀れるもの皆之のみ、山靈あり神仙ありて、一は精神修養の靈場となり、佛者道士の研究道場となるものあり、西にはローマの靈山あり、天竺に釋尊研覈の山あれば、支那また名山を以て道場となし、日本に至りては本山となり山門となる、叡山ありて天台の

道場たり、高野山あり身延山あり、眞言日蓮の道場たることまた同じ、道を研め法を修するものは、先づ險山を攀ずべし、之れ難行苦行の第一階なり、山中に入るは交通不便なり、美味盛裝の望絶たざるべからず、山門由來女人禁制の境たる上は、五體の欲を斷ちたりと云ふべし、而も千歳不動の山に對し、萬年不斷の岩清水を汲むで八功德水となし、峯の常磐木の操を賞して七重寶樹に比らべ、清爽の風を吸ひ、玉の如き露を啜ひ、以て山海の珍味となし、一陣の枯風樹梢を吹ひて、萬籟聲を秘め、雷鳥一度鳴去して、山靈眠るの境に立ちて、達磨九年の面壁坐禪をなすもの、正に四圍の境遇より脱却し慾情の邪念を去りて、現代現境より超越し、修法研道をなさんとするもの、一は怪力魔神の住居として身體武技の練習所たり、九郎判官は鞍馬に入りて武技を磨かんとするや、天狗來りて之を導んとなすものあり、膽小なるは天狗の怪力に敗れ天狗の搔攫ひとなり、膽大なるものはよく魔神に抗して修練の効をいたすとなすもの、傳說口碑之に生る、皆之れ一に山の靈たり仙たるもの、山に入りて出でざるもの山人あり

開山の先達

火山に贈位

仙士あり、之等の人々は、時に神仙の術を天狗より授かれりとなし、仙藥を作りて窮者に施すに至り、山の靈たること益著しく、稍後世に至りては、登山の人次第に多きを加へ、其靈次第に世人の注意を促すに至りても、道者と云ひ、先達と云ひ、白衣の道士先づ開山となり、道を闢き頂に通ずと雖、自由に登山するものなく、多くは先達の先導によりて登山を企つるに至れり、かくて山頂には有形の神標を建立するに及び、山頂社祠あり碑石あり、山の性質明かなるや、山地溪谷の幽地を探究して、瀧を求め瀧あれば不動の瀧と云ひ、また般若と云ふ、泉あれば神明の作用となし、金明銀明の水となす、天の岩戸の故事あれば、信州の奥に、手力雄命が引きたる戸の飛びてとゞまるものあり、となして戸隱山と云ふ、奇々怪々の傳說生じ、口碑生るゝもの次第に多く、或は山嶽鳴動し、火を噴き煙を吐くを恐れて、人間界の不淨またまたは不良行爲は山神の憤怒を購ひたりとなして、山神又は火山に贈位するの怪事を生ずるに至り、之が恩典に與れるもの阿蘇山あり富士山あり、山の靈たる玆に至りて愈著しく、到る所に靈山を



噴火（信州淺間山）

生ずるあり、因習の久しき、今日の文明を以てするも、猶容易に之等舊慣を打破する能はず、マルテルフォルンの靈峰の如き、英國アルプスクラブの登山あり、伊太利クラブの登攀ありて、始めて古人の迷信的確信を破りたるに似たり、暴風急に吹きて山體を洗ひ、雲霧忽全山を掩ふの日、たとへ絶倫の勇あるも、天災を免れがたく、芙蓉の一峯を以てすら、冬期登山の事殆絶望なるの狀あり、青森の一軍隊は山下に迷ひ、幾多登山者の生死不明となれるもの、火山熱泥燒砂を噴出して登山者を苦しめ附近一帶の人畜を損傷するものありて、全山悉く研究せられたりとする山巖が、尙偉大なる

山國人と性行
瑞西人と信州人

勢力を保持し得るを見ても、古人の山に對する觀念の如何を知るに足らむ、又現存せる詩歌を見ば、古人の感想の更に明なるを得む。

二、山國人と性行　(甲)瑞西人と信州人、歐洲最高峰アルプス諸山の聳立する所國をなすものあり、日本本州の中央に於て、太平洋と日本海との間に介在し、諸高山脈の集まる所に國をなすものあり、楊子江上流地方に於て、幾多の大支流を生むの所、山嶽四周の地に省をなすものなり、瑞西、信州、四川省正に之なり、人は目して三者の間に共通の地勢を有するのみならず、此の間に生ひ立ちたる人類また共通點を有する極めて少からずとなす、逆境に於ける大清國内の一省、其の民の性行如何は、暫不問に附して、こゝに東西二地が如何の地勢を有し、如何なる民を生みたるかを見よ。

日本地帶構造は、日本灣なる大灣をなして、日本海を中心として、巧に一大弧をなすと雖、更に精細に之を檢せんか、此大弧は分れて中弧となり小弧となるもの、其の中弧とも見るべき、西に東西走する中國山系あり、東に南北走する奥羽

分水山系あり、其の方向全く異るのみならず、更に以上二中弧が中部日本に於て衝突するや、二弧共に從來の特性を失ふて、全く正反對の現象を呈するに至れり、東西走せる山系は南北走する山脈と變じ、南北走するは東西走に近き山系となりて現出す、東西に近きものを關東山系として、南北に近き者を赤石木曾飛驒山脈となす、此の南北二中弧の中間を通じて、太平洋岸より日本海岸近に及べる地溝帶は、正に南二中弧の裂目を走れるものと見るべく、此の地溝帶の通ずる所、富士火山帶は南より來りて信州を二分し、變態せる二山系は、關東山系が東境をなせると、飛驒赤石二山脈が西又は南の境をなせるものありて、突兀窮りなき所、彫刻の工複雜錯綜して、こゝに信州の國を作る、淺間白根燒岳の活火山、噴煙常に絶えざるのみか、時々熱烈の爆發ありて山國の寂寞を破り、人跡未踏の赤石山系は、溪谷又溪谷、其峰嶺の知られざるもの多く、神秘の秘藏所となり、所謂日本アルプスの峻嶺は飛驒高原の東緣をなし、蜿蜒幾十里、巍峩の峰嵯峨の嶺、雲を貫き天に冲し、疾風山を巡り颶風谷を渡るの日、登攀容易に

行ふべからず、赤熊の熔岩は鑿の如く又堅甲に似たり、春風吹いて暮靄かすかに谷をとざすかと見れば、烈日紅に嶺を燒いて、皚々の白雪次第に淡く、秋風吹いて荒涼また一段、かくの如くにして、萬山凍り山體眠れるかと見れば、燒岳峰頭噴煙一時に起りて起死回生の想あり、四周の山塊既にかくの如くに怪岩奇峰に富めるのみか、十州を界せる山峰の內部にも、又區々の山脈或は急に又靜に、起伏一なく、赤岳あり駒岳あり戸隱あり、脈となりては木曾山脈あり、峰嶺の分つ所三平（ダヒラ）二谷一盆地を作る、山あり嶺ある所溪あり、水あり、湛へて湖となるものは、諏訪野尻松原にはあらずや、清洌銀を流すもの清流木曾天龍釜無信濃以下の大河あり、山の接する所十州八縣となり、此の水濕す所方數百里にも及ぶべし、河岸遠く開けて平（ダヒラ）となるものあり、近く迫つて谿をなせるものなり、木曾糸魚河畔の絶妙なる岩石奇態なる溪流また少からず、覩し來れば信州の地八百餘方里に過ぎざれども、造化の工また妙なりと言はざるべからず、之を西方瑞西に比するにまた類似なしと言ふべからず、ゼネーブの湖は諏訪湖に比

すべく、四周の連峰中北ユラの一連を除かんか、伊佛の境をなして南走する者伊瑞の境に東走するもの、瑞の東部より伊に入り、一はまた遠くドナウの岸に遠するもの、皆峻山と云ふべく、共に之れアルプ山體に包含せらるること、之を信州の地が複雑なるに比しがたきに似たれども、アルプもと單一の山脈にあらず、方向異なる時山容又一ならず、地帶の複雑構成の雄然たること、決して信州の下にありと云ふべからず、溪流流れて四方に出ずる時、ラインありドナウあり、ポーロースとなるもの流域却て信州に勝るものあり、乳を流せる清流天を擘するの秀峯またよく似たるものあり、地勢の相似かくの如く酷似せる時、彼よく山河の秀麗を以て偉人を生み傑士を養成したりとせば、此もまた偉人なかるべからず、傑士生れざるべからず。

毅然たる大丈夫は魏峩の山谷に生ず、志の堅固山と共に動かず、秀麗の峯に對す崇高の念湧かざるを得ず、屹立せる山容に接す、敬虔の念禁じがたきものあり、堅實の性固となり陋となり易しと雖、多くは道を踐んで過たず、事に臨んで驚かず、危に臨んで迷はず、忠義の鬼となり、武勇の塊となり、彼れ歐洲の傭兵となり、武勇泰西に鳴るの時、ウィリアムテルは假作人たりとも、國民理想の代表者たり、忠勇武俠は大和民族の特性なれども、特に堅固忠に趨き義に之きて死するもの之を信州に見ること最多し、建武の中興は天下亂倫の後を承けて、道義地を攘ひ、風義頽敗の際なれども、村上彦四郎義光同義隆の父子の忠勇は利によりて動かず、權に屈せず、信ずる所を取りて忠に居り、守る所に據つて義となる、義を棄てゝ利に趨れる東國武人中の一異彩を放てるものは、彼の山此の巔の義へるにはあらざるか。

其の他之を教育界に見んか、ペスタロッチ此の山中に生る、自然勢力の大なる所、自然にかへれと絶叫しつゝ、貧民の子を子として、慈悲の涙を濺げば、援なき兒童は慈雨に浴して、眞の父と仰ぐ、期する所は名譽か富か位か、あらず、虛名を求めずして、徐に育英の事に從ひてて悔いざるも其の志知るべきか、若し位に餓えたらんか、隆々の盛名決して得難きにあらず、富を貪らんか巨萬の富また

難事にあらず、而も彼に出でずして之に出ずるもの、却て彼の盛名を高からしめたるものなり、なす所もと一境の事にして、行ふ所のものは、天下の事社會の上にかゝる、信州山來教育隆盛の所、辻教育會長生れ、柳澤伊澤諸先生あり、之を封じて文相の位におくも以て榮となしがたき育英の元老たり、其の他普通小學の教員と云へども、主義あり主張あり、虛名を貪らずして、忠實人材養成に努力するもの、正に小ペスタロッチと云ふべきか、貴からず豐かならず、利なき所に立ちて迷はず奪はれずペスタロッチの育英を樂むもの、世人は何とも言はず言へ、以て之等義俠の士を損する能はず、義仲の素質粗野にして禮になれず、上君皇を駭かし奉れりと雖、朴訥の資堅固の性にあらずんば、驕る平氏の膽を寒からしめがたかるべし、かの火山の急激平和を紊して噴煙鳴動をなせるの性なくば、天下輿論に反して漸然自己の主張を立てゝ、四十七士は法に背けるものの、不義の士なりとの斷定を下し難かるべし、此の說の當否如何は暫く措て問はずとするも、自己に忠實なること、春臺ならずば誰人か容易に言はむ、衆目盲せる時、海外文化に遠ざかれる僻陬の地にありて、開國の主張をなせるもの、淺間山下の象山ならでは唱道するもの多からざるべし。

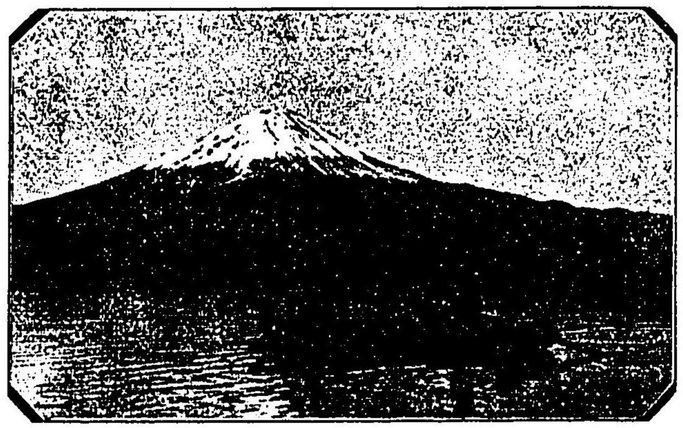
此の地此の人を生み此の人を養ひ彼の地また之に似たり、東西揆を一にせるものかくの如く、山岳の狀態人心人性を支配するの力思ふべし、後章述ぶる所分國日本各州の性行地勢の關係の如きも、また多くは源を山間に發するものなり。

乙　山の美と文學　山の人心を支配する勢力大なる丈、人々の山を賞することと大なるべく、たとへ之を口にせざる迄も、美なる山容を見ては、隨喜の情禁せざるものあらむ、スコットランドの山は高からず、秀麗の妙に欠くるあるに似たれども、單調なるイングランドウェールスの人民は、如何にかの景を賞揚しつらむ、偶スコット出で、其の隆々の文名を以て、よく北英の美景を紹介したりと雖、スコットなき所、其の美は永久英人の注意を惹起するなしと云ふべからず、丘陵怒濤の如く、起伏の狀極めて平々凡々たるに似たれども、低平なる山脈が

緩かなる小川を生み、涓々流れて止まず、茂林麓に連るの時、群羊緣を縫ふて小川に水飲むあり、虹の如き架橋霞の如き岡と岡、樹林の間に隱顯する碧瑠璃の小湖、點々たるの漁舟、合して繪の如きもの、こゝに詩人の詩囊を貯へしこと少からざるべし、『湖上の美人』の如きウォータースコットを驅りて、偶北英の美景を述せしもの、又ウォーヅウォオスが自然詩人の名を帶びて、自然美景の描寫に盡したるが如き、平和なる自然の光景は誠に詩材たるもの多く、まして『英國の日暮』と稱して、暮靄こむるの時夕陽かすみ、綠の嶺は瞬時に陸離たる五彩を變じ變幻の妙極りなく、英國幾多文學者詩人の一度此等美景の間に遊びて想を練り、歸りて文壇を飾りしもの、皆自然美景が文學の本源となりしもの、一は詩人を養ひ、一は詩材を供給す、アルプ山中の美、積雪拾丈の冬となり、枯梢忽に美花を飾るの春、綠蔭滴らんとするの夏、光景の轉變は霎時にして、詩人の天才を磨くことまた速にして深し、洋々たる長江東に流れ、洞庭の大湖は海の如く之に千古の影を映す、岸に坦々たる長江の平野あり、茫として際涯なきかとすれば、暫岩忽岸に迫りて三峽の危景を演ず、淙々の水滔々の流、小なるは波浪の如く大なるは怒濤の如き幾多の山岳、河流忽之を抉りて峽江千丈の奇觀を呈し、棧道岩を巡りて粟を生ずるの絶景は大陸漢詩人の心を驚かし想を激せしこと幾何ぞや、感慨の志嗟嘆の情、百千の型ありと雖、之等詩想の本源は、自然絶妙の感化に俟つ多かるべく、特に山の奇なるもまた平凡なるものゝ感化や想ふべく、文學なり詩歌なる皆之なるべし、支那大陸幾千篇の詩、太古に起り末代に及ぶもの、更に之を海東に見んか、天地開闢に起り永世つきず、普天の下率土の濱、苟も王土に屬するもの皆之れ詩材となり詩人養成所となれるものなり。長汀百里白砂遠く連るの地、白沫岸を嚙んで、渺洋の海は青松の砂丘に對す、嘘鷗とんで海に入り、藻汐たく煙烟徐に上る所、浪に任ずる漁舟あれば飛砂に埋る茅屋あり、海に沿ふて歩し岸に沿ふて漕ぐの時、初は無心の境に入り、終に詩境に遊ぶに至らむ、田子浦三保の松原須磨や明石の浦沿ひにさすらひの身とならば、たとへ光源氏の悲愁あるも、永く不平悲歎の侶とならむもの幾人かあ

る、鐵拐の峯芙蓉峰屹立して之が後援をなす、相擁して濱海の美景を作る、此の間に生れ出ずる詩人文墨の徒豈人丸赤人の徒のみならんや、瀕海の砂丘と雲聳の高嶽との差はあれども、一にみな山岳丘陵たるもの、若し一度中央大山脈の間に歩を移さんか、かの清流と和して作りあげたる美景奇勝擧げて言ふべからず、悉く取りて究むるの繁に堪へざると共に、天下有衆が蒙れる恩惠の大なるは知るべきなり、繪畫彫刻の如き、其他美術工藝の類に及ぶまでも、皆これ多少の美的影響を蒙らざるなく、特に文學上に現はれたる作物の如き、神代史の歌詠よりして、近く昨今の文壇に現はれたる駄作詩文が上に至るまで、山岳の影響を受けて詩をなし、更らに山嶽を歌へるもの極めて多し、之れ等文學が地理と關係せるものゝ如きは、後日稿を改めて述ぶる所あるべきも、今暫く一部を抄出せんか、吾が古代文學上の一大異彩たる山部赤人が芙蓉の秀嶺を望みては

天地之分時從神左備而高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰



富士山

毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者落家留語告言繼將往不盡能高嶺者反歌

田兒之浦從打出而見者白衣不盡能高嶺爾雪波零家留

とうたへるが如き、甲駿の界に屹立千仞の高を保てる靈山が如何に古代の朴訥崇高なる心を動かしけむ、獨り赤人のみかは、後の學者思索家の心に映じ、また技工の美術の手によりてうたはれうつされしもの極めて多く、石野雲嶺が

鍾得秀靈氣、築成東海天、天工盡于此、不復出名山

と詠じ、野栗山が、

誰將東海水、　瀉出玉芙蓉、　蟠地三州盡、　擎天八葉峯、
雲霞蒸大麓、　日月避中峯、　獨立原無爭、　自爲衆嶽宗、

といへるが類、一に芙蓉一峰を描き出でたるものなれども、之また山が聳立幾千丈、霞を拔き雲を貫き、卓立せる狀の崇高なることが古人の心を動かし、一は敬虔の念となり、又偉大を崇敬し更に自もかの秀峰の偉大に倣はんとの志を起さしめ、詩となり歌となるの他、自然の敎化となれるもの多かるべく、靑春の士をして向上の念燃ゆるが如くならしめ、忠君愛國の情を熾ならしめしが、大原重德卿の、

日の本のたからのみかは天が下
　　こと邦かけて不二のおはやま

のうたはれしが如く、富士山が萬邦の內に秀でたると共に、富士ある日本も、萬邦の宗たらしめんと志さしめたるに似たり、山崎宗鑑は、

元朝の見るものにせん富士の山

とよみ、賴山陽は、

秦皇採藥竟難逢、　東海仙山是此峰、　萬古天風吹不斷、　靑空一朶玉芙蓉、

と詠ず、不二一山の詠を以てするも、その幾千なるを知らず、まして天下幾百の名山高嶽各詩歌の詠ありて、芳野懷古として、梁川星巖が

芳野山

今來古往事茫々、　石馬無聲杯土荒、　春入櫻花滿山白、　南朝天子御魂香、

又廣瀨淡窓の彥山を、

彥山

彥山高處望氤氳、　木末櫻雲晴始分、　日暮天壇人去盡、　香烟散作數峰雲、

とうたひ、菊池溪琴の河內路上と云へる題下に金剛山を、

金剛山

南朝古木鎭寒雲、　六百春秋一夢非、　幾度問天天不答、　金剛山下暮雲歸、

の如き、或はまた、

妙義山

妙義山のぼりて見れば宿りせし
　　麓の宿は後のしらくも

箱根山

〜云ひ、森春濤が函關を、

長槍大馬亂雲間、知是何侯述職還、落魄書生無氣餒、雨杉風簑度函關、

とうたひ悲憤を洩し、大和三山が帝京に近かりし時、

大和三山

高山波雲根火雄男志等耳梨等、相諍競伎、神代從、如此爾有良之、古母然有許曾、
虛蟬毛婦乎相格良思吉、反歌、
高山與耳梨山與相之時、立見爾來之伊奈波國波良、

とて、互に其の權を爭へるが如く傳へ、又山は春夏秋冬各面白きふしあれども、春花秋月相爭へる如く、春山と秋山とまた其の秀を競へるものあり、

冬來成、春去來者、不喧有之、鳥毛鳴、奴、不開有之、花毛佐家禮、梯、山乎茂、入而毛
不取、草深、執手母不見、秋葉乃木葉乎見者、黃葉乎婆、取而曾思奴布、青乎者、置而
曾歎久、曾許之、恨之秋山吾者。

とて、春花秋葉の美何れも棄てがたきをよめるは萬葉の昔にあり、春秋の二季に於けるが如く、夏は滿山滴るの綠となり、森林の美言ふべからず、木枯吹いて

山の利用厚生

白皚々の山となれる時、亦夏綠の下にありと言ふべからず、かくの如く花咲く春より萬葉凍れるの冬に至るまで、其秀其美つきず、人心を動かし、審美の念を興ふること一なり、思想を刺激して文學を生み思想湧く、山の人心を動かせること誠に妙なりと云ふべし。

三、山の利用厚生　明治二十五年盤梯の山體急に動搖を生じ、頂を割き泥土を吐き、人畜草木の被害決して少からずと雖「會津盤梯山は實の山よ笹に黃金が
なりさがる」との會津俗謠今尙つきず、遠き奈良朝の時、柿本人丸が吉野の宮にて詠める中に、「國見乎爲波疊有青垣山山神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者
黃葉刺理……山川母依氏奉流神乃御代鴨」とあるも、祝詞の新年祭の條「遠山
近山爾生立留大木小木乎本末打切氏持參來氏皇御孫命能瑞能御舍仕奉氏」「又
同遷却祟神祭の祝詞にも「山爾住物者毛乃和物毛能荒物……至留萬氏爾橫山
之如久凡物爾置所足氏」と云へるを見ても、古人が山嶽を重要視し、山嶽より幾
多の利益を享有したるなるべし、山に鑛物の含有あるにあらず、山地利用なり

たるにもあらざれども、古人に利用厚生の惠を與へたる山嶽は、文明の餘光を受けて、日々に其の特長を發揮し來り、今日に至りては、山は人生はなるべからざる關係を生ずるに至れり、世界の平和唱道せらるゝ一面には、武器を收めて徐に平和の戰爭に腐心せるものありて、經濟界の干戈は凄なしき音と共にこに商工業の大競爭行はるゝと共に、寶の山たる山嶽が包含せる富は益發掘せられ、山の利用は愈緊切となるに至れり。

甲　鑛山が人生に必須缺くべからざるものなることは、古代人智未だ發達せざる時に於て、僅に石器土器を使用し、更に一部分青銅の器物を使用せる際と雖、充分認められたるものなれども、而も近く世界の商工業は急足の進歩をなし、交通運輸の具備り到れるに至りて、益切實なるものあり、最近數年間に於ける世界産金額が、八億圓に上れるが如き、若し之を一の財源より湧出する利子と見ば、世界の金山は幾拾億の價値あるものと云ふべく、トランスバールの一地方を以てしても、二億七千萬圓に及ぶものあるは、金山を以て一國一地の生命たるを證するに足るもの、金貨本位の制度が、世界に遍用せらるゝに至りたるも、皆之れ金山の利なりと云ふべく、日本が東洋海濤の裏にありて、夙く歐羅巴人を誘致して、文明を享有したるも、饒多なる金山の所在を認められたるに因し、カリフォルニアの新開地、クロンダイクの鑛山地方の發達も、また金山の利なりと云ふべし。

更に工業用炭田を見るに、時に平地厚層なきにあらざるも、多くは高低一ならざる山地を以て炭田とすべく、世界約十一億トンの石炭産出中、米が四億三千萬トン、英が二億七千萬トン、獨の二億トンの如き、多額の産額は、三國の産業を助長せること其の幾何なるを測るべからず、三國が經濟界に雄飛せるもの、實にかくの如き豐富の財源あるによるものなり、更に內日本國內を見よ、九州の北方夷鑾の棲地として輕せられたる地方が、急に林立の帆檣と冲天の烟突を見るに至れるも、十州島內部が蜘網狀の鐵路を見るに至れるも、全く之が因なりと云ふべし、獨英米の鐵山が世界産鐵の大部分を占有して、一年の製鋼一國

五千萬トンに超ゆるものあり、製鋼製鐵が今日實業界のみならず、軍事界に至るまで、大切缺くべからざるものとなれるは、鐵山の有力を證するもの、石油が燃料として重要なる、他の銀銅鉛錫以下諸鑛物の、人生必須の要鑛たると共に、鑛山は人生に最重要なるものにして、かの有要鑛物豊富の稱ある米國に於ては、一年鑛山の收利三十六億圓の上に出づるにあらずや、一國すでに然りとせば、世界鑛物の富の大なる知るに足らん、鑛山が人生に對する恩惠の如きは、更に贅言するの要なけむ。

乙　林産　山は內部鑛物を包有すると共に、表面には山の高距を語る林木あり、氣候帶を告ぐる各植物ありて、人類に密接の關係を生ずるに至れり、古代草味の時、平地尙林木多かりしも、今や次第に材木を高山に求むるに至り、從來久しく無用視したる高山の樹木世に出でゝ、建築材其の他工業用に併せられ、吾等祖神の大廟の如き、神聖なる用材を遠く木曾山中に仰ぎ、其他寺社の宏壯なるものも多く用材を山林に仰ぎ、更に民屋邸宅皆林材を山野に求むるに至りては、山林また緊要なりと言はざるべからず、殊に彼の大建築の材料、下に五丈の旗を立つるものゝ如きは、全く之を山岡に求めざるべからず、更に近來紙の原料となり、また經木の原料となるもの、或は樟腦の原料たる、工業上の用途眞に大なりと言はざるべからず。

加之密生繁茂せる森林中には、人跡未踏の地少からず、アフリカ洲は勿論、北米の山脈中、更に舊大陸中最文明國の間に欲入せるアルプ山脈、また英國の如き、人口稠密の地方に於ても、森林決して少からず、此の間にありて、巧に人類の攻擊を避けつゝ、自然の恩惠を樂むものあり、空に飛翔するもの、森林中を馳騁するものあり、猛獸の强大なる勢力精鋭なる爪牙も、今は人類に抗する能はず、年年歲〻、正業たり副業たり又散悶のために、是等諸種の人間は、森林に入り丘陵山地に攀て、盛に狩獵を行ひ、獲得せるもの食膳を賑はすの美羹となり、寒を凌ぎ暑に備ふる毛皮となり、實用裝飾兩用として、工業製作の業隆盛なるにも拘らず、文明人必須の材となれるものあり、毛皮の製せられて、歐米諸都會に中心

市場を有して、財界の注意を惹くに足るものあり、世界の大文明國に於て、米の紐育、獨のライプチッヒ、英のロンドン、露のニジニノブゴロッドは、世界四大毛皮の中心市場として、其特色あるを見るも、山嶽丘陵の林中より受くる、獸産の存在を否定しがたかるべし。

丙　鑛泉石材　前述鑛物の他、各地に湧出する所の鑛泉を見よ、冷たり温たり含有鑛物多少の差はあれども、一方鑛毒として、人類に多少の被害を與ふるものを除きては、悉く人類生活を助長するものなり、山間に湧出するものオーストリアボヘミア高原に於けるカルルスバードの鑛泉あり、歐洲上流社會の浴場たるのみならず、之等幾萬浴客中には、時に歐洲の大人物を、包含して驅りて國際問題解決の會場となせるものあり、また清冽なる泉水は山光の秀麗と共に脫塵の境を作り、新鮮の空氣を貯へて、浴客をして心身の爽快を感せしめ、更に含有鑛物は、皮膚に內臟にまた頭腦に、浴者の缺損を補ふて、起死回生の功を奏すること、時に醫藥の上に出づるものあり、皮膚病を治するもの、腸胃を洗滌するもの頭腦を革新するもの、効果もと一ならずと雖、養生の要具たるや論なし、また近來都市に洽く其の勢力を認められたる清涼飲料として、含瓦斯泉の用途次第に大に、或は燃料鑛物としての石油が、前述の如く、電燈次第に增加せるの時、其勢力些の減損を見ず、また各地に切出せらるゝ石材の如き、建築材として、時に煉瓦木材の上にあるものあり、文明の大建築を飾るもの異木奇樹なきにあらず、人造石材なきにあらねども、氷を欺くの石材鏡の如きものあり、紅點斑々として光輝に射るものあり、五彩の陸離たるあり、狀一ならず、色彩光輝品質別あれども、巴里の大都を飾るもの宮殿塔堂をなせるもの、またかの石材ならぬはなかるべし、堅城巍然として雲に入るの觀あれども、見來れば山谷に採り來れる石材之が基礎をなすにあらずや、一片の石塊輕なりとして投ずるを止めよ、之れやがて蟻孔を水國オランダの爲に防ぐに足らむ、金城湯池石材なき所を見がたきを如何せむ。

丁　水力電氣　更に去て溪谷につきて下れ、若間洩る谷の清水は、涓々として

糸よりも細く、斷えんとしては辛じて支ふるに似たり、涙滴一杯の水大なりと云ふべからざるも、谷を合せ枝を加へ流れて止まず、合流併呑寸時も止まざるや、松の響に誘はれし谷の小川は又元の水にはあらずして、流水滾々流れて矢の如く、奔々として走り、落差幾十丈、懸崖に臨みて急瀉投下、其勢力侮るべからず人智之を利して水力電氣となり、百千の燈火一線によりて保たれ、車體疾走して百里を厭はず、石炭を動力としたる文明は、今や却て舊時代の遺物たるの觀あり、煤煙なき清莊なる車體の構造をもて、電氣鐵道の勢力次第に認めらるるに至りて、山間丘地を、意に介するの要なく、無之を利して益文明を助長するに至り、水力電氣は先大都を襲ひ大都之が勢力圏に入るを見るや、次第に地方に及びて、今や吾一帝國の内部を見るも、之等水力電氣の作用極めて多きは單に大水流のみに止らずして、落差の大なるもの卽ち山體の急峻なる地にありては、少量の水力をも巧妙に利用するに至り、東に日本あり、西にスウイスあり那威あり、地體交通の便を缺けども、また之を利して交通系の要部とするに至り、平地に劣るなきの狀を呈するに至れり。

高山植物
高山氣象

戊　高山植物と高山氣象　溪谷に沿ふて上ること次第に深からんか、谷迫り山脚次第に急に、傾斜益〻大なるに至らむ、かくの如くにして、山麓に於ける氣候は殆ど平地に似たるものなれども、中腹に至りては、五帶其の一を加へたるの冷を覺ゆ、此の間に生れたる植物が、周圍平地と同じからざるは言を俟たず、巨樹大木は次第に矮樹となり、風雨霜雪を凌ぎ磽确なる土地に堪へ、僅に人肩を沒するに過ぎざるものあり、垂直高距大ならざること殆一樣なれども、更に詳細に之を點檢せんか、傾斜の山體に沿ふて、匍匐して下れるものあり、蜿蜒として上れるものあり、左右の枝は手を伸べて泰山を抱かんとするあり、星霜幾千百を閲して、樹高依然たり、寒暑の急變に際して毅然屹立また關せざるが如く、こゝに高山常に見る所の偃松あり、麋鹿此の間を上下し、下よりする降雨天に向つて注ぐ所、落々磊々たる間にも、尙所謂高山植物を生ず、蘚苔萬古の雪を親しみ、青々として、歲の冬と夏とに問はざるものあり、こゝいまだ温帶の境を脫

せざれども、既に平地極地附近の狀あり、麓より上ること一尺にして、寒來り暑去り一里北向して進むの感あり、其氣溫と其植物とは、直立の山體に、熱、半熱、溫、半溫、寒の五帶を刻し、水平垂直相一致するに似たり、高山植物研究の趣味あるもの實に之にして、學者の努力措かざる者は此點に存すれども、世の好事者骨董園藝の遊子徒に高山植物を弄して、自然を損する者あるは注意すべきとなり。更に此等植物を生みあげたる岩石は、地質研究の材となり理學研究の料となるものあり、又之等植物を養成したる氣候は、高層氣候の好研究材たり、冲天の塔と云へども、尙高數千尺に充たず、多額の資を投じ築き上げたる塔臺の類と云へども、危險多く勞少からずして、効をなす多からざるに反し、かの芙蓉峰の如く、海面を距る遠からざる所に於て、直立一千二百餘丈なるもの、正に氣象研究天與の好位置と云はざるべからず、日東の男子野中至氏が、虛名を避けて靜に此の山に上り、學を愛し身を顧ざる熱心、たとへ直に適切の効果を收め得ざるも、學界を益すること決して少からざるべし、文明の和風東西を吹いて、天上

天下朦なく昧なく、明ならざるものなきに似たれども、學界の事茫として、知られざるもの多く、空間の研究の如き、蓋し後日に待つ所多く、從て高山が尙不測の好位置を占むるに至るもの、想ふに遠からざるべし。

癸　山脈と氣候　加之山は其走向によりて、氣候の變化を及ぼすこと大なり、從て人文にも多大の影響を與ふるものにして、東西走の山と南北走の山とによりて、如何に地方的氣候を支配せらるゝかは豫想以外なり、かの中國山脈が東西走する時、中國地方の氣候は如何、山陰となり、山陽となる所、一は南方の暖風吹いて、一は北海の寒風に浴す、一は可耕の美田多く、他は之に反す、偉人傑士の生ずる陽に多く陰に少きが如き、後章更に述ぶる所あるべし、東西走の山は山の南北によりて大差ある間に、南北走のものは、多くは山の東西によりて大差なく、自然の地勢が人類に及ぼす影響中最注意すべきものにして、山の走向が河流の走向を定め、氣候を動かし、天産を定め、人の性行を定むること、更に各章に詳說する所あらむ。

其の他山が、時に交通の障害をなし、一の隘路を以て交通の徑となし、越となり嶺となるもあり或は避暑遊山の所となるあり、練兵演武の所となり、古今に幾多の實例を示せるが如き、或は土地測量の基點となるの類、人類との交渉極めて多きは驚くべきものなり。

山と籠城的位置

山と籠城的位置　甲、山は割據の好位置、前述信州瑞西二國に見るも、又更に大陸支那に於ける漢中關中或は南方四川貴州二省の地を見、或は西藏高原内、チベット、湖畔、メキシコ高原、ユタ高原等に於て見るが如く、其位置山嶽四周し、其内部には一面の低地ありて、優に割據獨立に適せるものあり、生產たとへ需要の全を完うし得ざるも、需要の大部分を自ら供給し得るのみならず、時に其需要不足の一部は之を四周に求むること決して難きにもあらざるべく、まして之に據て固有の特色を保持すること最容易にして、寄せ來る蝟集の軍兵も四周の山嶽に遮られて容易に通ずること能はず、たとへ一道を闢ひて内部に突入するとも、其の内部の地勢に明ならず、進路不明四周不便にして、行李つがず進退意に適せず、攻擊者のかくの如き困難あるに對して、一は其の地勢に明かにして、山嶽丘陵に馴れ、神出鬼沒の策自由に行はれ、虛々實々の陣法行戰は、地の利に於て大なる勝利を贏ち得べき位置にあるものにして、たとへ山嶽四周の地にあらずと雖、山により險を高うし濠を深くするに至りては、難攻不落のこと一なり、吾國古來よりの幾多の戰陣守備の場合に於て、山嶽を以て城となし、地利を賴んで、敵を惱ませしもの少からず、たとへ今日の如く、要塞守備の軍學進歩せざる迄も、各時代に通じて、皆其の軍法は應用せられたり、かの河内一國の精を拔きたりとも、其の勇知るべきのみ、正成、此の烏合の衆を驅りて、よく天下の大軍に抗せしこと最注意せらるゝもの、楠公忠誠は孔明に超え天祥の及ばざる所、其策略は吳孫の上にありと云ふも、其地理を察しよく敵の弱點を穿ち、延いては之を味方に利用し、さしも險難なりと稱せられし、金剛山下の地と雖、單一の天險のみを以て、かの大敵に當るべからざるに、天の時を利し地理に應じ、人の和從により、武相二州の兵を以てせば、六十餘州の大軍に當るべし

と勇み勇める兵勇を、僅に一城に集め、一指を染むる能はざらしめたること、後世讀史家の快とする所にして、以て天然割據の境界たる山嶽の如何を知るを得む、之を賤嶽の一戰に見るも、猪勇或はよく堅壘を拔き山嶽の天然を破りたるかと見れば、忽豐公出でゝ山の利を應用し北軍勢沮む、山崎の地また據て以て事を一時に成就するに足るも、反逆に加ふるに地勢の應用なく、織公の恩義に泣ける忠誠の軍、智略無比の豐公を戴ける攻擊軍に倒る、忠勇智略に缺如せる支那大陸の軍を以てするも、旅順の一城は日清役中の最たると、平壤役と相並びて、勇猛山路將軍の心をなやましたり、況んや智勇清軍の上にあり、精鋭の武器と、精巧の器械を以てせる露軍要塞に據るの日、忠誠世界無比の日出男子、血を濺いで漆となし、骨を積んで壘となして、死屍山積滿洲の野ために醒きに至るも、尚容易に陷る能はず、一壘朝に陷るかと見れば、夕陽に飜るの鷲旗あり、血に泣きて喬ひ起てる乃木將軍が無二の水魚山路將軍の轍に倣ひ、百方苦慮すると雖、赤誠未だ天に通せざるか、露の悪運強かりしか、堂々たる露西亞國旗、要塞頭上に飜々たる時、吾が國民の勇を以てするも、山嶽割據の利を悟りたること誠に痛切なるものあらむ。

或吉野山上に於ける、また比叡山上嚴島擧げ來らば東西古今を問はず、山が割據の好位置たるを知るべし、また一面には、精神界の割據地たることを得るも山により山地に入るにあり、靈山となりて神靈の宿るものあり、山門となり權現鎮座の地となる、また難行苦行の地となり、雪山あり、叡山あり、高野山あり、身延山あり、一は精神修養の道場となり、一は克己難行の所となる、開山の尊敬せらるゝもの蓋し之によらむ、古代文化未だ洽からざる時に、高野山の絶頂に上る、其難蓋し容易ならず、開いて法を行はんとす、困難や知るべきなり、弘法大師此の山に入るもの、一は此困難と戰ふて、修心修道、先人心を去りて道心に入り、更に修行の法を以て、天下を化せんとす、天下人民渇仰隨喜し、弘法の名天下に洽く、上は至尊の尊崇を得、下は萬民の歸依を仰ぐ、學を高僧明知識に求めて他かず、更に入唐法を修し、學を究む、學才の豐富なること、迷信的隨喜を得たる一

因なるも、かゝる間にありて、熱烈なる心神の耕作に從事したるもゝやがて彼の名山を作り、峻嶺の巔にかの盛況を見るもの、幾百の圓頭等しく高祖として仰ぎ、天下後世に至るも眞言秘密の大聖として、敬虔の心を以て彼の山に臨み、尊崇の意を以て此の人に對す、高野の一山　よく空海の心を養ひ、空海を助長誘掖し、空海亦之を天下に紹介し、山と人と名を得たるかくの如く著しきのみならず、後世幾百千の山僧が孤立修法空海の遺法に法り、空海の後を追ふて、道心修養の界とせしこと、其の勢力の大測るべからず、更に天下幾千萬の俗人もまた修養の恩典に浴せしめたるは、正に世俗汚濁の界より隔離して、邪念起るなく、妄執の心生ずるなく、只管佛陀の聖典を經とし、彌陀の御法を緯として、堅固の道心を養ひ、かの泰山の屹立たるを見て、不動禪定の鑑となし、木枯梢を拂ふて降雪幾十丈なれども、うごかざることかの山の　く、春風吹いて聆蕩たるのとき、煙霞萬山を置めて心容易に動き易き間にありて、無垢の志は谷間の清流に比し、我觀をすて我欲を抛ちて、佛體と一致するに至り、修養の工なりたりと雖、人誰か五官なからん、寒暑に觸れ、美醜を見、甘苦滑粗巧拙に對して、心意の動かざるを得ず、茲に修行の道場を山嶽に求め、四周の交通を斷ちて物の刺激を少うし、更に神佛の偉大に觸れしめ、茲に涅槃の境に近づく途開く、梵鐘一度響いて全山寂寞たる時、木魚の音微かに谷を渡りて荒凉又一段、香は靈場に溢れ、法燈明滅して邪心去り妄念慨びて我執なきの折、合掌念珠法衣に經はれ、釋尊の像に對するの刹那、靈光一閃心に入るよと見れば、身はまた世俗の人にあらず、道心吾にあり、何物か又誘はむ、既に道心なるの日、山を下れば路傍慴伏の念を禰して却て景仰するに至り、極惡大逆の人も、其の德に化せられて、ひとしく隨喜の涙を流し、茲に修養のこと終る、古代草昧の時すでに此の事あり、幽なり遂なる山嶽を利し、割據的位置を用ひて心身の割據をとげ、更にまた思想の孤立割據をなし、或は種族保全のため、割據を企つるものあり、交通不便なるを利して之によりて他境と分ちたる例少からず、神代史を見るに、出雲派の諸神が出雲を根據として遠く後世に及び、建御名方尊が鹿島鹿取二神に屈服して

諏訪湖畔にかくれ、山間の僻地を利して、心静かに餘生を送りたるが如き、皆割據の業を果せるものなり、降て後世に至り、木曾義仲は、京師に失敗せる源家の子孫として、信州木曾にかくれ、源九郎判官義經は、鞍馬にかくれ、之によりて武を修め身を鍛え、後世飛躍の準備怠なし、平盛なれば源かくれ、源强ければ平ひそむ、祖谷（阿波吉野川上流五家荘（肥後）の如きは、正に隱匿所たり、かくて割據のことをなし得たるもの多く、建武中興の大業破れてよりは、至尊の位を以てし、十善の玉體を以てするも、又山中割據の止むなきに至る、吉野の奥賀名生の里、或は金剛山下の如き、吾等史蹟探究の士を以てせるも至難の山中にかくれ、僅〻に喘々たる餘勢を保ちて、割據の事をなすに過ぎざるに至れること、恰も海島によりて、沒落の餘命を繋げるものと似たり、支那大陸にありて、時を得ざるの士が、大湖の沿岸に悠々自適し、風物に思をよせ、心また俗界に超然たる、或はアルプ山中の幽居の如き、また信州の各地に於けるが如き、皆屈原の徒にして、未だ汨羅を求め得ざるものゝ退隱せる所、後世史家をして、其誰人なるかを疑はしめ、一度無邊俠禪を起して、竹内式部となし、更に博士星野恒氏を起して、之を否定するに至らしめたる天龍道人の如き、寧割據の勢なく、隱匿に終れりと雖、其事一なり。

山は埋骨の地

乙　山は埋骨の地　吾が歴代帝王の山陵を見、また更に漢土西洋に於ける偉人の墳墓を見るに、丘陵に據れるものあり、或は土を盛りて丘となし、之を英雄永眠の地となせるものあり、之れ何の理由ありて存するやは、暫く措て問はずとするもの、其の生時に於ける偉大なる人格は死しての後までも、遺族または後人によりて、其盛名を失はざらんと勗め、又尊崇の念やまざる者ありて、之が英靈に對し、敬仰茲に至れるものなるべく、或は其墳墓の大さを以て、其人物の大小を判せらるゝかの念ありて、殊更に留意して、大を以て誇りとなすの風さへ生ずるに至れり、或は帝王の山陵の如く、亡靈既に天に歸して、神として祭祀するに至りては、又其墳墓の土地を選定し、後人をして、假にも不敬不遜の擧に出づるなからしめんとして、地よく仰ぎ見るの丘陵山地を選み、神靈山靈の和

して、茲に民人の敬意を起さしむる樣に意を用ひたるものあり、其墳墓選定の理由は多々なるべきも、丘により岡によれるものたるは失ふべからざる事實なり、近畿地方に於ける歷代御陵を拜し奉るに、皆丘地または人工的丘陵ならざるはなく、又之を人臣に見るも、京都東山に於ける、太閤の墳墓將軍塚の如き類少からず、之を東國東海に見んか、久能山あり、日光あり、靈山あり、皆英傑埋骨の地として、山嶽丘陵を選定したるもの、更に豆相方面、源氏北條氏の舊地に徵するも、亦かくの如し、然れども唯單に、偉人尊敬又は祖先尊敬の念のみを以て、茲に出でたりとせば、何の味もなかるべきも、唐土に於ける伯夷叔齊が、首陽山中に隱れたるを見るに、屈原が滄浪の高調を唱しつゝ、南汨羅に投じたると、其心意大差なかるべし、卽山が退却保守の地として、不遇の士が隱遁せるものなり、四周の狀態を離れて、轗軻落魄の境遇に、獨り自ら慰さめんとするものなり、或は周圍との競爭に敗れて、山を以て、最期死守の地となせるものあり、絕代の偉人西鄕南洲翁が、城山最後の事議論紛々容易に論定しがたしと云へども、偉大なる抱負は文勳の士に容れられず、竹馬の友大久保甲東のあるありと雖、議論のためには又如何ともする能はず、各主義を以て相爭ふに至りては親友もなきなり、兄弟父子も亦賴むべからず、一度は主義のために廟堂を去り、再度自己の全を舉げて、薩南健兒に委してかへりみず、後人目して賊となし、或は絕代の忠臣となし、褒貶容易に定らざるも、南洲翁が當時に容れられずして、空しく偉才を抱いて城山の一戰に斃れ、後人をして、痛惜措く能はざらしめしもの、彼が吟咏「骨を埋む故鄕の山」と云へるが如く、山を以て埋骨の地となせしもの、南洲の心事如何の感ありけむ。

第三篇　河と人

一、古人と河　六千年の歲月を閱し、ニール一帶の沿岸は、河流の恩惠を蒙ること最大なりしなり、埃及文明は之によりて起り、之によりて發達し、一度其邦家は滅亡の悲運に會したるも、今尙其產業に益せし恩惠に至りては、古來渝るこ

河畔の美地

となき天惠に浴しつゝあり、歐洲古代史を研究せんとするものは、須らく此大河の性質につきて究めざるべからず、一年一度の洪水、災害大なるに似たるも之れやがて、此沿岸をして比類なき膏腴の地たらしむるものにして、又年々時を同うしての洪水は、曆の發達となり、洪水に破壞せられたる境界は、治者によりて恢復せらるゝものなれば、治者が非常なる勢力を持するに至り、政治上の一大發展をとげ、境界制定の爲には、數學の發達となり、炎熱なる氣候と、清明なる空氣、雨量少き天候と相俟ちて、六千年前の文明なれり、之れ西史の研究者の最も注意すべきことにして、東ユーフラート、チグリス河の流るゝ所、メソポタミヤの平原に於ても、亦河畔の美地に於ける大沃野は、バビロン、アッシリアの文明を發祥せしめたり。

黃河揚子江流域

東洋に於ては、黃河揚子江又支那文明に恩惠を與へたること大なり、禹が洪水を治めて、よく民の憂を除き、よつてよく王者の大業を成就せることあり。

更に吾等の祖先が如何に河流と交渉せしかを見るに、神代の日すでに微川上の事件あり、八岐大蛇の事、固より不可思議なるに似たれども、素戔嗚男命が此流域を探險したる際、偶々土賊の巨魁に會し、遂に之を誅戮し、其佩用せる神劍を掠奪せるにはあらずや、かくて八重垣を結び、殿を營みて、宮室の地を出雲とせられしなるべく、神武帝が熊野川上流に溯りて、大和に帝都を定め給へるがごとき、或は後世神器を奉安し奉るために、別殿を經營し給ふて、かの五十鈴上流の聖地を選定して、茲に萬世不易の神宮を造營し給へるが如き、吾國史と天壤無窮なる事實なり、吉野川の如き、亦大和川の如き、又は淀川の本支流の如き、皆上代の史上と離るべからざる關係あり。

河畔と文明

更に西洋史を見るに、ローマの發達はナベル河畔に起り、アルノ河の流域は、やがてフィレンツェの發達を促し、ポー河のヴエネチア、巴里のセイヌ河、ロンドンのテームス河の如き、時代の前後はあれども、皆文明史と河流との密接の關係あるを證せるもの、アジアにはインドス河畔、ガンガ河畔またよく文明を助長發展せしめたり、後世に至りて、セントローレンス河畔も、ミシシッピーの河

河と國史

畔、オリノコ、ラプラタ河畔、皆文明史と深き交渉ありたるものなり。

奈良七代は勿論奈良朝以前にも、大和川の平野は、國史に深緣あるものにして、今日よりすれば盆天の感あるも、古人が此平野によりては、大業を成就し、よく文化を促進せることは著しき事件にして、平安奠都の後に於て、加茂川の流域は、又千餘年の帝都と成て、吾國史中比類なき地となり、帝都東方江戸に遷れる後も、尙古都の地として、よく人々の注意を惹きたり、其他、古史に現はれたる都市の類は、多く河流の畔に現はれたれば、古人は河流と親しむと最密なりしなり、まして德川時代前後に於て、封建の制なれるの日、諸侯がよつて以て都城となせる地は、多く河畔の地か又は沿岸をさる遠からざる河流の流域と目すべき者にして、全國百の都會を取りて、仔細に之を檢するに、其三十八は河流の沿岸にあるものにして、其他は明かならざるあれども、河流域又は小河の流るゝ地なるを思へば、古今東西の民族が、以下に河流に依賴せしかを知るに足らむ。

河が人生に於ける交渉かくのごとくなりしが、之れを山が古來比較的人類と

河と人生

河の上中下流

疎なりしに比し、又人と海洋との關係に比して、著しき相違あり、從つて古人も河流を恐怖するが如きこと少く、河神水神あり、また大蛇の上流山中に棲息せしと傳ふるものあれども、河に沿ひて深く上流をきはめしものあり、河畔は一の交通路となりしため、よく人生に利用せられ、遂に今日に至りて河の利用其極に達せし觀あり、されば古史を繙かんものは、よく河流の性質をきはめ、河流が古來如何なる變遷ありたるかを知らざるべからず。

二、河と人生　吾日本國民が、古來清潔を愛するの特性ありしは、幾多原因の存するものありしならむも、かの清愛すべく掬すべきものなるも、之れ等絲の如き細流合しては、次第に其勢力を增加し來り、落差大なる溪谷に於ては、急流直下して深く岩石を穿ち、硬軟を選ばず、大小を論せず、突擊又突擊、碎かずんば止まざるの狀あり、磐石嚴として立てども意に介せず、兀々たる峽谷に入り、累々たる岩石を突き、右轉左往瞬時もとゞまらず、此河に臨み此上流に親むもの、孰か此自然の影響を蒙らざる、其水は清冽澄透、其流は急流奔馬の馳走するが如

義仲は上流的人物

きを見ては、廉潔忠烈純正なる性情を有すること偶然ならざるなり、見よ吾等の祖先が懷抱せし日本の國民性を、又更に日本魂となり武士道となり、淳乎として淳なるものを、人は命を惜んで、輕卒とも犬死とも云はゞ、云へ、之れ國民が自然より享有せし美しき性行なり、小膽なり雅量なしといはゞ言へ、之れ尊き國民性なりしなり、信濃山中に生ひ立ちて、城氏を敗り、倶梨伽羅の敵を擊つこと、疾風の木の葉をふくが如く、京に迫り西海に向ひ、旭將軍の名聲を博せし義仲は、粟津の最後は果敢かりしも、木曾川の清流が奔放よく艱難の勝地を削磨せるが如く、最も愛すべきものなり、義仲は上流たるの性行を遺憾なく發揮し得たるものなれども、一面に於ては思慮足らざる所輕舉事を決せるものあり、よく大事を成就し得ざりしは、義仲のために悲む所なると共に、又義仲を生みたる日本國民の大に考慮すべき所なれども、たゞに義仲に於て之れを見るのみならず、吾等國民の中にありて、其活動力の最大なる青年時代は、またよくかの義仲の性行に似て而も及ばざるものあり、青年の思想は單調にして思慮到底周到なりと云ひがたし、されば事に臨みて輕舉あるあれども、形式にかゝはり、徒に無用の心配をなして、躊躇事を決せざるが如きことなく、惰性強からざれば、舊式打破は決して困難の事にあらず、よく青年が革新をなし廓清の業を遂ぐる皆之なり、河の中流に至りては、其趣大に異なるものあり、其流勢尙未だ衰ふるに至らざれども、流るゝ所次第に緩、傾斜となり、突兀たる周圍の狀態も、漸趣を變じ、河の兩岸には、たとへ小なるも部落の發達するものあり、一面には上流の如く、よく破壞の勢力あるも、他面には次第に其包有せし土砂を各地に殘留して、一種の建設作用を試むるものあり、之れ日本古來の偉人が常に試みたる徑路にして、事を舉ぐるの日は勢上流の如く、何事にも恐るゝなく、何物とも雖もよく己が業を妨ぐるなしと思惟せるも、次第に實際の事に當るに及びては、其鋭鋒も次第に鈍く、其初破壞の事に成功せるものも、建設の業にあたりては、其事花々しからず、氣屈し意舒びず、世人も亦之に對して、其破壞の花々しきを賞して、其建設の遲々たるを貶し、古來史上の幾多變遷が、常に尾大掉はざる

の觀ある皆之なり、之を今日に見るも、かの野にあるの政客が、高尚偉大なる理想を懷きて、當局者の緩漫なる態度を非難する時、其持論誠に美しく、此人によりてよく政界の廓清を期すべしと思はるゝも、一度職に備はれるの日、無能却て前者にまさるものあり、內閣の變遷の如き、多くは之に類するものなり、更に下流につきて之を檢するに、中流に於ける流勢も、下流に來るに及びて、殆ど其全勢力を失墜し去れるが如く、廣茫の平野となり、田畑遠く連り、河水悠々として大海に朝する所、砂洲堤をなし、泥土洲をなし、蘆花匂ひ、荻葉繁り、舟筏深く內地に溯る所、かの上流に於ける山嶽丘陵の如きも、或は遠く其陰影を望み、或は遂に見るべからざるものあり、之を日本にしては、眞に下流の狀をなすもの極めて少く、利根川の如き、淀、信濃、北上川の如き、僅に辛じて下流と稱し得べきが如く、下流は其水清洌上流に及ばず、濁水となり、緩流となり、勢力弱けれども悠々迫らざる所あり、破壞力の如きは、其全部を失ふて、たゞ孜々として建設の事を維れ勗む、一面若實溫厚の狀あると共に、他面には意氣なく氣慨なく、喘々焉として辛じて生くるが如きものなり、かの上流の激烈もなく、又中流の覇氣だになければ、事に臨みて因循姑息なるが如く、退嬰主義となり、保守的傾向を有し、之を人にしては、かの老政治家に見るが如く、老實業者の如く、溫健を主とせんとして、動もすれば因循となれるが如く、よく業を過たざるも、然も一面には斷乎果敢の事なく、派手やかならざるがために、よく少壯者の反對攻擊を免れず、まゝ濁流の溢ふるゝが如く、沈滯せるもの腐敗せるが如く、半面は老朽となり、無能となり、他の半面は情實に因はれ請託に動き、正義もなく人道もなく、老猾不信の極に達し、大事をなすや著實なるも、よく果斷なく、危急に處するも、悠悠として其機を失するに至る、其業をなし下流の三角洲を作り上げたること賞すべきも、其態度は好しからざるが如し、斯も上中下流の特色明かなるも、幸か不幸か、日本國にはよく大河の眞に下流をなせるものなければ、かの下流に住める人々の、よく下流的大功業を遂ぐるなく、下流の悠々として急がず、幾百里程を流るゝ如き性なく、多くは上流的性行となり、稀に中流的人物あるも、更に

河口と西郷隆盛伊藤博文

進んで下流に移らんとするや、氣まづ泪みて進まず、僅に進んで心大に倦怠を來し、上流性を有する社會の非難また著しく、中流にして終る偉材多し、日本に於ける大政治家大實業家のなきは之が爲なり、之れ日本の下流が吾國民をかくの如くに養成し來れるがためにして、大に邦家のために慶すべき長所あると共に、國家百年の大計より見て大に憂とせざるべからず。

更に河口に就て之を檢するに、かの清流が海に沒する所、多くは海底深く、波浪常に岸を洗ふて、河口常に深く、以て巨舶を泊するに足るも、膏腴なる土壤を求めがたし、又濁流注ぐ所の河口に於ては、平沙遠く連りて、河口三角洲あり淤泥積んで田畑となるに堪ふるものあり、清濁幷せ呑むの結果として、泥土深く、ために船舶の寄泊しがたきものなり、之を政界の人に見んか、公伊藤の如きは、よく清濁合せのむの偉人として、功業最も明かなりしも、其人品深遠なる所なく以て巨舶に便せざりしが如くなれども、維新の偉人西郷の如きは、其晩年に於て成就せる所幾何もなく、寧ろ賊魁となりて、皇軍に抗したるも、天下の青年は、

河の美觀　河と文學　猿橋

西郷の偉大なる河口に泊して、其測る可らざる深遠に無上の尊敬を拂はんとす、吾人は其に其材の偉なるを敬して、範とし鑑とすべきも、其間自ら二者の異なる所を見ざるを得ず、かくて二者長短を檢し來りて、異なる尊敬を捧げざるべからず、各に對する敬意に至りては兩者各別あるべく、かの粗野なるが如き上野の銅像に對する吾人の敬意と、莊儼なる藤公に對する敬意とは、讀者の選ぶ所に委せん。

三、河の美觀河と文學

甲斐國桂川に架したるものに猿橋あり、其狀水面より高く空にかゝれるが如し、古來其名著しくして、命じて我國三奇橋の一となす、正墻適所が、

雲埋老樹雲容變、　水拍危巖水勢驕、　誰識行人斷腸恨、　一簑寒雨渡猿橋、

四國雜記に曰く、

雲霞漠々渡長梯、　四顧山川眼易迷、　吟步誤令疑入峽、　溪隈殘月斷猿啼、

名のみして呼ぶも聞えぬ猿橋の

下に答ふる山川の音
谷深きそばの岩はの猿橋は
人も木末を渡るとぞ見る

此所の風景さらに凡境にあらず、頗る神仙逍遙の地とおぼえ侍る、この橋に種種の説侍る、むかし猿のわたしけるなど、里人の申侍りき、さることもありけるにや、信用し難し、この橋の朽損する時は國中の猿かひども集りて、勸進などして渡し侍るとなん、しかあらば其由緒も侍ることなり、ところがら奇妙なる境致なり。

御伴の數の記に曰く、

猿橋は長さ十七間、幅二間の板橋なり、削りたてたるが如き巖の上にわたせり、橋の上より水際まで十二三間、水際より水底までまた十二三間なりといへり、橋の上より見おろせば、岸のなからばかりより、生出たる木ども、あまそゝりそそり立ちて、いと暗ふ茂りたる中より一筋の瀧津瀬轟もさやかに轟き落るがこれも五六丈もあらん、岸よりすこし降りて、橋の裏を見る所あり、此處より仰ぎ見るに、橋柱立つべき所あらねば、兩岸より大きなる材を、雁の幷び行くらんやうに、つぎつぎにさし出して、橋のけたを受けて、其上に板を伏せたり、其巧なること目を驚かせり。

以上記する所、新らしき文明眼より之を見れば、別に驚くに足らざることなれども、古人が架空の橋を目して、猿猴などの通ずる所となせしも、亦所以あるところなるべし。

阿波國吉野川の上流にあたりて、一支流松尾川あり、松尾川は實に同國美馬郡祖谷地方の中央を流るゝもの、此の川に橋を架するに蔓を以てす、名づけて蔓橋といふ、蓋し、天險の地にして交通不便なれば、之れによりて兩岸を聯絡せるものなり、蔓橋は古來各地に存せしよしなれども、今やまた他境に於ては見がたきものなり、祖谷紀行に云ふ、

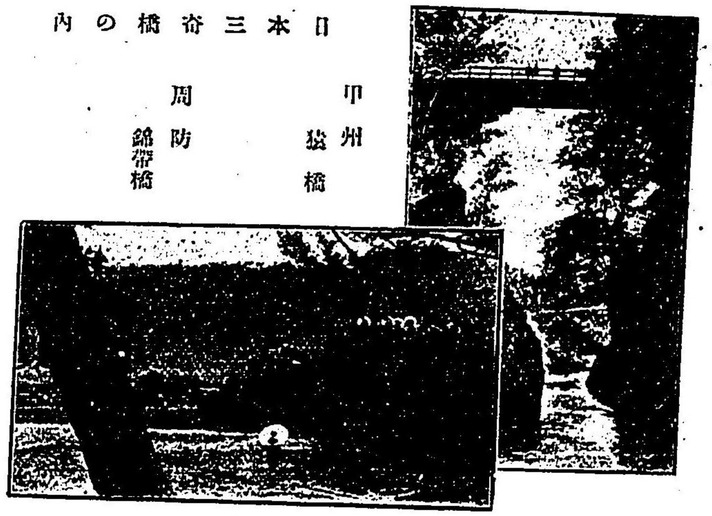
祖谷は美馬郡なれど、昔は三好郡なり、峰須賀の初世より美馬に附く、或は寛文

錦帶橋

日本三奇橋の内

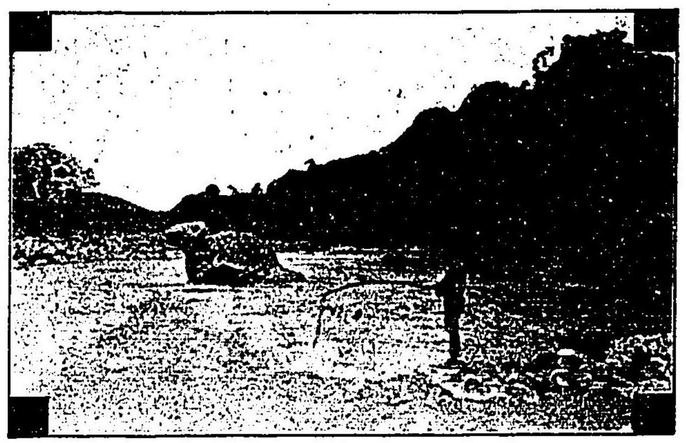
甲州　猿橋

周防　錦帶橋



中なりとも云ふ、南北遠き所は六里、近き所は三里餘、東西遠き所は十五六里、近きは十二三里、其地いと幽邃にして仙境の如く、ほと〳〵桃花源の趣あり、昔安德天皇隱れましゝ所にて、其陵また平家の赤旗なんど世に云ひなす、或曰、慶長十一年初て祖谷へ檢地入る、然れども徭役は御免なりと、僻遠なる故なるべし云々。

周防國岩國川に架するものを錦帶橋となす、これ前二者と幷せて之を我國の三奇橋となす。



耶馬溪の勝

錦帶橋　　頼春水

五條連作一長條、錦帶高懸到紫霞、
不見相如題去柱　惟知織女度來橋、
雌雄截雨虹霓接、斷續受風烏鵲飄、
儘行人行搖未墜、青山相對水迢々、

又有方錄云、橋長三十餘丈、作五大柱、每柱疊石、高三丈許、鎔鉛補塡其罅、大畧上銳而下方、上不銳則受水而必激、下不方則戴橋力弱、柱間數十丈、棟梁交架、鉸鐵綴之、とあり、以て三橋の特長を察すべし。

又豐前山國川に沿へる所、耶馬溪の勝あり、頼山陽の記之をつくせるものあれば、こゝにこれを贅せず、備中賀陽郡に豪溪あり、巉岩の蹠

寒霞溪

立せるものあり、幽溪深谷綠樹紅鳥の風景極めて絶佳なり、文政の頃、武元登々庵谷中の一石に刻して天柱と云ふ、天柱山の名茲に起れり、小豆島に寒霞溪あり、星城山の麓にあり、秋時紅葉の景を以て最となす、柳北紀行に云ふ、

内海村は神驅の麓なり、此邊所々にある石磴みな自然石を以て作る、古色愛すべし、山路に登るに隨ひ、溪水潺湲として、奇石磊砢たり、登る凡半里餘素麺瀑にいたる、此瀧は三丈餘の巨巖の間に流れ、水條線の如く下る、其兩岸峰巒突起して、其狀劍の如し、ます〳〵進んで望むに、四面皆石山なり、澗水琤々として、青松巖頭に生じ、其際にあるは悉く楓樹なり、山形を四顧するに尖鋭鋒及の如きものあり、危立屏風の如きものあり、老獅咆哮する狀なるもの、巨人の坐嘯する姿のもの、其他千狀萬態、洞門を開くもの、溪水を遮るもの、變化奇幻筆墨の寫し難き所あり、萬仞峰巒滄海間、雲籠老洞路縈環、林泉不似人乘物、始悟蓬瀛是此山、とあり。

昇仙峽

甲斐荒川の峻谷を昇仙峽と云ふ、また前耶馬寒霞と並稱せらる、二者三奇橋と

昇仙峽の下甲州御嶽雲虹瀧

共に勝地たり。

河岸河畔の美景は　決して二三にして盡くるものにあらず、幾多河流皆特長を有して、各一方に霸たるもの、從つて詩仙、歌人の口に上るもの多し。

月泛桂川　柴野栗山

桂山涵秋々似水、白雲鏡樹鏡中開、
廣寒宮殿應非遠、一棹仙槎貫月回、

大井川(桂川)　紀貫之

大井川河べの松に事問はん
かゝる御幸やありし昔も

大井川三船の遊のとき　藤原定頼

水もなく見え渡るかな大井川　在原業平

峰の紅葉は雨とふれども

古今六帖

大井河浮ぶ鵜舟の篝火に

小倉の山は名のみなりけり

桂川所見　頼山陽

雨添寒漲岸痕遙、紅樹青林路一條、林叟入城歸到晩、驅牛過水自過橋、

大井川　香川景樹

大井川かへらぬ水に影見えて

今年も咲ける山櫻かな

大井川　鬼貫

しよろ〳〵と常は流るゝ大井川

日くるれば落花に雪の大井川　芭蕉

賀茂川

の如きは、都に近き大井川にして、かの三舟のことにても、また嵐山の紅葉によりても知られ、文學の名作また多し、賀茂川には、曾丹集に、

御濯する賀茂の川風吹くらしも

すゝきにゆがむ妹を伴なひ　紀貫之

賀茂川

あれ引に引つれてこそ千早なる

賀茂の川浪立わたりけり　源順

同

千早振賀茂の川霧さる中に

しるきは摺れる衣なりけり　鳴長明

同

いし川や瀬見の小川の清ければ

月も流を訪ねてぞすむ

宇治川

地と人

從近江國上來時至宇治河邊作歌　人麿

物部の八十氏川の網代木に
いざよふ浪の行方知らずも

宇治川作歌　萬葉集

あき風に山吹の瀬のとよむなへ
あま雲かける匂にあるかも

氏河はよと瀬なからし網代人
舟よばふ聲をちこち聞ゆ

夫木集に

眺めやる宇治の川瀬の水車
とことはにこそ君はかけゝれ

宇治川　子規

宇治川やはつりはつりと春の雨

淀川

同　山田百枝

こゝを瀬と打爭ひし武士の
其名流るゝ宇治の川浪

淀川　鬼貫

淀川の姿重たや水車

同　爲家

舟おとす淀の川瀬のあさ霧に
たえ〳〵見ゆる岸のかち人

花朝下澱江　藤井竹外

桃花水暖送輕舟、背指歸鴻欲沒頭、雪白比良山一角、春風猶未到江州、

澱江上舟　落合雙石

雨餘芳草欲成煙、花盡新林哭杜鵑、遊跡天涯猶未遍、東風又上澱江船、

五十鈴川　五十鈴川を　地と人　西川法師

御裳濯の岸の岩根によをこめて
　固め立てたる宮柱かな

八田知紀

同

おりたゝんことも畏し神垣や
　みもすそ川の清き流は

平泰時

紀之川(夫木集)

春たけて紀の川白く流るめり
　吉野の奥に花や散るらん

入紀　　頼山陽

幾樹青松挾路堆、遙見城堞樹間開、沙川溶々人呼渡、此水知從芳野來、

又紀伊の南方熊野川あり、古史すでに傳へて、此の溪谷史的價値を認むるも、未だかの熊野川の二支流が各奇勝に富めるを傳ふること精ならず、吾昨夏船を僦ひて東方の一支流北山川に臨み、奈良三重和歌山の境界につきて、滝口峽の勝を

峽すべり岩

探る、玉置口より溯る五町、此間勝地なきにあらざるも、之を後者に比しがたく、後の八町は所謂滝八町の勝にして、かの滝と稱するは、水流極めて靜穩なるによりて附せられしものなれども、未だ此一辭を以て、全景を評しがたきもの、林の如く楯の如き兩岸の巖石は、八町に亘りて悉く奇ならざるはなく、怪ならざるはなし、鑿の如き天柱岩が、常綠樹に掩はれて天に冲せんとするものあり、削れるが如き烏帽子岩、歩して天に昇るべき天梯岩、水に臨みて、彼岸に飛ばんとするものは獅子岩なり、深く水底に沈まんとして、辛じて四體を水上に認むるものは蛭ヶ岩なり、かの天柱折け地維

欲くの狀を、今目の前に見るものは、すべり岩なり、口瀞より奥瀞に至る間は、一歩に其景を變じ、一棹また其趣を添へ、兩岸船に迫り、細舟通せるかを惧るゝも、のは、流水右轉左曲すればなり、三段の躑躅所を得がほに咲けるを見ては、たゞ妖怪なんどに囚はれたる心地せらる、高く岩壁に咲けるものは、實際の花なり、中段の花は落花の泡沫と共に狼藉として流るゝものなり、深く水中にあるものは、上段の花影瀞水の底に徹するなり、河水は花を浮べ又花を宿し、或は密或は疎、水に濃淡あれば、花また此と趣を同うす、嶄岩の奇勝、彫琢の妙、懸岩は空行く雲と徂徠するが如く、下なるものは水と流るゝかを疑はしむ、深く抉れるものは洞をなし、淺きものは文(アヤ)をなし平滑なるものは天壁を形成す、天斧の技此につきたりと云ふべきか、行客は左眄右顧に忙はしく、舟入また説明に勞せらる、舟行平かにして、而も舳艫其景を異にするもの、之を他に求めがたく、地は僻にして、境は幽、行旅容易ならず行李またつがず、鐵道網國内に洽くして、而も輕車の之に通ずるものなく、文明の今日猶斯の如くなれば、古今此勝を詩にし歌にし、又文にするもの多からず。大八州遊記云、

熊野川之舟、新宮距宮井五里、兩岸奇巖、怪石、往々在焉、或如巨人、或似浮圖、或爲卷絹畠狀、形狀不一、岸上諸山、間有石骨迸出者、與青嶂疊翠、輝映如畫、或有瀑布、隱見於老樹蔽陰間、如白蛇下飲澗、

とあり、又宮井より舟に投じて熊野川を下ること九里、舟行矢の如く二時にして達す、之を九里峽と云ふ、兩岸の奇勝瀞に及ばざるも、五町にして一奇、十町にして一勝、熊野川は行く行く支流を含みて、流水次第に澆に、支流の流るゝ所、奇勝また少からず、谷窮まる所白布天にかゝれるものは、飛雪の瀧なり、又葵の瀧なり、峭立の岩柱林立せるものは撞木山、河岸少しく寛なるものあれば、平砂岸に横はりて蛇の如く、兩岸大に窄る所、怪岩瀞につゞ、河流つきんとする所御船島あり、毎年一度里人島を巡りて歡樂の會をなす、河口に及んで逢萊山あり、近く秦の徐福の墓あり、以て九里峽の勝景の終を全うするもの、

九里蜿蜒盡、　北顧翠螺堆、　海城龍氣鬱、　雲路鵬程開、
地勢人煙密、　舟帆賈客來、　旗亭酒可飲、　坐到夕陽頹、
天風吹短髮、　飛樓接太虛、　海雲茫無際、　萬里送龍腥、
空水不凝眼、　下瞰南極星、　此景已邈矣、　仙夢入杳冥、

新宮に詣で給ひて熊野川にて　後鳥羽院御製

熊野川下す早瀬の水馴棹
さすかみなれぬ波の通路　後嵯峨院御製

熊野川瀬切りに渡す杉舟の
へなみに袖のぬれにける哉

又熊野川の西方數里にして那智瀧あり。古來傳へて直下八十丈となし、且又國内第一の瀧となす。

那智瀧

那智瀧

石走る瀧にまがひて那智の山　花山院(夫木集)
高根を見れば花の白雲

那智の山雲居に見ゆる岩根より
千尋にかゝる瀧の白絲　光明寺攝政(夫木集)

那智の瀧の有樣かたりしを
三熊野の那智の御山に引く注連の
打はえてのみ落つる瀧哉　鎌倉右大臣

久方の天の川瀬もあせぬらん
雲より落つる那智の大瀧　西田直養

西行は之を三重の瀧と云ひて

身に積る言葉の罪も洗はれて
心すみぬる三重のたき

贈幽芳禪師　菊池溪琴

清晨入熊山、　凌雲觀飛瀑、　連峰七十二、　洞天三十六、
羽人任去留、　雲車自往復、　攀頭不可窮、　還憩大嶽麓、
一笑訪芳公、　巖花發幽馥、　採之日已暝、　手拂遺蕊宿、
謂若何宏麗、　異材開華屋、　維昔結構初、　龍女獻嘉木、
空公大神通、　群靈助威禰、　靈蹟于今故依然、
白鹿銜花青牛眠、　明月遙想蒼海前、　蹣跚徘徊萬松邊、　芳公牽我衣、
要我賦眞篇、　青牛白鹿如有知、
磵邊頑石餘解禪、　天宇寥々山容寂、　聽我鐵笛弄遊仙、

筑後川

筑後川(一名千年川)

君がため限もあらじ千年川

井堰の浪の幾めぐりとも　光明寺攝政

荒瀨獻舟下筑後河懷古悵然成詠、　遠帆

山勢接天起、　雄拔似蟠虵、　河流繞其麓、　惡浪拍岸浮、　我來便道獻舟筏、
遠望肥州近筑州、　長河日落荒煙合、　忽惹蒼茫萬古愁、　想見菊池子、　出師
此運籌、　指揮八千卒、行軍肅不哢、　賊兵六萬來河陣、　飛箭如雨時沙頭、
潛師渡河直撞突、　勢如鷹隼擊鵠鷄、　一戰殊勳已無匹、　數世至節有誰儔、
千載忠魂歸何處、　山光水色鎭悠々、　兩岸漸寬灘漸緩、　鷗鳧拍々水如油、
兒女不知當日事、　菱歌唱起滿汀秋、

球摩川

肥後陣中(球摩川)　山田空齋

水色如銀月色流、　砲聲漸絕夜悠々、　清風一陣吹塵去、　占得球摩川上秋、

射水川

射水川

朝床に聞けばはるけし射水川
あさ漕ぎしつゝ歌ふ舟人　萬葉集

越後守にてくだり侍りしに、射水と云ふ所を渡りて、上つと云ふ所にとゞまりたるに、松蟲の鳴きしかば（橘爲仲）、

我ならぬ人は越路と思へども
誰がためにか松蟲のなく

信濃川

信濃川（越の大川）（上流千曲川）　岡部春平

三篤かる信濃の山路千曲經て
ながらへ落る古志の大川

五月千曲川を船より下るに、しばし打そゝぎたる雨なごりなく晴れて、宮ゐけたれば、岸の夕映心地よげに見渡されたり。

長堤むら雨晴れてはる〳〵と
綠色添ふ岸のあしはら

萬葉集

信濃なる千曲の河のさゞれ石も
君し踏みては玉と拾はむ

新續古今集　式子内親王

君が代は千曲の川のさゞれ石の
苔むす岩となりつくすまで

風雅集　順德院

千曲川春行く水にすみにけり
消えていくかの峰の白雪

又、千曲川犀川と合する所、河中島あり、上杉武田の故地として最人名あるもの、山陽が、

鞭聲肅々夜過河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇、

海莊

龍戰虎鬪無暫休、越軍甲兵互結仇、自古英雄不並立、至今二流交爭流、
雪封殘壘蛟蛇走、秋冷荒祠風雨愁、唯有興亡長不管、蘆花洲畔一鷗眠、

元是英雄酣戰地、稻花看作陣雲連、　大涯詩佛

曉霧到今迷野鳥、秋風如此咽寒蟬、猶憐父老存遺蹟、一座叢祠傍碧田、

天龍川

天龍川　十六夜日記に曰く、

天龍のわたりと云ふに舟にのるに、西行が昔も思出されて、いと心細し、くみあはせたる舟たゞ一つにて、多くの人のゆきさしかへる隙もなし。

水の泡の浮き世に渡る程を見よ
早瀨の小舟掉も休めず

謠曲東國下には、

はや横雲の引間より、天龍川も見えたり、衰へはつる姿の池田の宿、鹽阪、旅寐にだにもなれぬれば、夢も見附の國府とかや。

光行海道記には、

天中川を見れば大河にて、水面三丁許あれば、舟にと渡る、流早く波さかしく

して、掉も差得ねば、大なる杁を持て、横様に水かきて渡る、張博望が牛漢浪に溯りけん、浮木の舟のかくやおぼえて、

よしさらば身を浮木にて渡なん
天つみ空の中川の水　井上氏女

天龍河上天龍遊、龍去天高二水流、二水中分成大小、小斯厲揭小斯舟、　横瀨定隆

諏訪の海の氷解くらん遠つあふみ
天の中川渚まされり　梁川星巖

一道奔流劈地開、灘聲捲雨鬪風雷、蹇予無翼共飛翀、兩道天龍河上來、

木曾川

木曾川

木曾川へ流れこみけり天の川　小林一茶

散るものはなくて筏に青嵐　也有

木曾川や藤さく下を行く筏　玉遂

なか〳〵に色もはなたで信のなる　源頼光

木曾路のはしのかけたるやなぞ、　宗良親王

木曾路川渦まく瀬〻の浪ならば
行巡りても立ち返らまし

恐ろしや木曾のかけぢの丸木橋　空仁法師

ふみみるたびに落ちぬべき哉

風越の峰越くれば木曾路川　鳴長明

波も一つにうつせみの聲　服部南郭

岐嶇從來險劍門、　陆危不管近焦原、　巖連棧道懸空渡、　峽急灘聲轉谷昏、
溪聲擊石鬪奔雷、　危棧懸崖一線回、　不問先知入岐蘇、　萬峰飛舞自空來　菱田海鷗

發大垣至長島舟中作　梁川星巖

一篙煙水碧茫々、　舟路東連百八鄉、　好是南風菰米熟、　家々手甑舂珠香、

連日岐蘇峽、　盤回往若還、　城墟松樹外、　驛市澗流邊、　危棧躡雲度、
幽窓聞鹿眠、　偏知夢魂淨、　地底有溪泉、

拙堂氏の岐蘇川を下るの記はこゝに略す。

大井川は、古來逢莖の事によりて著名なり、　中島米華

大堰川

大堰之水不受舟、急灘如雪咽且流、壯丁一群死爲堵、憑河宛與平地作、
搴衣且騎周章頂、銜索便爲孺子牛、昨雨河流長幾尺、十歩一蹶頭欲白、
江亭把酒聊自勞　始知來路山光碧、

又、海道名所圖繪に、

此大井川古より、舟なく桴なくして、往來の人は島田金谷の川越所に立寄り、何文川の定をきゝて其賃を渡し、割符を取つて渡丁に越さしむ。交易の賈人、京登り吾妻下り、伊勢まいり、富士詣など、八人悪の臺にのせられ、又肩車にてわたすあり、相撲の關取は人を雇はず、丸裸に成つて、土俵入の如くわたるものなり、卿相の雲客、列國の諸侯は、駕を臺に据ゑて、水候ぎの備夫は前後を圍む、急流に足を揃へ聲を合せて渡す、渡丁は紅葉散り水落て、冬川の寂きに弱るも、みかさ増す夏河を質に入れ、かしかりの沙汰、羅山子のいへる如く、己が草の戸は流るれども、道たけの借錢をなして、五月雨の水に威を増し、下り酒の菰を解て宴するとぞ。

更科日記に云ふ、

大井川と云ふわたりあり、水の色世の常ならず、磨粉などをこして流したらむやうに白き水、早く流れたり。

十六夜日記に云ふ、

菊川を出でて、今日は大井川を渡る、水いとあせて、聞しにはたがひて煩なし、かはらいくせとかや、いと遙なり、水のいでたらんおもかげ推しはからる。

思出る都のことは大井川
いく瀬の石の數も及ばし

さみだれの雲吹きおとせ大井川　芭蕉

多摩川(六郷川)(又名、石瀬川)

玉川を雪かと見れば四月かな　鬼貫

地と人

あまそぎに雪ふり積める舟を見て
　渡りがたきは石瀬なりけり
船とむる石瀬のわたり小夜ふけて
　宮崎山に出づる月影
篝火の影にぞしるき玉川の
　鮎ふす瀬には光そひつゝ
拾遺集に
玉川にさらす手づくりさらさらに
　昔の人の戀しきやなぞ

墨田川　古今集に、

むさしの國と下つふさの國との中にある、角田川のほとりに至りて、都のいと戀しうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて、思ひやれば、限りなく遠くもきにけるかなど、思ひわびて、ながめをるに、渡守はや船にのれ、日もくれぬといひければ、舟にのりて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なくもあらず、さる折に、白き鳥のはしと足と赤き、川の邊に遊びけり、京には見ぬ鳥なければ、皆人しらず、渡守に、之れは何鳥ぞと問ければ、これなん都鳥といひけるを、聞てよめる。

名にし負はゞいざ事問はん都鳥
　わが思ふ人はありやなしやと

隅田櫻花　　亀田鵬齋

長堤十里白無痕、訝似澄江共月渾、飛蝶還迷三月雪、香風吹渡水晶村、

　　林羅山

漾々溶々一葉舟、河邊秋景唯愁秦、自從在五詠歌後、流水飛禽愁殺人、

　　物徂徠

東都四時樂之四

澄江風雪夜霏々、一葉雙榜舟似飛、自是仙家酒偏醉、無人能刻溪歸、

　　藤田東湖

莫使青年背物華、探芳覓句是生涯、悠々塵世千般事、附與長堤十里花、

墨水晩望　東湖

澄江一帶二川窮、武總風光望不同、點々花明遠邨外、迢々鳥沒晩雪中、
萬家盛宴燈連水、千尺長橋人駕虹、還羨漁翁閑事業、烟波穩處挂孤篷、

墨水覽古　高闌亭

空林精舍墨河頭、梅子祠前弔遠遊、華表蒼苔封舊色、佳域楊柳亂春愁、
孤村雲擁長堤樹、二國潮通古渡舟、此地猶餘懷土淚、大江千里向西流、

利根川　梁川星巖

利根川　刀禰河上口號

東寧河上西風急、征馬長嘶日欲頹、地近二毛山漸出、天當八月雁初來、
英雄骨朽餘軍壘、雀鼠聲稀長草萊、饑困猶勝兵燹后、幸逢昭世莫興哀、

毛武分風土、一川界二州、田疇半桑樹、道路稍陵丘、偶遇江門客、山田方谷

曰乘刀水舟、試詢程遠近、四百里長流、

鬼怒川　安積艮齋

鬼怒川(又、絹川)

浮原炊煙遠欲無、平砂人散鳥相呼、千峰落日凝金碧、小李將軍著色圖、

鹽原箒川　尾崎紅葉

(前略)流の水上は淺くあらはれて、ずはやこゝに空山の雷、白光を放ちて、くづれ、落ちたるかと、すぎましかり、道の右は山を劉りて長壁となし、石幽に苔綠にして、幾條ともなく、白絲を亂し懸たる細瀧小瀧の、珊々として灑げるは、嶺上の松の調も、さだめて、この緒よりやと、見捨て難し。

箒川(鹽原)

車を驅りて、白羽阪を踰えてより、回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は始めて奇なり、これより行きて道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全逕にして三十橋、山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑、地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯、なほ數ふれば十二勝十六名所七不思議、一々探り得べくもあらず。

阿武隈川

そもそも鹽原の地景たる、鹽原郡の南より、群峰の間を分けて、ふかく西北に入り、蘇々として、箒川の流に泝る、片そばにして、いたる處、巉巖の水を夾まざるなきは、宛然青銅の藥研に、瑠璃末を碎くに似たり。まづ大網の湯を過ぐれば、根本山魚止瀑、稚兒淵、左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗に、云々。

一村十二戸、温泉は五箇所に涌きて、五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南にあたりて、箒川のゆるくめぐれる磧に臨み俯しては水石の粼々たるを弄び、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁にかゝりて、素練をたれたるごとき吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。

阿武隈川(又逢隈川)　夫木集に兵衛内侍

明ぬるか遠方人もあふくまの

七瀬の霧に袖の見え行く

廻國雜記

かくしつゝ故郷人にいつかさて

逢隈川の逢瀬にはせむ

古今集　大御歌所風俗歌

逢隈に霧たち渡る明ぬとも

君をばやらじまてばすべなし

宗久紀行　都のつとに、

廣き河の邊に出でぬ、此なん逢隈川なり。都にて遠く聞渡りし名なれば、隈なく遙に來にける程も思ひ知らる。

渡守船さしよせて、道行く人ども急ぎ乘出で侍りしに、水上遠く見渡せば、重なる山の中に、煙の立上る所のありしを、舟子共に問ひしかば、元弘の亂に、鎌倉の亡びしより、此煙立初て、今に絶えぬなりと、語りしこそ、最不思議なりしが云々。

最勝四天王院の障子に逢隈川かきたる所、

君が代に逢隈川の埋木も
　氷の下に春をまちけり　　源重之

ゐなかに侍べる頃司召しを思やりて、

春毎に忘れられける埋木は
　花の都を思ひこそやれ

橘爲仲朝臣陸奥守になりて侍りける時、延任しぬときゝつかはしける。　藤原隆資

待我は哀れ八十年になりぬるを
　逢隈川の遠さかりぬる

阿武隈に務立てといひしから衣
　袖のあたりに夜も明にけり　　源重之

寛永六年八月、最上に着きける時、

最上川早瀬に月も流されて
　暫し浮き世に住むかひもなし　　澤庵和尚

最上河舟中

蒼山懸路絶、丹壁曲川通、斷驛臨流樹、孤帆欲暮風、北溟雲浪接、南望水烟空、探勝從茲過、狂生途未窮、

最上川上れば下る稲舟の
　いなにはあらず此月ばかり　　高陽　古今集

五月雨をあつめて早し最上川　　芭蕉
風の香も南に近し最上川　　同人
暑き日を海へ入れたり最上川　　同人

日光白絲瀧　　同國雜記

世々を經て結ぶ契の末なれや

この瀧の尾の瀧の白絲

寂光瀑布　好古

寂光寺古登青霞、絶壁高懸水一條、若使謫仙遊此境、盧山勝地永寥々、

東涯

峰尖松暗白雲迷、雪瀑半巖懸欲低、料識山僧長對看、不知雷却黑迦黎、

合滿驟雨　一英

古樹回巖達四溪、疾風甚雨眼初迷、群山忽入冥雲裡、雲色飜龍千尺溪、

寂光瀑布　慈泉

千尋素練掛青巒、濺沫飄風六月寒、怪看天孫降此地、雪裙長成暮雪端、

李邦彥

始訝銀河落、飜疑素練垂、靈山無李白、未必獨專奇、

裏見瀑　暫時は瀧にこもるや夏のはじめ　芭蕉

霧降瀧　くだけては三千尺や瀧の月　蓼太

如蟲行縫蛾旋磨、路險奈其回首難、下盡羊腸神始定、煙霏撩亂畫生寒、

日光幻出銀龍背、素練中裂珠細碎、穴機巖因不可支、開帳鬼物呈千怪、

似霧非霧雪亂虹、衝突而騰々復降、濺沫滿身殊未去、強將詩膽對飛淙、

更に唐國詩人の作を見るに、黃河を詠せるものには、

出塞行　王昌齡

白草原頭望京師、黃河水流無盡時、秋天曠野行人絶、馬首東來知是誰

咸陽城東樓　許渾

一上高城萬里愁、蒲葵楊柳似汀洲、溪雲初起日沉閣、山雨欲來風滿樓、

鳥下綠蕪秦苑夕、蟬鳴黃葉漢宮秋、行人莫問當年事、故國東來渭水流、

咸陽懷古　劉滄

經過此地無窮事、一望凄然感廢興、渭水故都秦二世、咸陽秋草漢諸陵、

天空絶塞聞邊鴈、葉盡孤村見夜燈、風景若々多少恨、寒山半出白雲層、

渡黃河　屠隆

野曠天低日欲西、北風吹雪雁行低、黃河渡口行人少、一片寒沙沒馬蹄、

又、楊子江には　李白

蘇臺覽古

舊苑荒臺楊柳新、菱歌清唱不勝春、只今惟有西江月、曾照吳王宮裏人、

楓橋夜泊　張繼

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、

湘南即事　戴叔倫

盧橘花開楓葉衰、出門何處望京師、沅湘日夜東流去、不爲愁人住少時、

琵琶行　白居易（樂天）

潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々、主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、
醉不成歡慘將別、別時茫々江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、
尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、移舟相近邀相見、添酒回燈重開宴、
千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面、轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情、

絃々掩抑聲々思、似訴平生不得志、低眉信手續々彈、說盡心中無限事、
輕攏慢撚撥復挑、初爲霓裳後六么、大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語、
嘈々切々錯雜彈、大珠小珠落玉盤、間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘、
水泉冷澁絃凝絕、凝絕不通聲暫歇、別有幽愁闇恨生、此時無聲復有聲、
銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、曲終收撥當心畫、四絃一聲如裂帛、
東船西舫消無言、唯見江心秋月白、沈吟放撥插絃中、整頓衣裳起斂容、
自言本是京城女、家在蝦蟆陵下住、十三學得琵琶成、名屬教坊第一部、
曲罷長敎善才服、妝成每被秋娘妒、五陵年少爭纏頭、一曲紅綃不知數、
鈿頭銀篦擊節碎、血色羅裙翻酒污、今年歡笑復明年、秋月春風等閑度、
弟走從軍阿姨死、暮去朝來顏色改、門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、
商人重利輕別離、前月浮梁買茶去、去來江口守空船、遶船明月江水寒、
夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干、我聞琵琶已嘆息、又聞此語重唧々、
同是天涯淪落人、相逢何必曾相識、我從去年辭帝京、謫居臥病潯陽城、

潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、其間旦暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴、春江花朝秋月夜、往々取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、嘔啞嚦哢難爲聽、今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行、感我此言良久立、卻坐促絃々轉急、凄々不似向前聲、滿座重聞皆掩泣、就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕、

河の利用厚生

河は防禦の具

河は航路

四、河の利用厚生　古代人智未開の時に於ける河流は、常に交通の妨害をなしたれば、古人之を利して、よく防禦の具となし、遂に金城湯池となすに至れり、かの富士川の合戰に於ける源平二氏の對抗の如き、また西宇治瀨田の如き皆然らざるはなく、中世史上の彩華たりし、佐々木信綱先陣の如き、皆之なりしも、今や河流を利用して、交通の便を助くるに至れり、河道の浚渫之なり、運河の開鑿亦之なり、一葉の片舟は裝を修めて、數百石積の船舶となり、更に汽船となり、汽力の應用によりて、河流を駛行するに至れり、不幸にして、日本の河流は交通上より見たる恩惠餘りに多からず、すでに前述せしが如く、眞の下流をなすもの

河と中清革命地

多からず。從つて木造の小舟には利なきにあらざるも、汽船の航路たりがたきために、利用外國の大河に如かざれども、小蒸汽船に至りては、少しく利用せらるゝ所あり、又小舟の類に至りては、よく輕便なる器具を以て、陸上交通に代はれるものあり、交通より見たる恩惠なしと云ふべからず。

まして之が大陸地方に及ぼせる恩惠に至りては、實に甚大なりと云はざる可らず、中清の革命軍北京朝廷を覆さんとする時、革軍の主とし蜂起せし所は、皆楊子江に沿へる地方にして、たとへ鐵路北より來りて漢口に及び、北中兩清の聯絡をなせるも、江畔一帶の地をして、よく北清地方と聯絡せしめんには、必ず長江を利用せざるべからず、革軍此地方によりて、一は長江の交通上の便あるを利し、更に又交通上の妨害となるものあるを利し、遂に北京朝廷をして隱退の餘儀なきに至らしむ、江の研究はたゞに地理上また產業上の必要のみにあらざるなり、上流遠く成都に至り、汽船航路の長大なること、又特に洋上航路として、汽船の溯上し得べきこと、江岸一帶を益せしこと大なりと云ふべし、其他

歐米の大河

北米に於ける、ミシシッピーの如き、セントローレンスの如き、又南米アマゾン以下の大河、歐洲に於ける文明國の河流の如き、テームス、ライン、エルベ、ドナウ、セイン、ガロン、ローヌ、ロアール數へ來れば、浚渫の工によりて、よく河流が交通を助けしこと頗大なりと云ふべく、たゞに航路たるのみならず、遂に河港の發達を見、又運河の開鑿起るあり、陸上の交通系と合して、交通上の利をなす一再にとゞまらず、かの楊子江畔の開港場に見るも、ロンドン、ハンブルグの諸港に見るも、河流に沿へる河港の利益多きこと、甚大にして、開鑿せる運河は、かの黄河、楊子江を通せしものを初として、更に近來盛に起り來れる、文明諸國の運河と、スウエズ、パナマの如き、大海を通ずるものと、合して皆交通の要路となり、其

河港と運河

流域も交通路

賃銀の低廉なるために、陸上交通を壓倒せんとするものあり。

河流自ら交通の恩人たると共に、河流域はまた交通の要衝たり、平野大ならざるも、河畔必ず平坦の途を求むるを得、之によりてよく流域の間に陸上交通行はれ、又更に之を延長して、二三流域を通ずる隘路嶺を以て、幾多交通系の聯絡をなし、河畔の鐵路が、時々不測の災害を蒙りながらも、常に河川の流域を往來し、河流の恩惠に浴するも、皆之なり、近く之を內地を求めんか、奥州線の鐵路が北上川、阿武隈川に沿ふて、遠く東陲に達し、木曾川に沿へる中央線、信濃川畔の信越線、淀河畔の電車鐵路、市川、朝來川に沿へる播但線、吉野川の阿波鐵道、紀川の紀和線、遠賀河畔の炭坑鐵道、さては十勝川石狩河畔皆之ならざるはなし。

河の堆積作用

下流の新陸地

五河の堆積作用　年々歲々瞬時憩ふ事なく、常に下流に向つて不息の運搬作用をなし、上流中流所も撰ばず、機會ある毎に、土砂塵埃石礫の如き、また腐朽の木葉草根を運んで下流にいたし、一部は之を海に致して、よく海底の深潭に向ひて、大膽にも新陸地の建設を試み、孜々として怠らず、或は下流に其包有物を放擲して顧ざるものあり、下流に於ける新陸地はかくの如くにして生じ、肥沃なる河岸の地を構成し、又三角洲となりて、新都この上に建設せられ、美田之に建造せらる、此都此田畑が、人生に與ふる效果は、獨りナイル河にとゞまらず、かの紅河が北方山中より來つて、東京灣に沒する時、誰か千三百餘年にして、よく

河畔の美地

河内海防間の、數十哩の新陸地を建設せるを思はむ、ガンガ河口の如き、ミシシッピー河口の如き、皆此作用をなし、河畔をして人生に最利益ある所たらしむ。又河口のみならずして、中流下流の美田を營み、膏腴の田畑を作り、低平なる平原なり、草木先づよりて勢を逞うし、禽獸蟲類之につぎ、遂に人類の蕃殖を見るに至り、人類棲息の如何と、此平原利用の如何とは、やがて國家の消長する所となり、又更に人類の消長にも關するに至らん。

支那平原

セルバス

見よや、大河長江の流るゝ所、四千年史は此に起り、四億の生靈之によりて安きを、千里の曠野人影なく、禽獸草木の世界たる、アマゾナのセルバスを、五穀蔬菜有用生物の發育盛大に、牛馬羊豚野に充ち、鐵路縱横に通じ、都市相望む、ミシシッピーのプレーリースを、ラプラタのパンパス、ナイル河畔、ドナウ、ボルガ、ドン、ドニエプル、シヤテルアラブ地方を點檢し來りて、其恩惠の大なるに驚歎せざるものなけん。

プレーリース

其他大河畔

河畔の大都

之を内にしては、東京横濱の建設せられし關東の平野、京阪神の淀河及畿内平野、木曾の流城、太田川、北上川、手取川、旭川、石狩川白川悉く河畔乃至は準河畔の美地なるを、吾人若色圖をとりて、河流と平野とを檢し見んか、河の建設せる功勳の偉大なるを知るを得む。

河畔は米作地

河畔は低平の沃野たるのみならず、更に河水此の沃野に灌漑して、よく產業を發達せしむる功あり、特に米の如きは、陸田の產なきにあらざるも、其良質なるものに至りては、遂に之を水田に求めざるべからず、米食民に對する河水の恩惠は實に大なりと云ふべし。

水力利用

日本は平野の點より言はゞ、大河少く、從て河流に下流の能をなすものなく、或は運搬上に、農耕に利益少きも、かの一萬尺の高峯急に沒する所、河流の水勢極めて强大にして、落差大なると、軈て水力利用の業起れる所以にして、かの山川の畔によりて、僅に營まれたる草葺水車の如き、紡の如く玩具に類したるも、水車は進んで木挽に利用し、遂に之を水力電氣に試むるに至りて、吾山嶽國は偉大なる天與の動力を得るに至れり、山間の小部落が、水力電氣を利用して、電車

を以て唯一の交通路をし、電燈によりて燈油を利するに及びては、文明諸國に比して、至廉なる燈火を得、經濟社會に益せしこと幾何ぞや、近來工學を修むるもの電氣の科に群集せるを見ても、日本電氣工業の盛況を知るに足るべく、而も其動力が主として水力にあるを思へば、山國必ずしも憂とするに足らざるなり、否寧かゝる遺利を探究して、地利を善用することに努力せざるべからず。思へば古人が河を見ては逝くものは斯の如しと歎じ、沅湘日夜東に流れてと、なげき、流水徒に人を泣かしめたるの感あるも、河は空しく人を泣かしむるものにあらずして、發して文學となり、幾多の詩歌を生み、遂に白樂天の琵琶行に至りて窮まりたるに似たるも、天下後世また白易居の上に出でがたしと云ふべからず、河が智者を待ちて、利用厚生の大業をなせること前述の如く、人性を動かし、善良なる刺激を與ふるかくの如く、文運の發展進歩は須臾も止まらざる今日、更に其恩惠の偉大なるを謝するの日あるべし。

猶更に河流域につきて、政治上の觀察をなさば、吾人の新なる注意を惹起するに至らん、古史が流域に發達せしこと前述の如く、之を現今に見るも、一河一支流の流域は、優に一の政治區域を劃するに足るものなるを見るべし。かの信濃川の上流千曲川に於て、其一支流は一部落の中心をなし、北上川の流域最手縣に於ても、一支流は一の都市を有し、一郡の中心たるを見るも、人生と河流との密接の關係を知るに足らむ。

第四篇　海と人

一、古人の海觀　三千三百萬方里の渾圓球、其四分の三は青海原の占むる所、太平大西の二洋を初として、廣袤際涯なく、此等海洋の間に羅列碁布せるものあり、之を島嶼となす、又其形態宏大にして、四面環海の地にあらざるも、其輪廓邊緣は遂に海と絶つ能はざるものにして、人類發生の太古より親疎消長を免れざりしも、陸地と海洋との握手は、憂時も離別する能はざるもの、人類が主として、生存の境界を陸地の上に選びしも、有史以前より纏綿として、陸地に關係あ

る海洋を去りがたく、人類の史が海と關係あること此くの如くにして、而も人類文明發達の初期の時代にありては、其動物と隔つること極めて遠からず、瀕海の一部を除きては、動ちすれば、海洋と沒交渉なるものあり、更に甚だしきは、今日と雖倘海洋を解し能はざるものあり、海洋を知悉せざるものあり、驚くべきに似たれども、事實はまた如何ともすべからざるなり。

さはれ吾等の祖先が、如何に海洋と交渉し來れるかを研究すること、多趣にして又有要の事也、古代文明の發祥地は、概ね大河の下流にあり。此等の下流はやがて、海灣と遠からざるを思へば、海洋が古代文明の發生を促進する一條件なりしなるべく、又たとへ文明發生にはさまで關係なかりしとするも、文明の運搬にとりては、極めて重要なる交通路たりしなり。

されば東西の文明史を繙くの日、いづれの國いづれの地にも、常に海と斷ざる證左瞭々たるものあり、かの歐洲古代文明史には、地中海が極めて重要なりしが如く、吾が國史を見るも、神代國土經營の日より、海との關係密接なる者あり、

かの諸冊二神が、天の瓊矛を佩かせ給ひて立たせ給へる、磤馭盧島の事、之を今日の地誌に證しがたきも、古事記が、修理固成是多陀用弊流之國、と記せるを見るも、環海の群島が、洋々たる波間に浮沈するの狀を寓ふに足らむ。況してかの二神が立たせ給へる、天の浮橋が、海波の上に上下する片舟なるを思ひ、此片舟に乘じて、東航西漕國土の經營に任せられしを想見し、更に航海の困難なる古代にありても、御武勇にわたらせ給へる二神が、雄々しき御振舞を察知するに足らん。かくて淡路島よりして、大八洲を生み給ふに至れるまで、幾多の御困難を經て、海上の御生活にも馴れ給へるなるべく、國土の經營綏撫の事、御武勇と、御仁慈とを以て、國土に臨御ましませしなり。

此等國土は、人口未だ多からず、大和民族以外の種族もありしなるべきも、沃野遠く連り、氣候温暖にして、草木盛に繁茂し、瀕海低原の如きは、蘆荻いたづらに所を得、鷗鴨飛び禽獸走るものありしならん。之を後世よりするも、四國に渡り九州に航し、西は壹岐對島に及び、東本州は勿論日本海の佐渡隱岐に航せしが

如き、いかばかりの御苦辛なりけむ。

當時二神が高天原にましませしとは、古史の所傳なるも、高天原の所在は容易に說明しがたきものにして、之を國內に求むるものあれば、海外に求むるものもあり。議論百出決しがたと雖も、常に海上を馳駛し給ひて、舊土と新經營の地との間を往來せしことならむ。

又二神すでに國土の經營に苦心し給ひて、國內皇威に服するの日更に諸皇子皇親をして、港津又は海上水運船舶の事を支配せしめ、又諸神にも海人の事を司どれる少童(ワタツミ)又海神(ワタツミ)の神ありて、水師の起原は實に源を此に開けり。かの鹽土老翁の如きも、海神の一にして、爾來久しく、海神が吾が宗室と深き關係あるは、要するに海上支配の事は治世上重大要件なるによりてなり、たゞに國內又は瀕海に於ける、吾が國民の活動にとゞまらずして、更に海を渡りて、半島にも大陸にも往來せることあり。數千年後に至り、日韓合して一邦をなせること、國史の異彩なるに似たるも、神代の日すでに其遠因の存するあり。膨脹國民の意氣

は、海波を踏んで、容易に彼土に到着して、產業の方面にも、又治道の方面にも、皆其志を遂げたるものあり。二神の後に素盞嗚尊出でて、資性勇敢また海上統御に任ず、時に暴行ありたるも、出雲より遠く半島に渡りて、彼此の有無を通じたる功大なり。其子五十猛命が、韓國を治めたることあり。天孫降臨の後に至りては、天孫瓊々杵尊の皇子火闌降命彥火々出見尊が、海幸山幸を分有せりとあるは、海陸の支配權を分掌せるなるべし、火闌降尊が、海の幸を以て弟とかへしよりこゝに鈎針の事起れるも、彥火々出見尊は、海神鹽土老翁の援助指導によりて、海神の居を訪ふに至れり。(海神の居は龍宮と稱せられたるも、恐らくは天孫民族以外の、他神の居住地にして繁榮せるものにて、其邸宅構造の著しく美なりしがために龍宮の名ありしには、あらずや)かくて、海軍の勢力ある海神少童命の應援を受け、其女豐玉姬を娶りて、三年の後歸國するや、捲土重來其强大なる勢力を持して、皇兄を壓し、遂に後世海軍力必要缺くべからざるものなるを示し、海神の女、玉依姬は、又鵜鷀草葺不合尊と婚して、神武天皇を生み給ふ。

神武の東巡

神武帝が強大なる武力を持して、東方大和に入りしは、天皇の允文允武なる御聖德によると雖、勇家海神の後援も、亦偉大なる勢力なりと云ふべし、帝が舟師を以て、西陲の地より、遠く大和に入り給ふまで、海上に長日月を送り給へるのみならず、幾多の困難辛苦と苦鬪し給ふて、制海權を得、よく國内を統一し給ひしが如き、代々の帝王の範となり、典となりしも、後世大和の都城は海洋と隔りしために、海の事は多く忘却せられんとし、奈良の都より山城の都に至る迄、或は難波津の都、福原の都の如き、一二特殊のものなきにあらざるも、多くは海洋と交渉なく、古代吾日本國民は、沿海岸一部の人民を除きては、海洋と何等交渉なきため、遂に海事思想を失はんとせしも、神功皇后は婦人にして、而も有將男子を凌ぐの慨あらせ給ひ、祖神の後を襲ひて、半島を征伐し給へるも、皆制海權を掌握し得たるによりてなり、而も皇后の後、制海權次第に薄弱となり、半島も亦吾國の所有をはなるゝに至れり。

海と縁なき都城

すでに半島の領有權を失ひし日本が、たゞ國内の問題に齷齪として、海洋と久しく關せざるが如き間に、國民は益海洋を忘却するに至りて、やがて海洋をば恐怖すべきものとなし、魍魎の棲居となし、波浪打ち寄する濱海は、魑魅の居となし、怪物の住する不可思議の境界として、又顧みられず、武勇絶倫の士も、海に赴くを避くるに至り、邊防の將帥さへに舟師に長として、海上に赴くものあるも、内海の一部分又は近海の地に航するに過ぎず、舟師征戰に嚮ふものあれども、著しき航海の發達なく、木造の片舟怒濤にも堪へざるものなりしなり、源平二氏の雄を競へる際には、東西の武勇鋭を盡して、内海に臨めるも、梶原景時逆櫓の事より推すも、或は水島屋島壇浦の海戰に見るも、吾水師の發達極めて遲々たるものにして、二千年の文化は、海船の上に、何等の刺激ありとも思はれず、されば元國の大軍舳艫相銜んで西海にあらはるゝの日、遂によく之を海上に支ふる者なく、壹岐奪はれ、對馬掠奪せられ、九州の北部又次第に侵略せらるるの日、誰か邦家の安寧を思はん、海神幸に吾に福し、龜山上皇時宗の執權よく難局を處理して、島國を保持し得たるも、思へば悚然たるを禁ずる能はざるなり。

水軍未熟

隋唐に渡りし古も、後世宋明に航せし日にも、海上に於ては遂に雄を競ひがたく、制海の事に至りては誠に憫然たるの狀なり。此の間幸に他國の來侵なかりしも、環海の吾が國としては、實に恐懼に堪へざるものといふべし。豐太閤の征韓に至りて、舟師海軍は如何なる偉才の出現指導あるも、短日月の間に急造しがたき教訓を與へしと雖も。秀吉逝きて後は、退嬰保守の主義國民の頭腦を支配して、海外に渡航を企つるもの少く、五百石積以上の大船を禁じ、海上の勢力全く地に墜つるに至れり。

征韓役失敗の因

德川三百歲史はかくの如くにして終れり、明治の初年海事思想の養成に努力する者ありしも、何等の効果をも收め得ざりしは全く之が爲なり。實に海事思想に缺如せるのみならず、海を恐れ海を嫌ひ、更に海と親むものなく、海の研究に至りては、殆ど夢想だも及ばざる者あるに似たり。かくて廣大無邊の青海原は、海若の支配する所にして、人間の住むべき所にあらずとなし、海坊主あり、人魚あり、陸を離るゝ數十里に及ばゝ、災禍測るべからざるものあり、偉大なる海中動物あり、怪物百出し、生命の安全を保しがたしとなし、船舶大なるも龍神の恐あり、風波の恐ありとなし、海に親しまざる間に、西洋の文明は瞬時もとゞまらず、盛に科學の研究に從事し、冒險又探險、死を堵して研究を遂げ、東洋隨一の海國をして、啞然たらしむ、文化未開の時代に於て、海を恐るゝは止むを得ざることとするも、近世文明の曙光に接せる時代に於て、尙舊來の狀を繼續して遂に海と親しまざりし日本は、歎ずべきものといふべきなり。

西人の海の研究

歐米人が彼の太洋に航して、東西縱横駛走するの日、事々物々其研究の歩を進めて海水の性質より、海底の狀況如何、潮汐の研究、海中生物の調査、洋流、海水の淺深と、研究餘すなき時にあたりて、吾國人士を見るに、學才餘りあり、所謂世の先覺者識者たる人にして、尙海事につきては謬見を持して改めざるものあり。德川期の末に於ける橘南谿は、學才豐富識見高邁にして、旅行に大なる趣味を有し、東西遊記を著はして世人に裨益せしこと亦少しとせず、吾人其功業を稱して、措かざる所なるも、時代の進歩せざるはまた餘儀なき所にして、南谿が東

東遊記の大魚

遊記第四卷に於て、大魚を說明するや、「おきな魚は大きさ二三里にも及び、鯨を呑むこと、鯨の鰐を呑むが如し」など書けることあまりに誇大に過ぎたり。之れ當時の人々の言葉に上り、物語り傳へられたるものを其まゝに記せるものなれども、要するに畢竟海中生物の研究あまねからざる時なれば、海洋の深淺の程も明かならず、鯨が當時にも動物中最大なることをも知らず、たゞ鯱なんど鯨を逐ふときゝて、定めて形も大ならんと想像せる結果なるべし。此事は誠に些々たることなれども、亦以て當時の海事思想を想見するに足らむ。

海と人性

二、海と人性　長江緩かに流れて海に入る所、白砂遠く連りて、瀕海の長堤十里、九十の春光長閑に照り渡りて、高山楊牛が、風なぎ水靜かにして空の色さへ高くすみ渡れる日なりしかば四方のながめいとはれ〳〵しくぞ覺えし。清見潟をうたへるが如き、又蕪村が「春の海ひねもすのたりのたりかな」とうたへること、春の海がいかばかり樂しみを與ふるかを知るに足らむ。散る花も吹く風も、なべてのどかなるの日、主なき舟の波間に漂へるもおかしく、沖の汐干も岸

春の海

秋の海

の浪も、皆春の景色を失はぬ折、岸行く人の心やいかならむ。求むる所なき片舟の主やいかに、雄大なる氣に掩はれ、悠々たる春光を誦するの人は、誠に清濁合せ呑むの慨もあるべし、宇宙を呑むの慨もわらむ。此海、やがて詩人の心を動かして、雄大の詩篇となり、又さらに人性を感せしめて、壯志を起さしむるに至らん。

されども秋風一度吹きて、根をぬき枝を折り、大地ために震盪するの日、詩人藤村が新潮にうたへる。

『あるはけはしき青山の、
　あるは千尋の谷ふかく、
　凌ぐにまがふ波の上、
　落つるにまがふ波の影』

の如く、山なす巨濤のおどろおどろしくも、空を掩ふて來るのあした、蒭岩碎けて宙に花と飛ぶの光景、之を壯巨嚴夷ぎ、大地爲に搖ぐのあたり、波浪岩に碎けて宙に花と飛ぶの光景、之を壯と言はゞいへ、心弱く氣屈せる人の前には、いかばかりの恐怖心をや催すらむ、一葉の片舟巨濤に弄せられて、萬尋の谷に陷り、千仞の峯に上るかを怪ましむ

海洋の及ぼせる二影響

る嵐の日、波浪少しく平かならんとすれば、龍卷水をまいて大蛇の天に冲するが如く、さして夕陽碧波に紅焰を施すことなければ、怒濤烈々として、天地晦暝東西をも辨じがたき時、電火雷雨を混へて、暗中燐火の燃ゆるものあり、舷側をかむの怒濤は怪火を交へて來れば、艦艦の鋭も覆沒を免かれかたし、平生の修養到れりと雖、誰か此間に處して恐怖の念を生せざる、戰國の武士は死を見る歸するが如し、されども干戈に防ぎがたき、かゝる天然に對しては、遂によく妨ぐる能はず、かくの如くにして、海洋は人性を支配して、二個の相反せる性情を加味せり、瀕海の漁民が時に宏大なる志をいだき、小事に齷齪するものなきが如く、又天然の威力を恐れ、迷信生じ、迷信に支配せられて、易々たる尋常の事をも、嫌惡するが如きことあり、之を氣候の上より見れば、大陸的氣候に對して、溫良なる海洋的氣候あり、人性にもまた海洋的性情のあるあり、寛裕なる氣あり、圓滿なる度あり、よく人を容れ區々たる小事に心を動かさゞるが如き、皆其長所なり、されども一面には、堅固の道心なく、輩固なる主張なく、處世に巧にして、理想に生きず、大なれども曾敬を拂ふに足るものなく、崇高純潔の如きは、得て望むべからざることあり。

亦之を文明の今日より見れば、海洋は交通の一大要路なるも、船舶の建造巧妙ならず、航海の術精緻ならざるの時にあたりては、海洋は交通の障害物たりしなり、島國人の其特長を助長して、愈島國人性を明にせるも、また之れ海の交通を妨害せるに因せるものなり、從てかゝる場合に於ける海洋は、寧、雄大寛裕に反せる性行を養成せる事あり、ましてや、天然の災害中、最も恐るべきものゝ一なる、海嘯が海を掩ひて來るの日、また支ふるに術なく、幾千萬の蒼生も、巨億の富も、一時に洗ひ去らるゝを見、其災害の豫測しがたきを思へば、陸上に於ける幾多災害の及ぶ所にあらざるもの、恐怖心生じ、天然を恐れ、迷信生じ、神佛に依賴し、切に天福を禱れるが如き、寔に哀むべきものなり、かくて、海神として、住吉神生じ、琴平神生ず、止むを得ざるなり。

然りと雖、之を東にしては日本の島國が、かゝる恐怖の狀態にあるの日、西に歐

洲の一島國英國民は、かの恐るべき海洋と親しみ、啻に勇壯の士のみにとゞまらず、纖弱婦女子も、垂髫の少年も、悉く相率ゐて海に親しみ、古代伊太利に於てベネチア市民が、海水と陸地との結婚式を行ふて、海洋と握手せしが如く、盛に海上を駛走すると、共に、入つては海底の狀況を明かにし、出でては海水の性質を研め、四面環海を利して、窮研探險たゞ其後れざるを期し、詞人は海を詠じ、自然詩中、海洋詩文の美しき作物は、詩壇の異彩となり、國中の意嚮に乘じて、愈其能を發揮し、自然詩人ウヮーズワースあり、バイロンあり、よく精妙の域に達せるの時、東方海島に於ては、文壇の作物極めてて少なく、歎ずべきも、又如何ともすべからざりしならむ。

三、海と文學　吾國古代文學の發達は、固より政治上の中心地と離れがたく、都城の所在地は、やがて文學の上に大なる影響を與へたるなり、一度西海筑紫の島に於て、海洋と親しみし頃に於ては、文學としての作物なきも、海洋と關係せる傳說神話の傳はれる者ありしも、神武帝の東大和に入り給ふての後は、海洋と絶縁されたるが如く、大和中央に於ける皇居も、北の方、奈良の都城も、ひとしく海洋に關係少く、奈良朝の文學は美しかりしも、以て海洋作物に効なく、まれに地方の守介たりしもの、作詠あるの他は、多く大和地方の內地の作物なりしなり、桓武帝の奠都は國史上の一大事件なるも、又文學の內容に海洋的色彩を施すことなかりしなり、萬葉古今の時代を通じて、海洋的作物としてあらはるゝものを見れば、吾國特有の海岸をうたへる文學にとゞまりて、一面陸上の山嶽を歌へるに對しては、海洋をとらずして、主として河川をとり、山海と言はずして、多く山川をとり來れるが如し、之れ其都城が大和山城にありしにもよるべけれど、山とし云へば、吉野山又は三山をとり、川としては吉野川加茂、桂、大井、をとるにとゞまりたり、海岸をうたへるものとしては、大伴の旅人が、

いざ子供香椎の潟に白妙の
袖さへぬれて朝菜つみてん

の如き、又大河內躬恒の、

住の江の松を秋風吹くがらに
　聲打そふる沖つ白浪

素性法師の、

秋風の吹上のはまの白菊は
　浪の寄するか花の咲けるか

攝政太政大臣の、

月ぞすむ誰かこゝに紀の國や
　吹上の千鳥ひとりなくなり

法印寂信の、

久方の雲井をかけて沖つ風
　吹上の濱は月ぞさやけき

後西院御製、

思ふぞよ霞もはれて玉津島

法印幸清の、

光に渡る和歌の浦人
　くれぬとてとまりにかゝる夕波に
　琴浦しるき海士の漁火

源仲正の、

夜もすがら沖の鈴鴨羽ふりして
　渚の空にきねづゝみうつ

の如き類あり、又土佐日記が平安朝の特産なる上に、貫之任國より歸路を海上にとりて、最危險多き荒海を、海盜出沒する間に往來せることゝ、せめてもの海洋的文學の作物と云ふべけれ、正月二十一日の條に、

船君なる人、浪を見て、國よりはじめ海賊むくいせんといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ、七十八十は海にあるものなりけり。

我髮の雪と磯べの白浪と
いづれまされり沖つ島守

の如きは、珍らしき所作にして、後世に至るまで注意すべきもの極めて多からず、藤田東湖が佐久間象山のために、爲佐久間生題田子浦畫とて、

山突兀兮水渺茫、不問可知田子鄕、芙蓉含笑踞松杪、下有故人泛小船、
故人夙有山水癖、望嶽幾歲神魂揚、云々

の如き、又詩人山陽が、海岸又は海洋を、

雙鑑浦觀出日歌

金烏新浴大東洋、帶濕朱輪未吐芒、參山遠山猶宿霧、海濤漸作赤金光、
三萬六千中一日、來此始見全日出、瞬息飛升難正視、乃信催吾白髮、
今日春盡欲呼舟、傳語羲和且徐行、

泊天草洋

雲耶山耶呉耶越、水天髣髴青一髮、萬里泊船天草洋、煙橫篷窓日漸沒、
瞥見大魚波間跳、太白當船明似月、

崎陽作

三十六灣灣到灣、扶桑西盡白雲間、渺茫萬里如無國、一髮奔分呉越山、

歸自米利堅

玉蟲佐太夫

萬里鯨濤幾辛苦、當時豈料得生還、夢耶非夢看初覺、翠黛依然故國山、

松前作

長尾秋水

海城寒柝月生潮、波際連牆影動搖、從此二千三百里、北辰直下建銅標、

鳴門作

齋藤竹堂

危礁橫海海潮飜、隔岸青山勢欲奔、風力滿帆人不語、一竿落日渡鳴門、

望海

藤井竹外

鵬際晴開九萬天、無人之島定何邊、追風狂浪如奔馬、忽觸巉礁碎作煙、

壇浦夜泊

水下犀潭

篷窓日落不成眠、壇浦春風五夜船、漁笛一聲吹怨去、蒼和陵下水如烟、

と詠ずるあれば、

青柳の泥にしだるゝ汐干哉　芭蕉
清水程流るゝ沖の汐干かな　同人
島々に灯ともしけり春の海　子規
春風や三保の松原清見寺　鬼貫

舟路十二首　賴山陽

枕底聞波聲、不知是何處、歸鄉夢未續、舟子夜相語、有月挂高帆、
無風搖急櫓、篷窓聞大聲、應是來牛浦、幾輛征鞋破、一帆歸艇速、
船窓指來路、遙左連山北、唯罵行舟遲、不知去國遠、應教鄉夢成、
篷雨孤眠穩、後帆追不及、前帆勢欲騰、行至潮門處、帆々影疊層、
山色青糢糊、波紋紫破碎、殘陽光已收、猶在一帆背、

自室津舟行　賴山陽

沙鷗猶戀舊江灣、廿歲榛洋數往還、幾處粉墻三備地、半空黛色四州山、
客愁帆影櫓聲裏、鄉夢鴉啼月落間、早晚短篷維故屋、相迎一咲慈顏、

と詠吟し、明治の詩人島崎藤村は、新潮の中に、

『聞けばはるかに萬軍の、
陣螺の音色ほがらかに、
聞き潮の音のうち、
『あるはけはしき青山の、
あるは千尋の谷深く、
戰ひすゝむものゝふの、
溢るゝばかり奮ひたち、
梁はふたりの盾にして、
たとへば波は西風の、
舟は枯れ行く秋の葉の、
帆柱なかば折れくだけ、
鯨波のひゞき打ませて、
野空高く吹けるごと、
いと新しき聲すなり』
凌ぐにまがふ波の上、
落つるにまがふ濤の上、
劒の霜を拂ふごと、
潮を擊ちてこぎくれば、
柁は鋭き刃なり、
梢をふるひふるふごとく、
枝を離れて散るごとし、
濤は海に漂ひぬ、

衰しや狂ふ大波の、
櫓を失ひしはらからは、
落ちてはかなくなれるごと、
又同じ詩人土井晩翠は、其詩夕の磯に、
見よ夕日影波の上、
沈まば盡きんけふ一日、
久しかるべき影ならず、
見よ老人の磯の上、
逝かば終らん身の一世、
久しかるべき命ならず、
あゝ雲入りて星出でゝ、
わがひわがよのあとひとつ、
あゝ老人の影いづこ。

舟動かすと見るうちに、
げに消え易き白露の、
海の藻屑とかはりけり」
しばしたゆたふ紅を、
名殘はいかに惜むとも、
思に沈む面影を、
ほだしはいかにつらくとも、
夕日は波に沈みけり、
夕波騒ぎ風あれて、

とうたへるは、凋落し行く老人を、沈み行く落日に比せるもの、又與謝野寛氏は、現代の詩人にして、著想構想修辭面白くも、海の怪として、

青みて聞き大海は、虚空を廻る、廣大の銅の車輪、そが上に、瑠璃紺色の調帶、暖潮流る。
今赤く西天を燒く落日の、猛火の霧に、一群の不敵の族、故郷の大赤道を遠く出で、目ざすは荒き北の海まだ見ぬ境、劫闇の氷の原に子生まんと、水牛の角、馬の爪、
鰐の大口、鷲鳥の目、海蛇の胴の怪物は、
日夜に百里、暖潮の早瀬に浮び、入りみだれ、
尾振り、抱きより、跳り立ち、いと猥なる振舞に、濁聲揚げつ、
巨濤の山湧きあがり、鈍の鯨も、海鱸も、
さはに甲斐なき魚族も、皆みぐるしき後手に慌き逃る、日は落ちて、
漸に夜となり、暗がれば、

この未曾有の珍客の路の案内に、億千の夜光の蟲は燭を點す、前には黑し、わだつみのローマに似たる、

古都、千島の沖のタスカロラ」。

砂丘　砂丘の上を風が吹く、

筑紫の海にさし出でし、

われは哀しや旅の身は、　砂丘の上を風が吹く、

しらしら立てる砂ぼこり、

の如きに至りて、海洋文學は少しく勢を添へたるに似たり。

海の利用厚生

四、海と利用厚生　吾等の地球表面は、たとへ宇宙の宏大無邊なるに比しがたきも、また同じ太陽系中の大星體にも比しがたきも、之を眇たる吾人の軀幹より見れば、誠に驚くべき偉大のものたるや論なし、更に吾人が仔細に之が表面を點檢し去れるの後、地球の表面四分の三は、水に掩はれたる海なるに至りては、また驚かざるを得ず、人智の進歩、未だ其初期にありては、天然の利用充分ならず、海洋は人文發達の障害物として、嫌惡せられしも、今や文運の發達隆々として止らず、自然の利用、廢物の利用、盛に行はれ、天に應じ地に和して、萬物皆其願使に任ずる際にあたりては、此大面積の利用なくては叶はぬ事なり、加之たとへ人類の留意せざる所にも、自然の仁慈なる恩惠は、何等の躊躇憚る所なく、人類を裨益するものあるに至りては、海の研究利用は、最必須の事に屬するのみならず、正に吾人の責任たるものと云ふべし。

海の交通路

甲、海の交通　獨木舟ウヅクロ舟を以て、汀線に沿うて棹さすの昔は、海洋を以て辛じて陸上交通に代へたるも、かゝる草昧の時代ははやく去りて、舟筏の利用巧妙なるの時代に至りては、陸上の山嶽丘陵が交通の妨害をなすに反して、坦々たる青疊片波の起るものもなく、海灣の構造、島嶼の發布、繪の如く面白き間を通じて、白鳴飛翔するのあたり、海藻陸の如く又草原の如き間に、孤舟悠々として東西に奔馳するの快、思ふに幾何ぞや。

かの海水が有する浮揚力は、陸上貨物の運搬に比して勞少く、旦心の欲する儘

に、東西南北何れの地點にも、自由に寄航するを得るを以て、自然に海上の交通系が、却て陸上のものにまさるに至り、海上の交通は愈其頻繁の度を增し、更に舟筏の改良となり、或は風力を利用して帆船となり、洋流を利用し、又更に汽船となりて、如何なる故障をも驅除するに至りて、其利用極度に達せりと云ふべきなり、大陸諸國の如きは、海の利用を思ふこと切ならずと雖、海岸の犬牙錯綜するものあり、或は島嶼海面に粟散するものありて、陸上の不便なる交通系と共に、餘儀なく海面の利用を企て、やがては自國の範圍内のみにとゞまらず、遠く去つて他國との交通を求め、國際貿易行はるゝの日、海の利用は、一國文明を左右する最大の勢力として現はるゝものなり、之を泰西の史に徵するも、地中海岸の諸國民が、次第に海洋利用をなし、海上の交通と共に、對岸諸國との交渉なり、フエニキアの文明となり、又埃及アシアトルコの文明となり、此等諸文明を合して、こゝに希臘の文明となり、地中海上に雄飛して、世界的活動となり、やがてカルタゴが一時の榮華を海上にとゞめて、はかなき最期を遂げて以來、ロ

ーマは獨り海上に勢力を扶殖して、南にアフリカ縣あり、東にアシア縣ありて、地中海上南北に通じ、東西に走りて、盛に文化を助長普及するに努めたり、ローマの後に至りて、或は西國の如き、又ネザーランドの如き、或は英國の如き、獨り泰西諸國間の交通にとゞめず、延いて新大陸に又南洋に、アフリカに、アシアに、交通の範圍を擴張して、文化の採用、貨物の採集、瞬時も休止するなく、アングロサクソン民族の文化と、海上に於ける優越なる勢力を形成せり。

又更に之を東洋の海國に見るも、海上の利用は古來著しき進歩を見ざるも、神代の日二神の經營あり、眇たる小島の經營よりはじめて、新地の經營次第になりたるも、悉く之れ海洋よりせるものにして、近海に於ける制海權と共に、進んで遠海に及ぼし、遂に一葦帶水をへだてし韓半島と、大陸諸方の間によりて、全く海上權を占有し、日本海岸より半島に渡れる素盞嗚尊あり、海路の支配指導者たる、鹽土老翁あり、海神目無籃あり、龍宮あり龍神あり、傳說たると史實たるとに論なく、海上の利用航海の事盛に行はれたるや明かなり、降つて人皇に

至りて、神武帝の東國に行幸し給へる事は、最著明なる事實なり、早鞆の瀨戸を渡りて、安藝埃宮にとゞまらせ給へる年月の長かりしも、或は吉備高島の宮に停まらせ給へることの久しかりしも、皆當時航海の御困難なるを知るに足るものなり、至尊の御稜威に及向ふ敵はあらずとは云へ、舟師まだ整はせ給はず、風波時に順ならざるものありけむも、遠大の御計畫もて、此事に從はせ給へるは、大元帥たる御勇武の上に、御慈眼の程察し奉るにたへたり、之より以來或は陸上に、まつろはぬ民草を靡け、君が御稜威を輝かせ給へることあり、又北日本の海岸に沿うて、阿倍比羅夫の北海を平定し給へるが如き類少からず、海を渡りて筑紫に入り、又仲哀帝崩御の後、女性の御やさしき御身をもつて、西三韓を征し給へる神功皇后の如き、海國としてはかくあるべきことながら、比類稀なる御武勇と申し奉らざるべからず、後世藤原の純友が、海島によりて盜をなせる時代には、逆徒の舟筏、瀨戸内海を横行して、良民を苦めたること、當時海洋の利用少く、從つて暴徒の威を逞うしたるによるなるべし、源平二氏が海上の覇を爭へることは、後章更らに述ぶる所あるべく、尊氏が九州より舟師を以つて東上したりしことは、人のよく知れる所なれば又述べず、往昔は大陸と海島との交通不便なるを利して、常に流刑の行はるゝありしが、時に却て航通不便なるを利用して、被流者が巧に逋走を企てたるものあり、日野阿新丸の如き、以て當時の狀態を知るに足らむ、足利時代に入りてより、かの奈良平安時代の後を襲うて、遣隋遣唐使が彼土文明を齎らしし如く、三韓征伐の後に韓土文物を輸入したるが如く、一方には文物輸入の事をなし、船舶の往來斷絶する事なく、博多敦賀又堺港の如き、時代の相違はありたるも、等しく彼土との交通の衝にあたれるもの、海の利用は實業上の利のみにあらずして、更に文化の輸入をなしたる事かくの如く、豐臣氏の征韓は、一の政治軍事上の問題のみにあらずして、彼我文明の交渉行はれ、つぎて來れる德川時代には、三百年間鎖國の夢を結べるも、長崎の一港は、唐土泰西の文物透視場たり、維新後の事に至りては、又詳說するの要なきも、たゞ一の恨事あり、吾商船の增加著しく、商業日々に盛大な

るにも拘はらず、萬丈の怒濤を犯して、遠洋に航するもの少く、まれに白瀬中尉の如き快舉あるも、世人之に對して關せざるが如き、又大洋研究の好位置を有して、空しく陸上の夢にのみ憧憬るゝが如きは、吾明治文明史上の一大恥辱なりと言はざるべからず、ましてや海の利用に至りては、たゞ之を航海の一事より見るも快哉を叫ぶに足るものを、まして利用多き海面は、近來無線電信のあるあり、かの海底電信によるの繁も費もなく、中途何等の故障なければ、通信極めて自由に、更に今後之が利用廣からんか、世界の問題は之によりて交換せらるゝを得む、海の利用は今日尚未だ未知數に屬するもの、今後の利用研究は恐るべきものあらむ。

海水の洗滌作用

乙、海水の洗滌作用　輕井澤富士見峠の如き、高燥なる高原地方、及び箱根日光榛名に於ける山中湖畔の地は、清流涓々たるものあり、清波漣々たるものあり、清冽の氣心自ら澄めるものあり、以て山嶽谿谷の特長を發揮し、人を招き人と親むものあれども、瀕海の地また決して之に劣らざる特長あり、人若し此地方に立ちて、幾多異なれる海岸の樣式を瞥見せば、多趣なる幾多形式に接すると共に、また此等海岸地方が山嶽地方に比すべきものあるを知るに足らむ。

峽灣陸を嚙むで入ること數十里、巖岸削るが如く、海水刳るが如く、溪流急に海に朝する、スカンヂナビアの半島を見んか、怒濤輕く強く、常に岸に迫りてやまず、數千尺の懸崖は波浪の洗滌によりて、拭ふが如く洗ふが如く、些の塵埃をもとゞむるなし、濃なれども清冽、決して山中の氣に劣れりと云ふべからず、たゞに北歐に例を求め得るのみならず、岩石嶮立し、岩礁隱顯する所よせては返す波浪は、岩を洗ひ巖を嚙み、霎時もとゞまらず、巨濤怒つて岸に迫るの日、又の如き岩石は、屹立して退かず、こゝに飛沫は花の如く、沸々の泡沫は湧いて雪の如し、軟風の日も烈風の日も、海氣の透明清冽なること一にして、日本海岸に於ける、二丹但の如き、能登半島、古の親不知の如き、又之を太平洋岸にしては、紀伊伊豆志摩の半島の如き、北方陸中の海岸の如き、海水の洗滌はよく其効を奏して、汚穢のとゞまるものなく、巖岸何の趣なき所にも、河流が運搬し來れる汚物な

く、まして岩石の構造妙なるものにありては、一浪毎に磨かれて、こゝに天然に寫し出だされたる壁畫を見ることあり、また瀬戸内海地方に見るが如く、東海地方に見るが如き、白砂長汀の濱にあたりては、青松龍の如く蛇の如く、伏しては地に匍匐せんとし、跳りては空に舞はんとす、俯するものは枝葉波と相擊ち、起てるものは風に抗して飛躍せんとす、花岡岩の白砂は、十分に洗滌せられて、沖の鷗の純白にも比すべきもの、白波汀線を進めて岸によする時は、白砂の長堤に向ふが如く、波浪退き去るの後、白沙却て長堤に似たるものあり、砂や波、波や砂とも分ちがたき所、春風輕く松樹を搖かして梢間微かに響あるもの、何等の詩韻ぞや、たゞに白砂長汀が洗滌せられしのみにあらず、長汀一帶より漁村苫屋に至り、更に此のあたり住む浦人の心情にも及び、波の如く風の如く、微細の塵埃にも染まざるなり。

丙氣候の調和　吾等の地球は太陽系中に於ては、極めて眇たるものなれども、其面積廣大にして、其表面の複雑なること、常に世人の知悉せる所にして、大小

の島嶼羅列碁布し、海灣岬角參差決して一樣ならず、加之此複雑なる水平的肢節に添ふるに、更に垂直的肢節の更に複雑なるものあり、一望千里の沃野は、際涯なき平面なるに似たるも巧に之を檢すれば、多少の高低あるを免れず、プレーリーの大平野にも、セルバスの大平原にも、ミシシッピー、アマゾナの巨流は、海に朝せんとして駛走するものあり、吾人の一見最單調となす所にして既にかくの如し、粟散の小島にも、山川原野あり、丘陵聳え峽谷あり、溪ある所水あり、水ある所川をなし、天斧は細密にも其彫刻を施して、技巧の微、琢磨の妙、吾人の想像以外のものあり、啻に陸上のみならず、吾人の目して單調なりとなす所の、海洋に於ても、水陸の複雑なる分布以外、陸上に於けるが如き、高低參差の甚しきものあり、同じく陸岸近き海洋を見るも、海岸の狀態と同樣に、遠淺なるものあり、忽に深く陷れるものあり、之を遠洋にしては、更に著しきものあり、かくも水陸の複雑なる構造は、幾多の方面に之が影響を及ぼせるものにして、特に水陸の分布と、氣候とは、離るべからざる關係あるものにして、吾人が簡單にも、赤

道を中心として、之より南北する緯度の高低によりて、直に氣温の高低を定めんとするは、大なる過失なること、今更贅言するの要なき所なり。地球表面に水陸の分布せることは、氣候の調和に大功ある所にして、地球表面に供給せらるる、熱の大部分は太陽に出づるものなれば、太陽熱を受くること同樣なるも、海洋は之を陸上に比すれば、比熱の差著しく、やがて更に輻射に遲速あるあり、太陽急に其熱線を放射すれども、海洋はために急に高熱に達せず、さりとて太陽の熱源其活動を中止すれども、之がために熱度の急下なく、四時を閲し、晝夜を分たず、之がために氣温は全世界を通じて著しき調和を受け、海風吹くの日、陸上は或は暖められ、或は冷却せられ、温度に差異あると共に、其空氣中に包容せられし水分にも大小の差ありて、互に其有無を調節し多寡を調和し、たとへ所により降水量の多少あるを免れざるも、海水の飛翔して雨となり雪となるや、常に海洋面にのみ落下することなく、陸地に降下し陸地を濕し、草木生じ人類蕃殖するを得、陸上の氣候調和せられ、海上との交渉起り、洋流となり、海陸風となり、潮汐波浪となり、人類に益することまた少からざるなり。

丁、海洋と産業　産業上より見たる海洋は、たゞに海國に於て必須なる産物の供給地たるのみならず、大陸の内部にも至大の關係あるものなり、殊に吾日本の如き、古來牧畜の事盛ならざると、宗教上の影響とによりて、肉食とし云へば、ひとへに魚介に限られたる國に於ては、海洋より受くる恩惠實に大なるものなり、人體に缺くべからざる食鹽は、一部は之を内地岩鹽に仰ぐも、其大部分は之を海洋に俟たざるべからず、此の一事を以てするも、人類に必須なること明かなるに、海洋が鮮魚を供し、美味の海産物を給し、陸上に求めがたき特産を享有すること少からず、日本一年の水産物及び水産製造品は、實に一億五百萬圓の巨額に上ぼるを見ば、如何に海洋の産業地として必要なるかを知るに足らむ、況んや日本のみにとゞまらず、多少の差はあれ、世界の海洋は皆海産物の供給所たるもの、魚類食鹽を主として、貴重なる獸類あり、海藻あり、食料となり、器具となり、其他幾多の貨物となり、更に海洋は多く輸出入の通路となり、經濟上

軍事上より見たる海洋

に於ける重要なる位置を占むるものなり。

五、軍事上より見たる海洋　古代日本に於ける制海權の事は、前章少しく述ぶる所ありしが、更に史を繙きて、泰西諸國が海上に於ける狀況を察するに、ナイル河口の邦家は未だ制海の事に想倒せざりしが如く、フェニキア、グリーキの發達するに至りて、先づ地中海を利用し、商業上の優越の勢力を扶殖したるが、後海峽を西に進みて、太西洋に通じ、英國の島嶼に達し、一方には北海岸に於ける邊海の民は、舟筏を利して盛に瀕海を侵掠し、恰も西海の民人が大陸に渡りて倭寇となれるが如くなりしものあり、之をバルカン半島に見るに、スパルタは强大なる陸軍を有して、萬事は陸に施設せられ、國防は一に陸軍に依賴したるが、之に反してアテネが有力なる海軍に依賴して、海上の商權と共に、武力の並立すべきを唱道し、遂に東方アシアの侵略にも抗し、實力なき敵の大艦隊に對して、微々たるが如くなれども、よく練習されたる海軍により、よく海峽の海、上權を保持し、後世海權の獲得は、一國成立上に缺くべからざる者なるを敎へたるも、當時に於ける海上の利用は未だ充分ならず、地中海には海賊の橫行商船を掠奪するものあれども、東方ペルシアの侵入以外には、又海上よりの敵國もなく、アレキサンダー大王は、前古未曾有の領土を占有したるも、海上權につきては、たゞ歐亞の間小海峽を占領せるに過ぎず、かくてローマの伊太利半島に起りて、遂にバルカン半島の諸國に代れるまで、海戰史上に注意すべき事項極めて少く、ローマ又陸軍國として勢力を振ひしも、尙諸方の征戰には、海軍の必要を感ずる切なりしなり、まして建國日尙淺く、諸政辛じて其緒に就きたるのみにて、たとへ陸軍は稍整頓するものありたるにせよ、海軍に至りては、尙稱すに足るものなかりし日、夙に地中海の南部に海軍國を建設し、水軍北の方歐羅巴を壓せるカルタゴに對峙し得べきものなく、彼の海軍國に對して、此は陸軍の恃むに足るものあるのみ、ローマはかくて痛切に海軍の必要を感じ、盛に海軍建設の業を遂げ、名將ハンニバルをして、遂に施す能はざらしめ、陸上に於けるが如く、海上權を確實にし、ローマの覇業茲に其緒につき、西北は英國の島

に渡り、東はアジア、南はアフリカ、征討の業を大成したるも、よく海軍を利用したればなり、後日東維馬の建設成り、コンスタンチノープルの都城となれるも、海陸の要衝なればなり、近世に至りては、和蘭の海軍、西葡二國の水軍、皆制海權と共に、通商の利を壟斷したるものにして、東西南北其勢力を扶殖し得て、印度馬來諸島佛領印度支那、日本の海岸に及び、新大陸アフリカの研究を終りて、或は布教に殖民に、又通商貿易に、よくも世界の全部を開拓し得たるが、必勝艦隊も敗滅に歸し、微々たりと目せられし英國の海軍が、次第に勢力を扶殖し、英國の領土は全世界に及び、西葡二國に代り、和蘭を壓し、佛國を窘め、智勇ナポレオンあるも、一指を島帝國に染むるなからしめ、其廣大なる領土と共に、英國の海軍は全世界の海軍に抗して尙餘力ありと稱するに至れり、海國民の意氣寔に羨むに堪へたり。

然るに、十八世紀より十九世紀に及び、各國民はひとしく國民的自覺をなし、國力發達に汲々として維れ日も足らざるの觀を呈し、領土の侵略、海外の殖民、其及ばざるを憂とするに至りては、新大陸も、舊大陸未開の地も、ひとしく探究餘すなく、一は政治上の意味より、一は經濟上の意味より、海外との交渉繁を極むるに至りて、海上は各國の艦艇が自由に航海する所となり、本國政見の衝突と共に、殖民地に於ても、常に幾多の衝突を免れず、勢海軍建設の必要生じ、本國國防のため、又殖民地保護のため、英國をして無限なる制海權を保有する能はざらしめ、二十世紀に至りては、獨米佛魯の海軍は大西洋に扶殖せられ、日本はまた東亞に其勢力を樹立し、各強國は政治產業二方面より、商船及び軍艦の製造爲に全力を盡せるが如く、英國は茲に至りて、從來世界三大海軍國と匹敵せんと期せしを、二國と改め、或は一國と改めんとす、東方問題の喧しきに及びては、二等國以下と目せし、日本と攻守同盟を締結するに至れり、之れ正しく海權が一強國の專有に歸しがたきを證せるものにして、吾新帝國の光榮と云はんよりも、寧舊海國の勢力失墜と目すべきものなり。

英國と海權

制海權

かくて海上權の爭奪は、攻戰國の最注意する所となり、從來實例少かりし海戰

は、各地に於て開かれ、十九世紀末には、米西二國の衝突あり日清兩國の交戰あり、皆精鋭なる武器軍艦を利用したるものなれども、二十世紀に至りて、西歐洲のロシアが、東アジアの日本と交戰するに至りて、其鋭を盡し、殊に日本海の一戰の如き、空前の大海戰にして、此一勝が日本を救ひ出せる功の大なるを見ても、制海權の必要が如何に切なるかを知るに足るべく、又ロシアが大陸軍を養成しつゝも、此一海戰を重要視せしを知るべし、一面には世界の平和を維持せんと苦心する論者あれども、もと之れ單一なる理想にとゞまり、以て實際に施しがたきを如何にせん、各國の海軍費を見、造船所を視來るの日、世界制海權獲得のために各國が營々努力するものあるを知るべく、過去に於けるが如き、輕卒なる開戰を見がたきも、國體國威を保全せんためには、更に大なる犧牲を拂はざるべからざるに至るべきを知るに足らむ。

吾人は茲に、吾島帝國の將來につきて詳說するを避け、制海權保持の必要なることゝ、何物によりてかよく制海權を安全に保有し得るかを識者に問はんと欲するのみ。

第五篇　湖と人

富士山と琵琶湖

一、古人の湖觀　近江輿地志略云、琵琶の湖は、年代記に曰く、孝靈天皇五年、一夜地裂、湖出來、駿河國富士山涌出す、云々、又說云、孝靈帝五年、地裂て海となる、善積一郡すでに湖となるののち其土富士山となる、かるが故に富士詣をなす人、風すさまじく山はげしき時は、近江の近江のと呼ばはるときは、かならず風靜まるを以て、近江の人を先達とすと云へり、皆漫言人を惑はすものなりとあり、又

湖上の奇怪

印幡沼の事を誌せるもの、佐倉風土記に曰く、又江上夏間陰濕之夜、火出水中、離水數尺、非漁火非鬼火、須臾分離、或五六十、或百數十、若往若來、或索或聚、乍遠乍近、又高又低、以窮數時而滅焉、亦一奇也、とあり、東鑑建長三年三月の條、信濃諏訪社頭湖、大島幷唐船等出現、片時之間、如消而失、此事無先規之由社家驚申云々、とあり、又同湖畔に於て、諏訪七不思議と云ふ

諏訪湖の御渡

ものあり、湖の南岸神宮寺にある諏訪上社の主神、北岸下諏訪なる諏訪下社に通ふこと、冬に入りて毎歳なり、かくて湖氷に龜裂を生じ、湖水を渡るもの、御渡（みわたり）と稱して、此事あるの後安じて、通過すと云へり、又永慶軍記、天正十年、心濟修行の條に曰く、

八郎潟

出羽の國秋田へも來にければ、此に大なる湖水あり、

是なん八郎潟と云ふ、里人に由來を聞に、むかし、いまだ湖水のなかりし時、此所山林なりければ、近き里人三人木樵に入る、八郎と云ふもの一人、澤邊に魚を三つ取て、幸なり三人して食はんと思ひ是を燒く、其匂ひ芳しくして堪難ければ兎角堪忍ならずして、獨にて三つの魚を惡く食ふ、然るに咽の渴く事限りなし、八郎澤水に浸りて、一滴も洩さず呑はさんと這臥たり、二人の木樵來て八郎が姿を見るに、其さま替りぬ、八郎二人に向て、我しかく〳〵の次第にて、今は大蛇となるべし、早く里へ歸れとつげしが、見る内に姿替て廿尋の大蛇と成、崖谷を崩し、此湖水と成す、故に八郎潟と云ふ、云々

又寛文風土記曰、大同二年暴涌焉と、猪苗代湖の事を記せるものあり。

かの小堤を築きて、池塘となすは、古人も容易に之をなし得たるも、數十里の大湖が、陸地の中央に存在すること、古人の見て以て怪となす所にして、是幾多の怪談生じ、傳說生るゝは自然の數にして、以上列舉の湖水のみにとゞまらざるなり、古代の人民が、日本最高の山を富士山となし、山靈之に宿る、木花咲姫は之なり、山は陽にして、陽の山に配するに陰の湖を以てし、琵琶湖は日本最大の湖にして、而も時に之を目して海となし、陽陰の二者同因になれりとなし、地の裂けて海となるものは琵琶湖にして、土の積んで山となるものは富士山となすも、而白き考案にして、之を學理の上より見んは如何なれども、古人の山を見、湖を說明せんとするの狀を知るに足らむ、かの霞浦の怪火の條に至りては、果して何物たるやを解しがたきも、或はかの九州不知火などの類かとも疑はるゝも、又時に古人が奇怪を好むの結果、かゝる怪談を作爲せりとも思はる、また諏訪の湖上の御渡の如きは、こゝに地神建御名方命の鎭座ましますあり、附近に

古人の天然に對する恐怖心

幾多の奇怪あるも、皆人智を以て解釋しがたきものなりとして、遂に神力に歸し、七不思議の原因につきて、何等の考究をなさず、文明の餘光山間溪谷にも洽く、不思議怪奇の次第に消滅せるの日、かの湖氷破裂も明なる原因ありと稱せらるゝに至れり、かの大島唐船出現の事は、或は蜃氣樓の類なるべし、たゞ之を今日に見る能はざるなめに、之が解說に困むもの、八郎潟の記事の如き、果して何等の意あるにや、たゞ八郎を八龍と稱することあり、龍はかの出雲に斬られ、八岐大蛇の如く、假作のものにして、東夷北狄の類なるか、乃至はたゞ無稽の怪談ならん。

古人が天然に對する恐怖は、今人の想像以外なるべく、泰山忽焉として鳴動するかと見れば、黑煙天に張り、地を燒き、天を焦し、砂塵の降下雨よりも繁く、熱灰大地を埋め、熱泥麓を掩ふと人畜悉く死するとを見ては、八熱地獄を豫想して恐怖措く能はざるもの、此火山の熔岩谷を埋め河水を遮ぎり、廣茫の平野に洋洋の湖沼を形成し、或は泰山高嶽の頂上に、御池と稱する火口湖を生ずるを見ては、人智を以て解釋せんとするの勇氣もなく、たゞ一の不可思議によりて萬を掩へるの觀あり、汽船駛走するの大湖も、片舟暴風に蹂躙せらるゝ昔日には、奇怪續出するの境界と目せられ、かの諏訪湖畔に於けるが如く、泥沼瓦斯地下より湧出して、點火すべく、炎沸すべきを見ては、ひとへに神の恩惠となせるも、寧古人としては怪しむに足らざるものなり。

湖畔と國史

されども、湖沼の畔は、古今東西に論なく、文明史上に注意すべき所にして、河畔に於けるが如く、瀕海に於けるが如く、又文明の發祥地たるの觀あり、吾國史が常に河畔に發達せる時、科野洲羽湖畔に異材を懷きて、徐に餘生を送り給へる建御名方命あり、不幸にして遂に逆境の神となり、吾國史の色彩たる能はざりしも、其勢力が關東諸國を壓したるを見れば、西方の文明と共に、湖畔に占據して文明の一中心となりしなるべく、之と同時に鹿島香取二神が共に關東湖沼の間にとゞまれるが如きも、また注意すべきものなり、更に後世に至りて、近江琵琶湖畔に於て、志賀の都の發達と共に、近江朝の文明生れ出で、藝術の方面に

於ても、注意すべきもの少からず、支那大陸に於ける洞庭湖の如き、北米大洲に於ける五大湖大鹽湖の如き、南米アンデス山中チヽカヽ湖畔の文明、アルプ山中の文明、思へば湖沼が文明に貢献せし功も少からざるべく、まして今日野蠻民族の一部が、據て以て安寧を保持せる、杭上生活の如きは、今日文明の域に達せる人々の祖先が、夙に各地に於て試み來れる所、某者の諏訪湖を檢して、杭上生活の遺蹟ありとなすは、其眞僞容易に判じがたきも、瑞西諸湖に於ては、中世紀に至るまで、杭上生活を繼續して今日に其遺蹟ありと云ふを見ても、湖畔が文明發達を助長せる功ありしや明なり、まして湖水は大海に比すれば、風波穩かにして、海洋の如き災害を吾人に及ぼすこと少く、湖畔風光は、常に山紫水明の一言に盡さるゝが如く、明媚なる湖山の景色は、大に詩想を涵養するに足り、人々の心に大なる慰安を與ふるものにして、魚介の鮮を供すべく、又湖畔の美地は、耕耘に適するものにして、相助けて人類棲息の適地となし、幾多の文學生じ、傳說怪談生れ、湖畔をして多趣の地たらしむ、又山湖の如きは、多く山神の靈地なれば、靈妙の境界として、人の畏敬する所となり、山嶽と共に又注意すべき所なり。

二、湖沼と文學　湖沼が文明史と離るべからざる關係はかくの如く、更に文學に至りては、常に詩歌文章の題目となり、幽邃なる山中の湖沼も、平野廣大なる間に湛ふるものも、皆其詩材となりて、古往今來常に吟誦せられたるもの少からず、十九世紀の初頭にあたりて、英國のスコットが、湖上の美人を著したるが如き、之を支那大陸にしては、范文正公が岳陽樓記中に、

予觀夫巴陵勝狀、在洞庭一湖、銜遠山、呑長江、浩々湯々、橫無際涯、朝暉夕陰、氣象萬千、此則岳陽樓之大觀也、前人之述備矣、然則、北通巫峽、南極瀟湘、遷客騷人、多會于此、覽物之情、得無異乎、若夫霪雨霏々、連月不開、陰風怒號、濁浪排空、日星隱曜、山嶽潛形、商旅不行、檣傾楫摧、薄暮冥々、虎嘯猿啼、登斯樓也、則有去國懷鄉憂讒畏譏滿目蕭然極感而悲者矣、至若春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧萬頃、沙鷗翔

集、錦鱗游泳、岸芷汀蘭、郁々青々、而或長煙一空、皓月千里、浮光躍金、靜影沈璧、漁歌互答、此樂何極、登斯樓也、則有心曠神怡寵辱皆忘、把酒臨風其喜洋々者矣」とせるは、正に此樓と共に、洞庭湖畔の美景を描き出せるもの、又

洞庭湖

望洞庭　劉禹錫

湖光秋月兩相和、潭面無風鏡未磨、遙望洞庭山水色、白銀盤裏一青螺、

臨洞庭湖　孟浩然

八月湖水平、含虛混太清、氣蒸雲夢澤、波動岳陽樓、欲濟無舟楫、端居念聖明、坐看垂釣者、空有羨魚情、

西湖

西湖　歐陽公

綠芰紅蓮滿舸浮、使君那復憶揚州、都將二十四橋月、換得西湖十頃秋、

西湖雜題　邵陵

不上歌樓即酒樓、暖風薰白幾人頭、敗荷殘柳無情緒、也管西湖十里秋、

南湖

入郭過南湖望報恩浮圖　高青邱

雨過春坡柳浪香、布帆歸綏怕斜陽、漁人爲指江城近、一塔船頭看漸長、

湖上見月憶家兄　同人

望月思兄意轉迷、孤帆應宿楚雲西、夜深愁向湖邊立、爲有寒鴻相並棲、

仙湖

玉鑑池　同人

一鏡寒光定、微風吹不波、夏除荷芰影、放取月明多、

仙湖暮雪　藤田東湖

天風吹下白琳琅、北陌南阡望渺茫、獨有平湖埋不得、晚來水色故蒼々、

蘆の湖

雲晴るゝ四方の景色の夕榮を

池の鏡にうつしてぞ見る　源實朝

蘆の湖（金槐集）

玉椿筍箱根の海はけゝれあれや

二山かけて何かたゆたふ　法眼慶融

同題（夫木集）

玉櫛笥箱根の山の峰深く
　水海晴れて澄める月かげ

宗祇法師の著名所方角抄に、蘆の湖をば、

箱根山の頭に水海あり、言語道斷及びがたき地景なり、湖水北南へ五十町、東西は近し、東の汀に坊々有之、

其上權現社壇御座なり、湖の南の汀に蘆川の宿とて百家許あり、此湖に富士の影移て西に見えたり、眺望無雙の地なりとし、宗久の都のつとにも

箱根路や水海荒るゝ山風に明やらぬ夜のうさぞ知らるゝの如き、又

堀河百首に諏訪湖を、

諏訪の海の氷の上の通路は
　神の渡りてとくるなりけり

參議親隆は、同じ湖を、

けさしもや洲羽の氷のひまわれて
　教ふる駒の道なつむらん、

夫木集に藤原家長は、

駒とめて諏訪のとわたる旅人の
　氷の橋の音やさやけき　僧六如

諏訪湖

群山環抱儼成欄、中貯平湖青鏡寒、君看芙蓉涵影處、天然玉女洗頭盆、

僧空海は、

信濃なる衣崎に來て見れば
　富士の上漕ぐあまの釣舟

と詠じ、濱名湖に關しては、うたゝねの記に曰く、

濱名の浦ぞ面白き所なりける、浪あらき湖の海路のどかなる、水海のおち入

印幡沼

りたるけじめに、遙々と生續きたる松の木立など、紛にかゝまほしくぞ見ゆる（中略）後は松原にて、前は大なる川長閑に流れたり、海いと近ければ、湊の浪爰元に聞えて、潮のさす時は、此の川の水逆さまに流るゝやうに見ゆ。

印幡沼には、古今六帖が、

下つさの伊婆の浦波たつらしも
　舟人さわぎからろおすなり

と見え、回國雜記には、

山色湖光秋又窮、鄉書曾不託飛鴻、砧聲近報孤村晚、旅情何堪憂患躬、

今日は小春のしるしにや、聊かのどかに侍りければ、皆々いなぼの湖水に浮びて、舟の中にて酒など興行し侍りき、富士の嶺湖にうつれる心を、皆々よむべきよし申ければ、

湖の波間に影を宿し來て
　又たぐひある富士を見るかな

霞浦

霞浦　（新後撰集）　順德院

ほのかにも知らせてしがな東なる
　かすみの浦のあまの漁火（夫木集）　後九條右大臣

さほ姫のも汐やくあまといつなりて
　霞を浦の名には立つらむ　藤原定家

春霞霞の浦を行く舟の
　よそにも見えぬ人を戀ひつゝ

浪逆浦の歌　（萬葉集）　常陸國領歌

比多知なる奈左可の海の玉藻こそ
　ひけば絶えすれなどかたえせむ

常陽浪逆浦、壯觀甲東關、微動風波紋、半青雲綵山、築波築水上、
浮島浮雲間、環景黏行客、止舟不許還、

猪苗代湖　正之

會津山ふもとの池の漣や
さゞれの石の岩となるまで

八郎潟　惟足

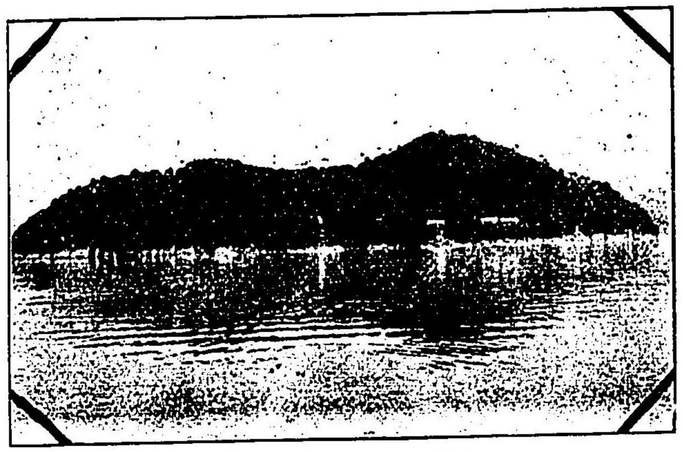
同

さゞ波や打出の濱に出し月を
會津の海にうつしてぞ見る

八郎湖中作　大淮詩佛

晩向海門觀打魚、西風縱起欲波初、四山金壁斜陽裏、萬頃玻璃秋雨餘、
二舟下網截江過、一舸驅魚噪打波、三艘次第今來處、千百銀刀似擲梭、
發櫂快及水光清、出網鮮鱗雪色明、斫作脍材汲湖洗、金齏不用倩香橙、
此等は皆比較的著しからざるものなるが、近畿地方にありて、常に政治の中心

琵琶湖



琵琶湖

と隔ること遠からず、曾ては天智弘文二帝の都城となり、燦然たる文化の中心たる、近江朝廷の、大津志賀宮は、實に琵琶湖南岸形勝の地にして、琵琶湖は之がために、よくも世に紹介せられたり、平城平安の文學にも、亦後世の文藝にも、其詩材となり、歌枕となりしこと一なり、まして、近江八景の名起り、湖を中心として、天然美景の謳歌者盛にあらはるゝや、琵琶湖は實に詩題として恰好のものとなり、萬葉の古より、明治に至り、更に後世に及んでつきざるものとならんとす、萬葉集に、

淡海の海夕波千鳥ながなけば

心もしぬに古おもほゆ
淡海の海浪かしこしと風守り
年はや經なむ昔とはなしに
相阪を打出て見れば淡海の海
白木綿花に浪立ち渡る

の如き古歌あり、

夏日臨泛大湖一首　崚峨帝御製

水國追涼到、乘舟泛大湖、風前飜浪起、雲裡落帆孤、浦香濃蘆橘、洲色暗蒼蒲、邑女採蓮伴、村翁釣魚徒、畏景西山沒、清猿北嶼呼、沿湖興不已、弭棹轉歸艫、

又、謠曲八景には、

「あれに見えたる比良の山、小松が原に吹く嵐は、山市の晴嵐もかくやあらんと思はれ、眞野の入江の洲崎の眞砂は、雪かと見えて江天の暮雪に異ならず、あらおもしろやと見る程に、いとゞ心の澄み渡る、堅田の浦の釣舟の、沖より家路に急ぐをば、遠浦の歸帆と打ながめ、雪の一むら殘れるは、夜の雨の名殘歟、扨比叡山の鐘の聲を、遠寺の晩鐘かと打聞き、それ唐崎に翼をたるゝ沙鷗、平沙の落雁に之をなぞらへ、洞庭の秋の月には、鏡の山をたとへたり、誰を漁村の夕照に、つりたるゝ者とは思ふべき。」

とし、續千載集にも、

風渡るにほの水海そらはれて
月かげきよし神津しまやま

の類より、

過琵琶湖作　伊藤仁齋

古來云此水、一夜作平湖、俗說尤難信、世傳亟亦迂、百川流不已、萬谷滿相扶、天下滔々者、應憐異敎趨、

匈服趨東道、嶽陽開太湖、風波來萬里、壯志愧雄圖、

淡海　守屋東陽

琵琶湖闊一蒼茫、名勝相迎興激昂、大澤龍蛇雲夢遠、舊都文物歲華荒、
山臨積水生秋色、帆接遙空引夕陽、神女祠壇杳無際、飛揚萬里欲裴裴、

遊于琵琶湖追賦　垣內海莊

淡海帝都東、湖山氣勢壯、層城蒼霧底、巨刹彩霞中、斷浦沈紅日、
橫林生暗風、龍泥何處去、漠々碧蘆空、三萬六千頃、茫々呑百川、
卷雨聲振嶽、涵星勢通天、城松送曉翠、島竹散晴烟、此景遙堪憶、
詩人孟浩然、落日湖霞紅、湖樓欲御風、明晦無盡夜、江山送英雄、
水流功名盡、雲在遺壘空、感慨不成唾、月白聽歸鴻、

琵琶湖歌　岡本黃石

我邦分六十、淡海在中土、吾夙周歷觀、地勢何壯巨、北控三越西五畿、
千山萬山成四圍、中有太湖之呑吐日月、得非造化鑿天池、
蕩々三萬六千頃、百川會作巨浸來、終古水天同一色、宛然有似畫圖坡、
春融蕩兮秋澄爽、籠朝陰兮盪夕暉、浮嵐暖水千萬狀、無時無處不清奇、
勾吳于越何足數、也知乾坤神秀鍾于茲、一日飲湖亭、四山風景美、浩
歌興未闌、山背殷雷起、黑風乍廻閃雲旗、百道驚波白崔嵬、急雨傾天注
射來、勢如萬弩發激矢、恍疑伍胥憤魂甦來怒濤、巫支騰踔神鞭駛、又
訝共工再出頭觸不周山、龜鼇震駭走群鬼、第恐爲之天柱折地維裂、山嶽
崩壞人共死、須臾萬態悉消滅、翠屏玉鑑一時開、乃知天地靈怪不可測、
丈夫意氣應如此、憶昔兵馬日槍攘、五畿七道妖氛揚、吾公一震佐英主、
十年汗馬驅豺狼、遂以元勳充鎭國、收此勝概入封疆、爾來二百餘年業、
流峙居然抵金湯、我聞王侯守國天設險、毋乃形勢非此鄉、

湖上眺目　梁星巖

楓葉蘆花灣亦灣、雨餘雲斂夕陽間、湖光一片明如鑑、照出文君黛色山、

過湖山　柴栗山

湖邊沙路淨無泥、柳渚拯灣任馬蹄、休怪兒童語言好、皇州近在彩雲西、

菅茶山

江州

烟水蒼茫煖意融、晴波閃々釣絲風、五湖遺逸家何在、六代高僧窟亦空、
岳寺雲歸春樹外、沙汀鴨睡夕陽中、濟川誰抱平生志、時見孤舟簑笠翁、

の如き、此大湖に關するもの極めて少からず。

宍道湖に對しても、

碧雲湖吟送道光上人之雲州　菅茶山

亂山高下彩嵐連、中港平湖綠茫然、松江萬家水爲郭、粉壁亞春姻晴漣、
沙步西轉幾十里、村々晒網夕陽紫、釣艫磯出蒲葭隈、賣酒家藏楊柳裡、
雪天眺望最淸妍、白玉倒浸千孱顏、地僻從來少遊客、絕勝如此未有佳名
著世間、光師風流惠林徒、今秋卓錫湖水隅、豈無李白郎官例、自今呼作
碧雲湖、送君北指暮雲橫、恨不同舟棹空明、好向月中歌此曲、魚龍出聽
或記彷彿舊時聲、

と詠せし類多かるは、皆湖水の美景の秀逸なるを誦せしものにして、天下を周遊する俳人の句にも

湖水はれて、比枝ふりのこす五月雨　芭蕉

三井寺のかねよりかすむ湖水かな　蓼太

とあり、四周の山嶽を見るも、滿圍きてねたる姿の山あれば、銀甲天に冲するものあり、火山に見るが如き、赭禿の岩石の突兀たるもの、或は火山衰へて頂上雪を戴きて四時變せざるものあり、碧樹茂林蔚然として、總て之れ林木なるかを疑はしむるものあり、春風に綠を呈し、秋風に紅を帶し、枯風一度來りて、全山白皚々たるものあり、四圍の狀態を察するに、高山嵩峰の屹つものなく、平砂水に迫りて、所謂平湖の狀をなすものあり、砂洲遠く南に突出する所、太平洋と大湖とを分てるものは、常陸の東南部に見る所、筑波の峯を涵し、悠々たる漁人と、長閑なる棹歌を聞くもの、常陸中央の光景ならずや、秋風の日紅葉全山をつゝめる時、蘆湖上に月を賞するの快、夏天平野の炎熱百度に上るの日、大谷川に沿ふ

て入ること數里、千仞飛瀑とぶの地、綠林青樹を賞しつゝ、驟雨沛然として湖山を襲ふの夕、洋鬼のボート俄に裝を解きて客舍に急ぐの折、湖山次第に暗にこめられて、逆旅微かに雨滴の湖心に入るを聽くもの、誰か詩意湧かざる、酒をおき筆を執り紙に對するもの詩卷自らなるあらむ、暮雪比良の峯に殘り、虹の如き長橋大河を渡りて、行人宙にとゞまるの琵琶湖、白帆汀線に沿ひて去來すれば、黃金の菜花隨て散り、胡蝶香に醉ひ落花を追ふ、あゝ何等多趣の俳味なる、朔風雪を混じて鹽尻の嶺より來る時、湖面は人馬絡繹に委し、堅固鐵床に似たり、漣波岸を叩きて漁歌に和せし狀何處にかある、之を乾燥と云はゞ云へ、寒國の湖沼を解せざるものゝ言のみ、長江を呑むもの、清流を吐くもの、峽中の湖沙濱の湖、都城に近きもの、僻遠のもの、汽船の、漁舟の、各其趣を異にするものあれども、四季によりて其彩色の變ずるが如き、皆之れ一大詩ならざるはなし、詩客騷人の徂徠に任せ、詩なり歌なり、千百載にしてつきざるものあり、たゞ過去の湖をうたへる詩歌の少かりしを恨事となす。

裏海
バイカル湖
スエズの湖
ニカラガ湖

三、湖沼と利用厚生

大帝ペテロの雄志をつぎたる猛鷙ロシアは、ボスニア海に功を遂げず、地中海に英佛の迫害を受け、黑海封せられ、バルカンの事亦意に任せざるものあるや、更に鋒を東南に轉じて、印度に向はんとして、イラン地方に入る、鐵路之に先んじて南下せるもの、オレンブルグよりタシケンドに至り、更にカイバルの一嶺を越えて印度に入らんとせしもの、一は內カフカズの地を東してバクーに至り、湖を橫ぎりてクラスノボドスクより、メルブを經てアフガニスタンに入れり、正にイランを南下して印度洋に出でんとせり、陸海を利用して、軍事商業に益せし第一なり、之と前後して、ロシアは北清の滿洲に垂涎し、遂に日本と干戈の爭を起すや、急に鐵路を利用せんとして、バイカルの湖上氷上鐵路を建設したり、中途湖氷破損の事ありしも、湖沼を利用せし一なり、スエズの運河ニカラガの運河が、遠く大地を割きて大洋を通せんとする時、バラー、ビッテル、小ビッテル、ニカラガの湖水は、實に航用汽船の通路たり、スエズが南喜望峯をめぐる大洋航路に代れるの日、小なれども湖沼を利用せられ

五大湖

たり、ナイヤガラの巨瀑之が故障をなせども、北米の五大湖は航路として重要視せらるゝ所、近來米加二地の產業急進するに隨うてソーサンマリーの海峽は、汽船の通航スエズを凌ぐに至れり、其他大湖が交通の要路たる知るべし、大洋航路の擴張今日の如くにして、而も湖沼の利用せられて、交通路たるかくの如く、之を日本にしては、琵琶湖上に於ける小汽船、關東の平野の諸湖沼の如き、又殊に珍とすべきは、二千數百尺の高距ある諏訪湖上に於て、陸上の交通路たる鐵道に對して、小蒸汽船の競爭あらはれたることなり、此地巨萬の財源たる生絲工業地として、既に異彩を放てる上に、今又政府に對し、陸に對して、個人の汽船の交通競爭をなせること、又湖面利用の進歩と云ふべく、更に歐洲にも亦湖沼面の交通路たるもの少からず。

湖上汽船

また其例多からざるも、火口湖のやがて港灣となるものあり、九州山川港の如き、大島波浮の如き之なり、之れ火口湖の一面を破壞せられたるものにして、また湖面の利用されたるものとも云ふべく、湖沼が河水の調節をなせる功も大

巨椋池

なるものにして、京都南部に於ける巨椋池の如き之なり、かの沛然たる霖雨數日やまず、河水溢れ、汎濫數里に及ぶものあるや、災害實に少ならかず、然るに流域にわたりて一大湖沼の横はるものあるや、河水一度此に注ぎ、先づ湖沼を充溢し、然る後に下流に向つて流出するものなれば、其害をなすこと比較的少く、よく調節の事をなすも、近來湖面埋立を急ぎて、此良調節機關を縮少せるために、災害小ならざるものあり。

湖沼は調節機關

氣候の調和

湖はまた沈澱の作用をなし、蒸餾作用をなすと共に、其性もと海洋の一部と目すべきものなれば、よく氣候を和げ、日中溫度の上昇するの日も、夏日炎熱の日も、比較的涼風吹き渡るが如く、夜間冬日に於ける溫度も、稍海洋的氣候を呈するものにして、更に湖沼の附近は一面に空氣の清澄なること、湖畔住民の幸福なる所にして、湖畔の地は、水中魚族の產あり、古代交通の不便なる日にも、海洋と遠隔して、魚肉の不足なるを補ひ、よく山中の眞味に飽くことを得しめたり、

淡水魚

されば、詩人山陽は、酒を灘伊丹に求め魚を琵琶湖に求めて、又大海の魚を言は

湖畔の美景

ざりしも、其美味却て海魚にまされるがためなり、此鮮を養ひ、此清洌の氣に浴し、こゝに湖畔の部落生じ、湖畔の美景を賞し、自ら慰安を求むること、意味なしと云ふべからず、まして湖畔の美景は、前述の如く詩歌の好題目たるため、此美景を賞し、詩材歌枕を探訪せんとして來遊する者少からず、今日各地の觀光客の群をなして巡遊する者少からず、内は國内の遊覽を主とするものあり、外來の貴賓相擁して來るあり、之を泰西にしては、伊太利瑞西の二地あり、特に立を瑞西が、アルプ山中に介在して、古來よく獨立を保持したると共に、常に局外中宣し、世界的團隊たとへば赤十字社の如きものの主催となり、一般諸國民の歡心を得ると共に、湖畔の美景は、實に繪の如く、露には乳白の水花岡岩の間を流れ、山は空に聳えて鑿の如く、湖心に宿す小羊の影、杜の影も面白く、綠野を走る小羊山羊の類あれば、老夫赤煉瓦の門に立て耕耘に忙しきが如き、陰となり陽となり、天空の彩雲其色彩を改むるの日、下は碧の湖水も亦之と其色と共にし、變幻の妙、筆舌の外にあり、而も國民擧つて外國觀光客を歡迎し、幾多の設備は

瑞西の湖

之がために設けられ、或は船車旅宿一切の連絡切符を製し、また案内者を配し、案内記を編し、かくて觀光費及び土産品の販賣額は比較的多額に上り、財源の一となれり。

湖畔の工業地岡谷

又日本に於ては箱根の蘆湖あり、日光に中禪寺湖あり、伊香保に榛名湖を配し、富士に八湖あり、筑波山と霞浦、會津飯盛山乃至盤梯山に猪苗代湖を、甲信の地方に諏訪湖、近江八景中に太湖を配し、相助長して共に觀光客を誘致し、湖沼の觀光客を慰むること大なりと云ふべし。

又湖畔の平地と共に、湖沼が工業を助長することあり、信濃岡谷地方が、日本生絲工業として、諏訪湖畔に一年數千萬圓の製絲を見るが如き、最注意すべきものなり。

四、湖沼生成の原因　湖沼の生成につきては、幾多の原因の存するあれども、火山の勢力によりてなれるものあり、舊噴火口に水を湛へたるものを火口湖となす、各休山に見る所の御池は多くこれに屬するものにして、御嶽二の池三池

四池五池の如き皆之なり、此種類に屬するものは、一般に廣大なるものなきも、深度大なることあり、清冽骨に迫るの靈水を貯ふるものあり、又火山の火口原に雨水を湛へたるものあり、火口原湖と稱す、蘆の湖の如き之なり、二重式火山の標本として注意せらるゝのみならず、火口原湖の死滅はやがて火口原となり、火口原は又火口原湖となることあり、其形狀多く弧狀をなして、中央火口丘を圍めるものなり、又火山の熔岩、或は噴砂の堆積によりてなるものあり、中禪寺湖の如き猪苗代諏訪二湖の如き之ならむ、或は火山の勢力によりて、其形狀を變化したる富士八湖の如きあり、或は皺曲の間に水を湛へたるものあり、又自然の低原に溜水せるものあり、四周の地より深く陷沒せるもの、琵琶湖の如きものあり、河流の發達せる三日月沼あり、石狩川に見るが如きものあり、海殘湖と稱すべきものあり、もと海岸なりし所に、堤の如き長砂生じて海洋より分てるものあり、これ波浪の勢力又は風力によるものにして、猿間湖の如き著しきものなり、又氷河作用によてなるものあり、氷河の勢力は微なるも、年々歲々流れてやまず、遂に山嶽又は地表を削磨し去りて、伊太利北部に於ける、コモ、マジコーレの如きものを生じ、更に氷河流轉して平野に出づるの際全く勢力を失ひて、茲に死滅するや、終堆石は積んで繰をなし、ロシアフインランドに於けるが如き、網狀湖となるものあり、また動物の勢力によりてなるもの、珊瑚礁湖あり、人力によるもの池沼あり、亘樣の池狹山久米の池の如き皆之なり、かくも生成の原因には複雜なるものあり、其原因不明瞭なるものあるあれども、多くは以上の原因に屬するものなり。

又湖沼の畔に存在する平地の如きは、或は膏腴なる農桑の地となり、又商工業地として、都府の盛大なるものあらはるゝあり、悉く茲に詳說するをとゞめん、また湖畔は古來退隱の地となれること多し、建御名方命これが初たり、北條氏の奇の信濃に入り、また天龍道人と稱して、其經路の不明なる退隱者あり、或は支那に於ける幾多の失意者が、湖上に釣を垂れたるが如き、皆異才ある士にして、其才を施すに術なかりしものなり、大國主命の出雲に鎭じ給へるも、また此

類なるべし。

第六篇　島と人

古人の島觀

一、古人の島觀　神代史を繙けるものは、大八洲の名に注意を惹くべく、また更に大八洲に降れりと稱せらるゝ、天孫民族の發祥地に疑を懷かざるものなけん、かの二神諸冊の神が、最初の寄航地は今の沼島附近の磯馭盧島なりと云へば、二神の出發地は、海洋の外ならざるべからず、是に於てか、高天原に對する考證多く、海外に存するものにも、馬來地方と、南清、韓半島、アルタイ地方、西亞細亞と、區々の說をなすものあれども、容易に判明しがたきに似たり、兎に角吾等の祖先は、海舟によりて、日本群島へ航したるなるべし、前章海洋の項に說けるが如く、幾多島嶼の間を往來し、以て自然の計をなし、又更に進んで發展の途を講せんとせり、されども舟筏の構造未だよろしからず、海路の探究明かならず、從て環海の國民も、海上に於ける武勇に至りては、陸上の豪壯なるに似もよらざりしなるべきも、尙四周の狀態に倣儀なくせられて、八洲の間を往來し、又半島との間にも往來つきざりしなり、海上を危ぶむ民族も、其建國は正に海權の獲占にあり、島嶼の探究にあり、一面日本の神代史は、日本群島の探險史と見るべく、八洲の發見は容易の事にあらざりしならむ、古來勇敢なる民族が、幾多の危險を冒して、此發見を遂ぐるまでには、其困難想像しがたき所ならむ、恰も歐洲大陸の民族が、海峽を渡りて英吉利を發見したるにも比すべく、既に島嶼を發見したる後にも、尙進んで之が經營のために、海上を航せしこと多かりしならん、會山幸海幸の二神の勢力を角するあり、海神之を援助して、よく山幸の神をして功を遂げしめたるが、海神の居たる龍宮の事に至りては、また漢として知るべからず、いづれにもせよ、島と島との間を、海路航行せるなるべし、

高天原

海上の往來

龍宮と蓬萊島

たゞ海上は前述の如く、奇怪妖怪の所在地にして、海上に散布せる島嶼も、また妖怪の居たるかの感を抱き、海洋を航するの困難と共に、人跡未到の海島に航するもの少かりしなり、また一面には之と反對に、龍宮の如く、また七重寶樹の

流謫地

繁茂する所の蓬萊島高砂島あり、一は危險なる死地となし、一は金銀珠玉の潤澤なる美地となすも、兩者共に確として指定せるものにあらねば、共に島嶼を了解せざりしこと明かなり、海洋は危險多き境界にして、此境界に臨むもの怒濤の襲擊を避けがたく、萬死に一生を幸せんとするものの他、また危險の地に向ふものなかりしなり。

是に於てか、古人は島嶼を以て流刑の地となすに至れり、遠中近の三流あり、罪の輕重によりて、其所を別にし、かの交通不便なるを利し、衣食の料多からざる見て、流刑に處して、大に之を苦めんとせるに至れり、されば流刑はただに島嶼に限るものにあらずして、また內地の僻地を以て之に充てたることあり、之をも島流と稱するに至れり頼朝の伊豆流刑の如きはこれにして、叔父爲朝が大島に流されたることより、世人は頼朝もまた島嶼に流されたりと思惟し、蛭子島の名あるを見て、之を島と心得るに至れるが如きことあり。

又一方には各國民の冒險者は、世人の恐れて近づかざるに乘じて、進んで新地の開拓に從事し、南進北侵領土の擴張に勗めたるの觀あり、フニニキア人の地中海を航せるも、日本人の遠く南洋に航せしも皆之なり、また後世に至りて、西葡二國の航海者が、盛に東西に航路を求め、遂に西印度より北米大陸に及び、北極洋中の島々を發見せんとするに至り、東方及南方に向つては、カナリ、セントヘレナ、アッスンションより印度洋の島々を經て、日本群島に及び、世界有用の島々は多く探險發見せられたるも、海を恐るゝことは尙一般人民の頭腦より去りがたき印象なりしなり。

泰西人の航海

爲朝と流球

源爲朝保元の亂に伊豆大島に流されたるも、かゝる偉人の綜跡は、古人のひとしく神祕なるものとして、其末路を不明ならしめんとせるが如く、史は傳へて大島に死せるものとなし、又更に南島の支配者となりて、琉球に王たるものとなす、馬琴の椿說弓張月の著はかくの如き後に生せり、又古傳浦島太郎の物語は、かの神代史の龍宮談と類するあるも、もと之れ一種の小說のみ。

椿太は流謫地

近き明治の後に於て、ロシアがサハリンの北部を、重罪人の流謫所となして、犯

王侯の島流

罪常につきず無頼の暴民が孤島によりて狼藉せりと聞くだに恐ろしきを古代に於て交通不便文運未開の時にあたり、大洋の一孤島に萬乘の天皇を移し奉れる暴戾の逆臣ありしこと、吾人の大に遺憾とする所なり、保元の亂れは、上皇天皇の爭はせ給へる所、福原の遷都は清盛自ら奉戴し奉れる所、安德帝の西巡もまた攝政たる人々の計にして、而も人臣を以て、帝座を動かし奉らんとにはあらざりしなり、然るに北條氏の暴戾なる、遂に後鳥羽院を隱岐の島に移し奉れり、增鏡の新島守の項に

新島守

『ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたちわかれ、おのがちりぢりにさすらへいその宮屋に軒を並べて、自から事とふものとては浦につりするあまを舟鹽やく煙のなびく方をも、我ふるさとのしるべにかとばかりながめ過させ給ふ、御すまひどもはそれまでと、月日を限りたらんだに明日しらぬ世の後めたさにいと心細かるべし、まいていつをはてとかめぐり逢ふべき限だになく、雲の浪、煙の波のいくへとも知らぬさかひに、世をつくし給ふべき御さまども、口惜しと云ふもおろかなり、このおはします所は、人ばなれ里遠き島の中なり（中略）はるばると見やらるる海の眺望二千里の外ものこりなき心地する、いまさらめきたり、鹽風のいとこちたく吹きくるを聞じめして、

我こそは新島守よおきの海の荒き浪風心して吹け

同じ世に又すみのえの月を見む今日こそよそにおきの島守、又更に、

ねざめして聞かぬをきゝて佗しきは荒磯波の松風の聲とあるを、法皇もいみじとおぼして御袖いたくしぼらせ給ふ、

浪間なきおきの小島の濱ひさし久くなりぬ都へだてゝ

木枯の隱岐の柚山吹きしほり荒くしほれて物思ふころ』

と後鳥羽院のなげかせ給へるそのかみに生れなば、いかにもなさんになど、齒くひしばらるゝもかいなけれど、之を人臣にしては荒き鹽風吹きすさぶあたりに、ばし流人となさんことのあらんも十善の帝王に對する道、恐ろしとも恐ろしき次第なるべし。

順德院後醍醐帝

佐渡の島守となられ給へる順德院、後鳥羽院の後を追はせ給へる後醍醐帝、だ
だ涙の種とのみ悲しまるゝふしなり、かの鹿ヶ谷の評議洩れて、三人鬼界島に
下れる日、主僧俊寛を尋ねて、はるばる西海の波間に浮沈せし、有王丸さへ悲き
ことよと、哀にも思はるゝを。

有王丸

此等の行爲はいづれも皆海を恐れたる結果にして、一は海上の交通危險なる
ため、又海賊の如きものゝ各海島に出沒して、行旅の害をなしたれば、諸國の守
介たる人さへも尙海上の行を恐れ、常に兢々として安んぜず、一般社會の海洋
を恐れ海島に行くを憚りしは知るべきなり。

島と文學

二、島と文學　吾國を初めとして英國の如き島帝國、または島を領有せる國多
けれども、古來島を歌へる詩歌の少くして文學と島と相親まざりしはかの海
洋と人類が親まざるとは趣を異にするも、詠題に上らざることは一なり、之れ
文學の中心たる都城と、島と緣なきにもよりたるなるべし、かの內海の東方に
ありて須磨明石と相對し、また難波福原の舊都と程遠からず、常に都人に緣故
ありし淡路島は、諸島の中にありて、特に文學と交渉せるのみ。

淡路島

萬葉集に、

難波がた鹽干にたちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ
住の江の岸に向へる淡路島哀と君を言はぬ日はなし
わぎも子を行きて早見ん淡路島雲井に見えぬ家つくりしも

古今集に、

わだつみのかざしに立てる白妙の波もて結へる淡路島山

堀川百首に

大鹽や淡路の瀨戸のふきわけに上り下りの片帆かく也

山家集に

淡路せと磯わの千鳥聲繁しせとの鹽風さえまさる夜は

源氏物語明石卷に

阿波門みる淡路の島の哀さへ殘る隈なく澄める夜の月

沼島又野島オノコロ島とも云ふ

萬葉集

朝風に梶の音聞ゆみけつ國野島の海子の船にしあるらし
あかほりし野島は見せつ底深き阿古根の浦の珠ぞ拾はね

古事記曰、仁德天皇、欲見淡道島、而幸行之時、坐淡道島、遙望歌曰、
おしてるや、那爾波の崎よ、いでたちて、おがくにみれば、
阿波志摩淡能碁呂志摩阿遲摩佐の志摩もみゆ佐氣都志摩みゆ

新井君美

淡路島

萬歲幽宮閟、孤洲植水回、風雨天柱壯、煙霧海門開、樹色波間動、潮聲
月裡來、蒼梧南狩後、落日望中哀、

又近江竹生島は古來注意せらしものにして、懷中抄に、
目にたてゝ誰か見ざらん竹生島波にうつろふ朱の玉垣

高積善

竹生島詩

靈島聞名遙寄懷、秋風尋到立徘徊、老松古柏相重插、怪石奇巖似欲頹、
行雨終朝連水見、低雲溟暮抱山廻、有神此上幾年久、天下精誠任浪來、

釋六如

東徑煙樹逗微月、一牕寒梅香初發、深澗三聲雨聲鳥、陰崖去年今年雪、
聞說竹嶼卜隱居、煙水僅隔十里餘、湖上山中應相憶、漁笛雲聲共有無、

梁田邦美

琵琶湖上白雲秋、蒼樹依微笙島幽、神女樓臺何處是、徒教明月照扁舟、
上竹生島

岡本黃石

雲衣影落古壇淨、金榜光飛深窟明、剩有天風吹不斷、琤々宛作步虛聲、
聞人將游湖中遙有此寄

齋藤拙堂

落木哀鴻湖上秋、輕舟覓勝向笙洲、煩君憑弔平公子、萬頃琵琶千古愁、

安藝倉橋島(一名長門島)

安藝國長門島　船泊磯邊、作歌五首(萬葉集)